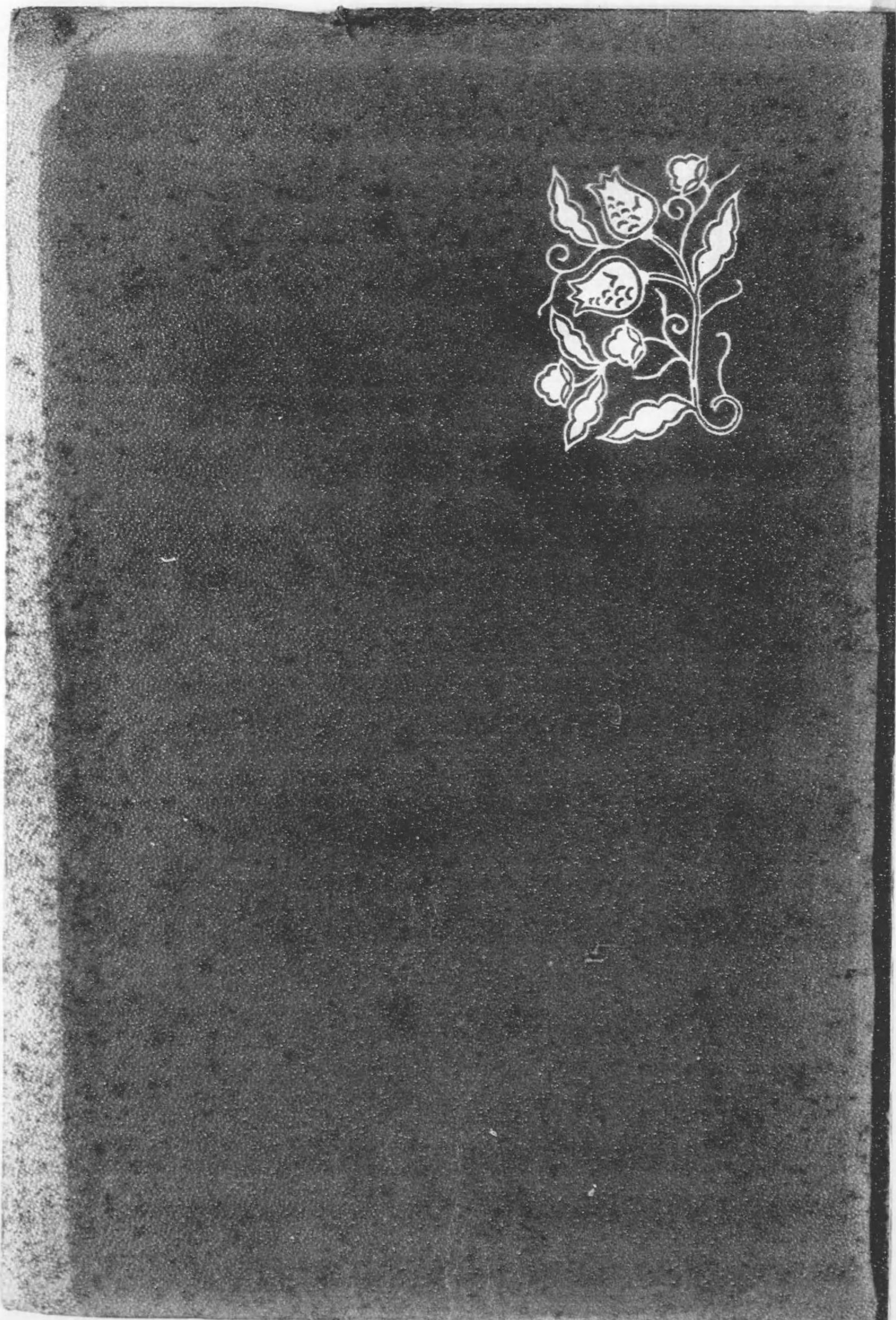
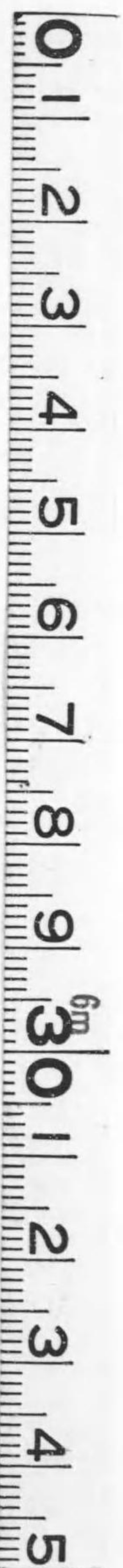


始



特213
153



新日本への若き教師

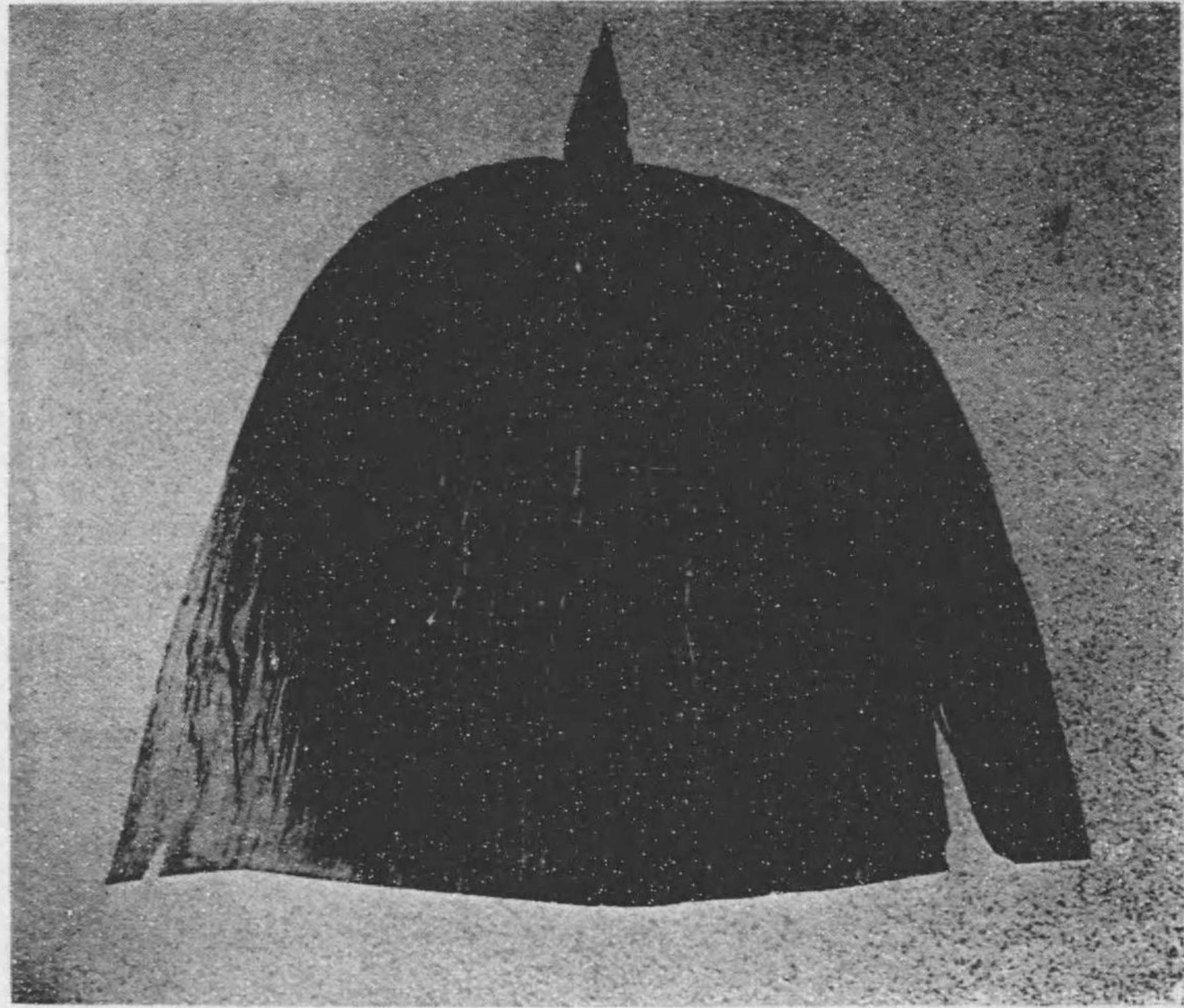
白土千秋著



株式會社
教育研究會發行



男爵平沼騏一郎閣下題字



大正十二年。今上猶東宮ニ在マセシト
 キ、臺灣ニ行啓シタマフ。一日精糖會社
 阿緞工場ニ臨マセラレ其ノ作業ヲ覽タマ
 フ。庭ニ休息所ヲ設ク、竹檣板屋、茸ク
 ニ茅茨ヲ以テス、殊ニ清楚ヲ極ム。其ノ
 竹ハ山庄ニ擇ビ、伐採シテ已ニ四十餘日
 ヲ經タリ、然ルニ行啓前數日、新芽ヲ竹
 檣ノ一節ニ抽キ珊瑚瓊菜翠色餐ス可シ。
 東宮寓目シタマヒ摩抄シテ嘉尚シタマフ
 陪觀スル者咸以テ奇瑞ト爲ス。實ニ歳ノ
 四月二十二日也。是ニ於テ社員謹ンテ之
 ヲ培養シ年ヲ經テ鬱茂シ、遂ニ叢林ヲ成
 セリ、名付ケテ瑞竹林ト曰フ。予客年事
 ヲ以テ臺灣ニ至リ、親シク其ノ林ヲ觀、
 深ク恩澤ノ樹竹ニ及アラ感シ、新籜二葉
 ヲ乞ヒ得テ、其ノ一ヲ平沼男爵ニ獻シ、
 剩ス所ヲ裝ヒテ扁額ト爲シ、請フニ揮毫
 ヲ以テスレバ、直ニ彌榮ノ二字ヲ拜見ス
 ルヲ得タリ。年ヲ越エテ昭和十四年ノ春
 光ヲ迎フレバ新年初頭恰モ平沼男爵ハ内
 閣總理大臣ニ親任、國政變理ノ大任ニ就
 カレ、新東亞建設ノ使命ニ向テ邁進ノ意
 圖ヲ表明セラル。彌榮ノ文字本著ノ趣旨
 ニ亦最モ能ク好適スルモノアリ、即チ乞
 フテ以テ題字ニ掲グ。

著者識

男筒半滑靴、郎閣下題字



大正十一年、今日猶東京に在り。其時、日精靴會社、余等、行啓、其、作業、覽、之、一、庭、休息所、設、竹樓板屋、草、草、茨、以、之、殊、清楚、極、其、竹、山、庄、擇、之、代、探、已、四十餘日、行、啓、前、數、日、新、築、竹、樓、抽、欄、柯、增、榮、翠、色、輝、可、東、宮、寬、日、之、摩、抄、之、高、尚、之、者、成、以、奇、端、極、實、哉、其、一、日、於、社、員、集、之、培、善、年、計、瑞、竹、林、日、之、客、年、事、以、幸、歸、至、親、其、林、觀、深、思、潭、樹、竹、及、魚、新、築、二、年、乞、符、其、一、平、沼、男、爵、之、稱、所、裝、之、編、細、以、論、之、揮、毫、以、一、八、直、彌、榮、二、字、其、見、之、得、之、年、其、瑞、和、十、四、年、在、光、輝、之、新、年、初、頭、恰、平、沼、男、爵、內、閣、理、大、臣、任、任、國、政、理、大、任、與、之、就、東、亞、建、設、使、命、向、進、進、魚、國、之、友、朋、一、彌、榮、文、字、本、著、極、其、亦、最、宜、好、也、其、一、御、之、以、一、彌、榮、二、字、著、者、其、

はしがき

今次の支那事變は眞に驚天動地の世界史的な一大出来事である。今や日出づる國の燦然たる光輝は新しく東亞の天地を照らし、萬邦亦齊しく其の餘光を瞻仰するの有様である。何と云つても今後の日本は全アジアを率ひて立たなければならぬ。彼を指導し之をも誘掖して行かねばならぬ。時代は全く極度の一大轉換を爲して來た。この時に當つて絶叫する吾人の最大急務は、斯の新時代の新日本を負擔して堂々闊歩するに足るだけの大國民を作ると云ふことである。即ち國民教育の上に劃期的な大革新が加へられなければならぬ。之が爲には總ての教育者が從來の舊套を潔よく脱ぎ捨て、全然新しい仕度で事業に取り掛からなければならぬ。併しながら此の新仕度は因襲の囚はれとなつてゐる既成教師には甚だ不似合である。どうしても之は新進の人に俟たなければならぬ。之れ著者が斷然『若き教師』に呼び掛けて以て大々的に其の奮起を促した譯である。斯くして著者はどこ迄

も意氣に富める有爲の教育者の出現を冀つて止まない次第である。

昭和十四年一月新春の光を東都の寓居に迎へて

著者 白 土 千 秋

二

新日本への若き教師 目次

第一 緒 論

一、興國の原動力は懸つて「若き教師」の双肩に在り……………一

新日本の意義——何と響くか若き教師といふ言葉

二、教育者の意氣を高めよ……………七

現代の大時局と若き教師——近世教育史上に於ける回顧——英佛百年戦争

——國家教育構の確立——ナポレオン一世の出現と歐州の震撼——二人の

若き教師の出現——ベスタロツチ氏の事業と愛國運動——ナポレオン一世

とベスタロツチ——聽けファイヒテの叫び——ナポレオン戦後の時代と現代

列國の狀勢——若き教師の總立——若き軍人の奮起——獨逸に於ける小學

教師の意氣

第二 清新な「若き教師」の教育力……………三

一

- 一、老成が黄金時代なら「若き教師」はダイヤモンド時代……………二二
- 若い老教師と老いた若教師——獨逸の某老教師……………二三
- 二、一種の教育的ホルモン……………二三
- 若き教師の特権——老教師と若教師の對比——若き大教育者吉田松蔭……………二三

第三 先づ人生を大觀せよ……………二九

- 一、淡雪の如き喜び……………二九
- 教師への新任、人生への首途……………二九
- 二、人間の四階級……………三三
- プラトーンの階級論——最高級たるべき教育者——教育者の存在と社會の矛盾……………三三
- 三、最高の使命には最高の奮闘が必要……………三四
- 日本人の世界的大使命を歌つた哲人ポール・リシャール氏の詩——我が日本の人類世界に於ける大使命……………三四

第四 特長を作り特長を發揮せよ……………四〇

自己の特長と教育力——自己完成

第四 炎ゆる向上心……………四二

- 一、ビールの氣の抜けた様な教師は駄目……………四二
- 教育退嬰の原因——著者の勤勞教育研究——親しくミュンヘンにケルシエ
 ンシュタイナー氏を訪ふ……………四二
- 二、研究五ヶ年計劃……………四六
- 向上生活と研究計劃——五ヶ年計劃の理由——極力獎むる讀書——教師の
 讀書の部面——修養書の選擇——倫理哲學の研究——進展の早い教育學及
 び教授法——間違つたこと丈は絶対に教へてならぬ——國民教育は國體教
 育——階段的？併進的？多讀？精讀？……………四六
- 三、學級經營の中に校長學あり……………六一
- 校長になりたい、それは野心ではない——一學級は一學校の小模型——獨……………六一

逸に於ける綜合教授

四

四、金溜は止して購書と旅行を……………六

書物が財産——旅行は識見を高める——著者の歐羅巴旅行

第五 教育者の理想信念及び識見……………七

一、今の若き教師の最大缺點……………七

何故の理想？信念？識見？——臺灣教化に殉じた壯烈悲愴の信念

二、大教育家の傳記を讀め……………八

抽象的な理想信念には力がない——傳記を讀む注意

三、惟神道の研究に就いて……………八

自己の思想體系の確立——惟神の大道を宣揚するの勅語——今上陛下御即

位の勅語——惟神道とは何か——道と教との區別——敬神の實行に依る惟

神道の體得

四、云ふ事は云へ、爲すことは爲せ……………九

眞の沈黙とは云ふべきは云ふことである——同志自由研究會

第六 起て！愛國教育の爲に……………九

一、愛國教育とは何ぞ……………九

平時の愛國心涵養——獨逸に於ける愛國教育——獨逸の一兒童の反擊

二、教育の眞髓は愛國心の涵養に在り……………一〇

愛國教育の外に國民教育はない——火藥を込めぬ教授法は駄目——獨逸國

民が自ら見出した戰敗の原因——ケルシエンシュタイナー氏の愛國的勤勞

教育——獨逸兒童の愛國心の表現——大總統ヒットラーの教育精神——愛

國教育に何れ劣らぬ英佛伊——ムツソリーニの教育革新——若き教師の責

務

第七 兒童愛の教育と献身的努力……………一三

一、愛は教師の最大資格……………一三

愛は教師心中の眞珠——大愛は理窟ではない——噫！松本訓導——愛の

五

犠牲殉難教師十八氏

六

二、児童名簿は教師一代の寶物……………一四二

教師の眞の楽しみ——愛の心に折り込んだ児童名簿

第八 男教員と女教員……………一四四

一、男教員と女教員との教育地位……………一四四

アメリカの女教員——完全教育と兩性感化——女教師の缺點——將來我が國勢と女教師

二、若き教師と性の問題……………一四九

禁慾生活超越生活は教師には禁物——或る驚くべき裏面記事——風紀の維持者——不品行ナルソー——ベスタロツチ先生とアンナとの愛交

第九 結 論……………一五七

一、若き教師と禊の國民的復興について……………一五七

禊と國民教育との關係——禊祓の意義及び起源——日本精神と清明心——

禊と八絃一字の天業

二、品性を高めよ……………一六三

職業階級と風格——教師の不遇の原因——教師の品性向上の意義及び方法——純潔——節操——宗教——趣味

三、若き教師と青年指導……………一七三

児童が發芽なら青年は眞芽——青年の矜りと理想——青年團の指導——國家をねせ起しする獨逸の青年運動——ナチスの勃興と青年運動の統一——伊太利に於ける青年運動

四、新日本への大國民的陶冶……………一八六

新日本への國民陶冶の大目標——大國民の資格——質實剛健は大國民の必成條件——若き教師の大局的任務

以上

七

新日本への若き教師

第一 緒 論

一、興國の原動力は懸つて「若き教師」の双肩にあり

新日本の
意義

「新日本」とは「支那事變後の日本」の謂である。

「支那事變後の日本」とは「躍進日本」の謂である。

「躍進日本」とは「新東亞建設日本」の謂である。

熟ら悠久たる過去の我が歴史を顧み、靜かに推移の由て來る所を考へると、今回の支那事變が斷じて偶然の出來事でないことが明々白々として知悉せらるゝのである。既に已に大初祖神の神勅の中に、我が肇國の大精神が天地の化育に參じ世界遍照の大理想に向つて

進まんとするものなることが窺はれる。次いで神武の奠都より韓土の内附、奈良、王朝、幕府の各時代を経て明治の大維新と成り、大正また其の後圖を受けて遂に雄躍乾坤昭和の現代に至つたのであるが、

凡ゆる過去の各時代は總て現代

昭和の新日本建設に至る準備の

一大連鎖であつた。……と云ふことが出来る。

今回の支那事變は我が國史の上に一大紀期を劃すべき眞に驚天動地の大事變である。國民は上下擧つて此の大時局に當つた。されば軍人の献身的努力は云ふも更なり、或は産業報國とか或は農業報國とか或は何々報國と其の聲國內に普く充ち満ちて居る。唯獨り教育報國の叫びが教育者の間から餘り漏れて來ない。之は何故であらうか？ 吾々教育者に果してそれ丈の熱がないのであらうか？ さうだくと考へる人が有つたらそれは甚だ淺見であると云はなければならぬ。勿論何々報國、寔に結構であるが、それ等はそれと或る局面に立脚したものである。それには自ら分野がある、國民教育は決して或る局面や分野

に立脚するものではない、苟も國民教育と云へば其の事が初より報國に外ならぬ、報國的でない國民教育は初よりない筈である。

それよりも吾々の中心努力は國民教育の眞髓に在る。それは次の時代を創造すると云ふこと、即ち、國家伸展の理想を確認し其の實現に向つて邁進すると云ふことである、而も其の理想は決して星の影を掴まんとするやうな虚々實々の理想ではなく、確乎たる現實に立脚して着々として實現さるべき理想でなければならぬ。今や我が國民は曠然として斷行すべき目前の理想に迫られて居る。それは何であるか？ 即ち東亞の全局を率ふべき新日本を建設すると云ふことである、之が必至に實現さるゝに非ざれば過去の凡ゆる準備も現在の莫大なる犠牲も總てあたら水泡に歸して了ふ。

抑も我が日本と云ふ國は

世界に於ける最古の國であると同時に亦世界に於ける最新の國である。

最古と最新、一見矛盾の言のやうであるが決してさうではない、本來日本は生成發展の國である、それには非常に古き傳統と非常に大なる根柢とがある。それが愈々新なる更に

大なる發展を遂げしむる所以である。最早日本は東洋の一島國ではない。將に大陸的な東亞的な新日本を建設すべき一大機運に到達したのである。而して

日出づる國の天子の

大稜威によつて世界を

遍照する、而して

そこに眞の世界的

平和が建設される。

現に今我が國民は支那大陸に於ける頑迷不靈暴虐なる軍閥を木葉微塵に敲き潰しつゝある。而して善隣の民を塗炭の苦しみの中より救ひ、隸屬せる者には獨立を興へ、虐げられるものには安住の地を興へ、斯くて東亞の諸民族を率ひ、彼等の資源を開發し、彼等の技術を指導し、以て皇道文化の惠澤に浴せしめ、更に之を全世界に風靡し以て列國各々其の所を得て大和の世界實現せられなければならぬ。そこに八紘一宇の天業が大成せらるる所以である。

而も眼を世界列國の狀勢の上に放つ時は波瀾重疊である、現在及び將來に於ける斯の重大時局を考ふる時、我が帝國々民の責任は眞に重且つ大である。外交の掛け引位ではやつて行けぬ、政治の新機構、軍備の充實、貿易の伸展等皆それ〴〵必要であらう。然し最も深刻なる考慮は凡ゆる根本の根本を教育の中に求めしむる。即ちそれは「人を作る」と云ふことだ、實力の充満した國民を基礎とせざる國家の發展は砂上の樓閣に過ぎない、——一年の計を爲すものは稻を作れ、十年の計を爲すものは樹を植ゑよ。百年の大計を建てんとするものは人を作れ——と云ふことがあるが、我が天壤無窮の國體に於ては十年や百年のことではない。正に永久の大策が樹てられなければならぬ。而もそれは時々刻々と現實に實行されて行かなければならぬ、そこに新日本を形作るべき次代の國民たる兒童そのもの、教育と云ふことが非常に重大なる意義を有する所以である。現代教育者の一大自覺は此の點に集中せられなければならぬ、而して此の大自覺には大實行力が伴はなければならぬ。こゝに至つて、凡ゆる期待が「若き教師」の上に呼び掛けられる譯である。最早勇氣の消耗した老教師では駄目である。

何んと響くか若き教師といふ言葉

然るに

「若き教師」と云ふ言葉を放つた時、それが社會の人々には若き官吏や若き實業家などと較べられて何と聽えるであらうか、將又、何と響くであらうか、寧ろそれは何とも聽えぬかも知れぬ、何とも響かぬかも知れぬ、馬耳東風に丸で問題にもされず、偶々耳に入れた人には不景氣な「意氣地無し」の代名詞位にしか聽えぬかも知れぬ。

これは我が國に於ける多年の「若き教師」に對する風潮から觀て云つた言であるが、併し教育者を輕侮する様な風潮は一日も早く斷然一掃しなければならぬ、如此風潮が我が國に流れて居る間は決して我が國家の眞の發展は得て望まれないのである。

余は斷言する。

邦家興隆の原動力は懸つて「若き教師」の双肩に在りと。

「若き教師」とは即ち新日本の教師の謂である。清新の實行力と氣鋭の發展性とに富んだ教師の謂である。

現代の大時局と若き教育

二、教育者の意氣を高めよ

今や世界は有史以來未曾有の一大轉換の時期に遭遇しつゝある、而かも其の大勢は潮の如く澎湃として押し寄せつゝある。苟も斯の大潮流に掉すことに後れを取つた國家は落伍の運命を迎るに極つて居る。興隆？ 衰退？ 伸展？ 凋落？ 孰れの國も此の岐路の上に立つて居る。斯かる重大機局に際會した教育者。就中「若き教師」こそは、待つて居ましたとばかり意氣昂然たるものが無ければならぬ。堂々と取つて掛かれ、苟も若き教師が意氣消沈遲疑退嬰することあらば國家の前途からはもう光明は消え去つて了ふ。

吾等をして暫く過去の歴史の一劃期エポックに就き回顧せしめよ、それは歐羅巴に於ける近世文藝復興時代からナポレオン戦争時代迄のことである。

即ち、中世紀に於ける天國の夢漸く醒めて、近世紀の幕が切つて落さるゝや、多年の鬱氣が一時に吹き破られたかの如く、歐洲の天地は凡ゆる方面に向つて頻りに新氣運が躍動し來つたのである。即ち先づ伊太利に於ける文藝復興運動に依つて古希・羅時代の間

近世教育史上に於ける回顧

自然の慾求と自由探究の精神とが勃興し、つゞいて印度航路の發見、アメリカ新大陸の發見、印刷術や鐵砲其他新兵器の發明等があり、更に宗教改革運動さへ起りて精神的にも物質的にも頻々として人心を鼓舞刺戟し新生の氣分が漲つて來たのである。就中注目すべきは新知識の發展と眼界の擴大とに依つて、歐洲諸國民をして大に國家的觀念を喚起し、纏めてそれが國民運動と成つて表はれたことである。殊に古代研究の結果、頻りに古羅馬に憧がれ羅馬風に反らんとする風潮を生じ、又羅馬法の研究に依つて國家主權の強大觀念をも生じて中央集權の風が助長されて來た、中にも英佛百年戰爭は英佛兩國民に甚だしく國民的自覺を喚び起し、これ等の趨勢は延ひて西班牙、葡萄牙、獨逸、伊太利、和蘭等に迄及び、王權の伸張に伴ひて多年割據の封建制度は古瓦の如く崩壊し、民族的國家統一の機運は益々進展した、斯くの如くして國家統一の機運の盛んなるにつけ、必然強大國家の慾求が強められ、加ふるに此頃の一つの流行として海外探險が頻りに行はれ、その結果競ふて植民地が到る處に設けられ、通商貿易は愈々催進され、各國とも負けず劣らず富國強兵に熱中し、大に國力を充實して益々自國の優越を圖らんとするの勢を醸成したのであ

英佛百年
戰爭

國家教育
權の確立

る。茲に於て當然起る可き問題は——國家が直接國民の教育權を掌中に收むる——と云ふことである。自ら國家の目的に適合した人物を作らなければ駄目だと云ふことに孰れの國も氣が付いて來た。所謂、普通教育の萌芽は爰に發したのである。即ち從來の法皇の權力下に行はれて居つた宗教學校の手から脱して、各國それ／＼の國語を以てする國民教育が生れて來たのである。實に十六世紀の頃より地方侯伯にして學校令を發布するもの續々として踵を相接して出で、就中千五百二十八年に制定されたザクセンの學校令は此種法令の率先者模範者とも云ふ可きものであつた。

斯くて國家主義權力主義の競争は益々激甚となり、國といふ國は孰れも／＼斯の競争の渦中に巻き込まれぬはなかつたが、殊に佛蘭西大革命の激潮に乗つて天馬空を翔けるが如く出現したナポレオン一世の大活躍は縦横無盡に歐洲の天地を震撼した。滅茶苦茶羅に踏みにじられて了つた、就中慘酷にやられたのは獨逸であつた。斯うなつては孰れの國も何とかして自國の國民を結束し、國土の防衛と國家の再興とを圖らなければならぬ。否らざれば手を拱ぬいて國滅に歸するの外はないのであつた。

ナポレオン
一世の
現と歌州
の震駭

國亂れて忠臣出づ、即ち茲に殆ど時を同ふして烈々として愛國心に燃ゆる二人の若き教師が出現したのである。

其の一人はベスタロツチ氏その人であり、他の一人はファイヒテ氏その人であつた。

ベスタロツチ氏が児童愛の精神に充ち満ちた愛の教育者であつたことは誰にも知悉されて居る所であるが、氏がそれにも増して熱烈な愛國教育者で有つたことには餘り多く氣付かれて居ない。ベスタロツチ氏は初は當時の小學校とも云ふべき羅甸學校に學んだが、最後にコレギウム・カロリータスと稱する神學科大學に入つたのである、こゝに於て氏はポードメル (Podmer) 及びブライチンゲル (Breitinger) の二人の教授から特に大なる感化を受けたのであるが、中にもポードメルは學生間に最も多くの感化を與へた人であつて、自ら愛國的團體を造つて多數の學生を結束して居つた、ベスタロツチ氏も二十歳にして熱心なる其の會員の一人で有つた、此の團體に於ては毎週一回會合した學術上の論文若くは愛國的問題に就きて討論をし、又、愛國者と題する週刊雜誌をも發刊されてベスタロツ

チ氏もそれに關係して居つたのである、氏は初は牧師になる考へであつたが此の團體によつて愛國心が養はれ國民的精神を鼓吹せられ、遂に熱誠なる教育家と成つたのである、勿論ポードメルの愛國的教育運動の感化に依ること大なるも、其の根本はベスタロツチ氏自身に、教育に非ざれば天下國家を動かすことは出来ないと言ふ、大なる考へと強き決心とが有つたからである、其の後氏はルソーのエミールを愛讀して大に其の影響を受け、氏の教育上の意見も益々成熟して來たが、兎に角ベスタロツチ氏が溢れんばかりの温情を以て児童を愛したのも、熱せんばかりの努力を以て教への道に精進したのも、總てあの當時の渦の逆巻くが如き時代に生れ慷慨悲憤何とかして國を救ひ民を濟はんとの至情に出でたものに外ならぬのである。氏がチューリッヒより程遠からぬビルと云ふ處に土地を買入れ自らノイホーフと名づけ、農事經營を企てながら貧民學校を創立し自給自足に依つて教育の實行を試みたのは氏が二十九歳の時のことである。其の後瑞西は佛蘭西軍の侵入する所となり家も人も踏みにじられて了ひ、多數の孤兒を生じた爲め之等を救はんが爲に氏はスタンツに孤兒院を設けた、所が僅か半年ばかりにて又々戰亂の爲にスタンツの孤兒院は閉

鎖の止むなきに至り、同時に氏も此の土地から追はれて了つた、併しベスタロツチ氏は災難や困苦の爲に救國濟民を目的とする教育事業を思ひ止まるには餘りに信念の強い人であつた。氏は更に又ブルグドルフの城内に一つの小學校を設立した、この時代に於て氏の教育思想は全く出来上つたと云つてもよい、随つて又、ベスタロツチ學校の名聲も俄かに四方に喧傳され、諸方より見學に来る者も多くなり、政府も委員を擧げて氏の教育法を調査せしむる様になつた、然るに間もなく當時の瑞西政府は顛覆して、數年を出でざるうちに此の學校も閉鎖の運命を免れなかつた。

斯くて瑞西はナポレオンの命じた政府によつて統治され、國民は内心決して満足して居なかつたのであるが、其後ナポレオンは瑞西を佛蘭西政府の直接統治の下に置くことを斷念して瑞西聯邦の自治を認め、各州間の平和を維持する爲めの最良方策を議する爲め、瑞西國民に委員を選出せしめて之をパリに召集した、ベスタロツチ氏も擧げられて其の一員となつたが、氏はパリに着くや直に先づナポレオンに會見を申込んだ、然るに世界一統の雄圖を抱けるナポレオンは、「あゝあのABCの問題？ 余はABCの問題を考へるより、

ナポレオン一世と
ベスタロツチ

もつと爲さなければならぬ重大な仕事がある」と云つて其の會見を拒絶した。ベスタロツチ氏は可なり久しくパリに滞留したが遂に空しく去つてブルグドルフに歸り、同地も亦退去の止むなきに至りどこ迄も不遇の人であつたが、氏の最後の事業は彼の有名なるイヴェルダン學園の建設となり、氏は約二十年間こゝに教育の爲に奮闘した。氏の教育界に於ける全盛時代は此の時に現はれたのである。而して氏の教育精神及び方法が獨逸に流れ込み獨逸復興の原動力となる因縁は主としてこゝに結ばれたのである。

あゝ、ナポレオンはABCの問題を考慮しなかつた。彼は破竹の勢を以て歐洲を席捲し彼の馬蹄の下に國々を戰慄せしめた其の得意は察するに餘りあるものが有つたが、彼れの馬蹄に蹂躪された獨逸は併しながらフイヒテに依つて先づABCに思ひが潜められ、後年の普佛戰爭に依つて獨佛全く其の地位を轉倒するの要因を作つたことは、思ひこゝに至つて吾々の奥深き心の底に無量の感慨の往來するを禁ずる能はぬのである。

一八〇六年十月エナーの一戦は獨逸をして全くナポレオンの劍の下に屈服せしめた、彼等の受けた屈辱は聞くに忍びざるものがあつた。首都伯林は佛蘭西軍に依つて肆に蹂躪せ

聽け！フ
イヒテの
叫び

られ、皇帝ウイルヘルム三世は皇后ルイゼと共にケーニヒスベルグに蒙塵した、チルヂツトに於て締結せる條約の定むるところに従ひ獨逸は、エルベ、ライン兩河間の地を佛國に割讓し、其他幾多の電難件を負せられ、堅婦ルイゼ皇后の畢世の働きに依つて辛うじて國家の滅亡だけは救ふことが出来たが、國威は全く地に墮ち、國民の意氣は全然消沈し復興の望全く絶えて唯ひたすらに佛軍の嚴重なる監視の中に慄へ戦いてゐたのである。だが獨逸が全然泣寝入つて了ふ前にはまだ潜める大なる叫び聲が残されて居たのである。それは哲學者にして且つ教育家たる熱血男子フイヒテ其の人の聲であつた。氏は斯の如き大國難に際會し其の透徹せる頭腦と噴火山の如き意氣とを以て、かの有名なる「獨逸國民に告ぐ」の講演を絶叫した、此の公開講演は十四回に亘つて行はれ眞に決死の獅子吼であつた。この頃伯林の市街は佛蘭西軍の水も漏さぬ警戒裡に在り、ナポオレンのスパイは隨所に微行し、苟も怪しと認むるものは續々拘引し多くは銃殺された、無論フイヒテの講演會場にもスパイは出入したのである。街を練り歩く佛軍の太鼓の響は彼れの講演を掻き亂して幾度か聞き取れなくしたと傳へられて居る。

氏の講演内容を詳述することは茲に其の遑を有しないが、氏は今日の屈辱の最大原因は獨逸國民そのものに内在する、そは國民が公に殉ずるの心を忘れて各自の利益に没頭したからである、この國民の利己的精神を焼き掃つて了はなければ到底國家を淪落の底から救ひ上げることは出来ない。唯そこに一つの道がある。それは、救國濟民の至誠と熱情とを以て考究唱導されて居るヨハン・ハインリヒ・ベスタロツチ氏の新教育法を採用するに在りと、氏は之を第九講に於て縷述した、而して第十講に於て主としてベスタロツチ氏を紹介した。

この講演は絶望の底に沈める獨逸國民に深き感銘を與へ、新たなる生命を吹き込んだ。そしてベスタロツチ氏の思想と方法とを最も意識的に獨逸に移し植ゑんとする態度をも醸成した、ウイルヘルム三世も決して盲目では無かつた「吾々は領土、力、光輝を失つた。併しながら吾人が國外に失つたところのものを國民の心の中にもたらす様努力しなければならぬ、そこで余の主なる希望は國民教育に最大の注意を拂ふことである」と宣言した。ルイゼ皇后も亦深く意を教育に傾け、ベスタロツチ氏の著「リンハルトとゲルトロード」

を読んで大いに感激し、その日記の中に「人類の名に於て、ペスタロッチ氏に感謝する」と書いてゐるのである。尙ついでに書き漏らしてならぬことは、彼の有名な教育者ヘルバルトのペスタロッチ氏を訪れたことである。氏はエナ大學の卒業後メルヒリンゲンのフォン、シユタイガー家に家庭教師として聘せられて居たが、ペスタロッチ氏のブルグドルフの盛名がまだ左程に揚つてゐない頃、ペスタロッチ氏を訪ふて其の教育の實況を視察したのである。ペスタロッチ氏はこの年若き教育者を大に歓迎して、夕方であつたにも拘らず、街から六七才の兒童を十数名呼び集めて實地授業をして見せたと云ふことである、恐らく獨逸人に最初にペスタロッチ氏を紹介したのはヘルバルトで有つたであらう。

以上、續述する處の歴史的回顧に依つて吾々の胸奥に如何なることを思ひ浮ぶ可きであるか、斯く考へた時眞先に躍り出づるものは、當時の時勢と今日の時勢とが能くも似通つて居ることである、而かも現時の國際情勢はより以上に複雑紛糾を極め、比較にもならぬ大袈裟なことである。彼の當時は何と云つてもそれは狭い歐羅巴だけのことであつた。今日の舞臺は全く世界的である。ヒットラーが片手を舉げて直に世界の耳目を欬てしめる

ナポレオン時代の後
の現勢

ムツソリニーが一と聲叫んでも忽ちに世界を聳動させる。

斯かる大勢の眞ツたゞ中に現に我が國は堂々軍旗を支那大陸に翻して押し進めて居る。世界の孰れの國も國もが嫉視妄動暗躍を逞ふして居る、何と云つても重大時局である、吾々はこの現在の時局に處すると共に、進んで戦後のことも深く考へなければならぬ。我が國の前途にはまだ幾多の難關が横つて居る、前途はまだく遼遠である。而して現實に東洋を救ひ、又、世界指導の地位に立たなければならぬ。彼を思ひ是を考ふると、今の我が國には一人や二人のペスタロッチ、フイヒテ位では到底間に合はない。否！ 幾百幾千居つても足りない。教育者の眞に奮起すべきは斯の秋である。就中「若き教師」が總立しなければならぬ時である。

論者或は言はん……何もそんなに喧囂したり憂慮したりするやうな必要はないではないか。現に我が皇軍は連戦連勝、同時に大陸政策も着々として實行されて居るではないか、ペスタロッチやフイヒテの出た時の獨逸と日本の現在とは全く勝敗其の地位を異にしてゐるではないか、と。之は極めて淺慮輕薄の言であると思ふ。

若き教師
の總立

成る程、今は懸軍萬里、北支に南支に將又中支に皇軍向ふ所敵なく膺懲の目的も思ふ存分に達せられんとして居るのであるが、吾々は事のこゝに至つた事情を靜かに反省する必要がある。即ち滿洲事件勃發以前の過去十數年間のことを回顧して見るがよい、當時我が國の經濟界は不景氣の絶頂に達し、失業者は野に滿ち、國民の意氣は益々消沈、之に乗じて支那は排日教育を以て最も重要な課程と爲し、益々抗日排貨の勢ひを逞ふし、或は我が國威の表徴たる「日の丸の國旗」に對して不敬の行ひを敢てしたり、或は在支の吾々同胞を虐殺したり、甚だしきは我が軍人にさへ鉛の彈を放つて危害を加へた。而かもそれは一度や二度ではなかつた。我を侮蔑すること眞に言語に絶するものがあつた。剩へソヴェエツトとの連絡に依つて陰に陽に巧に盛に赤化思想をつぎ込み、日本國民の人心をどこ迄も舐め盡くさうとした、我國の學者又は相當の人士にして此の災にかゝつたものは殆ど數知れぬ程あつた。當時我が國の前途は眞に暗澹たるものであつた。國體の運命さへも亦累卵の危きに置かれて有つた、思想戰なるものは目にこそ見えぬ、滔々押し寄せて來る其の實害實毒は、元寇以上のものであつたと云つても決して過言ではないと思ふ。斯の時に當つて遂

若き軍人の奮起

に／＼堪忍袋の緒を切らして止むに止まれず猛然として起つたものは誰人等で有つたか。それは我が「若き軍人」たちで有つたではないか、それが發して滿洲事件と成り、遂に亦支那事變と成つたのである。然るに十數年もつゞいた彼の經濟國難時代に於て、將又、思想國難時代に於て、吾々國民教育者の間から誰があつて、支那の排日教育に對し、又、赤化思想に對して大々的に對抗、奮起、絶叫したか、斯の國難打開の爲めに大に楫を飛ばして國民教育者の結束を圖らんと企てたものが果して一人でも有つたか、彼の普佛戰爭の時に干戈收つて獨逸軍隊が凱旋するや、其の凱旋式上に於て

彼の有名なモルトケ將軍は

戰勝の榮冠は宜しく小學校教師の頭上に冠せしむべきである。……と叫んだ。

我が國、今回の支那事變は眞に國運を堵した有史以來の大事變であるが、我が小學校教師の人々が、果して斯のモルトケ將軍の言を甘んじて受くる丈の勇氣があるであらうか、因循姑息、たゞおとなしい丈が模範教育者ではないと思ふ。

余は數年前教育視察の爲め歐羅巴の各國を歴訪したが就中獨逸の國民教育を最も熱心に

視た。それに於て余の最も刺戟され、最も感銘されたことは、獨逸の國民教育者が皆堂々たる態度と意氣軒昂たる態度とを以て其の任に當つて居ることであつた。而して若き教師も、老いたる教師も、其の誰もが獨逸をして今一度大戦前の國勢を挽回しなければならぬと云ふ復興精神に炎え立つて居ることであつた。それが教授の一舉一動の上にあると見え居る、卷脚絆がけの甲斐々々しい支度で教壇に立つて居る教師も屢々見受けた。教師が斯う云ふ意氣込であるから、随つて兒童等の學習態度の上にもそれが反影して、實に激刺たるものである。譬へば、教師が何かの質問を發すると、兒童等は皆一齊に立ち上り我に云はせよ！ 我に答へしめよ！ と手を舉げて指を鳴らし、おまけに口笛まで張り上げて熱求する其の猛烈さには、全く一驚を喫せざるを得なかつた。

余は我が國の「若き教師」に希望する。眞に熱誠なる意氣と眞劍さとを以て、斯の重大なる時局に於ける我が國民教育の爲めに蹶起せんことを、老いては麒麟も駱馬に及ばず、余が「若き教師」に期待する所以は全く此の「若き」と云ふ形容詞の上に在る。

第二 清新な「若き教師」の教育力

一、老成が黄金時代なら「若き教師」はダイヤモンド時代

なる程、まだ經驗にも乏しい。學問も充分でない、多年の研究修養の功も積まれてゐない……と、斯う云ふことのみを數へ上げて「若き教師」を輕んじたり冷遇したりするならば、それは教育を殺すものと云はなければならぬ。固より老成と云ふことも必要である。随つて敬重もしなければならぬ。併し老成が必要であり敬重に價すると云ふことを以て、年若を輕視したり、冷遇したりする理由にはならない。教育に對して老成の教師が大に敬重すべき丈、それ丈又「若き教師」をも重用しなければならぬ。老成の教師に黄金時代を以て配するならば「若き教師」はダイヤモンド時代であると云つてよい。各のその年次的特長を認めて「道の爲め」「教への爲め」に活躍すると云ふことが肝要である、唯こゝ

に最も注意すべきことは、老成とか年若とか云ふことは歴年のみを以ては論ぜられないと云ふことである。年老いて益々壯んに少壯の氣を喪はぬ人もあり、反對に早や既に若朽の人もある。諸所の學校に行つて視ると「若い老教師」がゐるかと思ふと、又「老いた若教師」を見受けることも頗る多い。之は何も不思議な現象ではない。そこで最も注意すべきことは教育者として少しでも長く清新英氣を失はぬ様に之を保養持續することである。何の職業に於ても同様であるが、特に兒童教育の任に於て此のことが最も緊要である。然るに教育社會に於ては、學校を出たばかりの若い教師等が短い何年かの間は折角ホヤ／＼して居るが、すぐに早くも老翁然となる傾きがある、之は洵に口惜しいことである。余が伯林ノイケルン第四十五小學校を參觀した時、年の頃六十位とも思はれる、可なり老ひの皺波を顔容に横へた教師が案内をして呉れたので有つたが、教室や其他を巡つて雨天體操場にやつて來た。すると其處に一つの木馬が置いてあつた。其の木馬に一寸異つたことは木馬の背に把手と成る丈夫な二つの半管が取付けてあつた、それで自分は之はどんな工合に使用するのですかと訊ねて見た。勿論老教師に對してゝあるから簡単な言葉の説明を聴くつ

獨逸の某
老教師

もりであつた。處が其の老先生破顔一笑服の上衣を脱ぐと見るや二つの把手を掴んで逆立をするやら跳躍をするやら色々の體操をやつて見せられた、大きく肥つた圖體の人であつたが、それにひ拘らず其の動作活動が非常に輕快機敏で、見る間に全く一己の「若き教師」と成つて了つた。斯の人にして此の意氣あるかなと驚嘆せざるを得なかつた。

日本人は先天的に早老性を持つて居ると云ふ人があるが、そんなことは斷然ない。早く老ふると否とは其の人／＼の心掛如何に依ることである。奮發次第に依つて隨分年寄になるまで元氣な活動を續けることが出来る。老年の教師も奮發すれば決して若い教師に負けるものではない。されば必ずしも老者を淘汰するの必要はない。斯くして老者は益々發奮勉勵し、若い者は益々少壯の元氣を發揮し、兩々相併進するならば、我が國の教育界は愈々活氣を呈して發展することは火を睹るよりも明かである。

二、一種の教育的ホルモン

神は若き者に對して清新な活力を與へた、斯の活力を有することは「若き教師」の特権である、斯の特権付けられた「若い時代」それ自身に意味を持ち、存在をもち、目的をもつて居る。總ての「若き教師」はこの時期を神の與へ給ふたまゝに之を受取り之を活用し之を發揚しなければならぬ。

斯の清新な活力は神の與へられたものだけ有つて一種云ふ可からざる靈妙な力である。之を一種の教育的ホルモンと云つてもよいと思ふ。ホルモンと云ふ言葉は、希臘語から來たものであるが、其の本質は身體の各臓機からの内分泌に依つて放射する一種の刺戟素である。若き教師の有するホルモンの中にはそれ丈多くの若い氣を包含して居る。隨つて亦それ丈若々しい刺戟性に富んで居る譯である。ホルモンと云ふ語を持ち出して強ひて教育のことを生理學的に説明しようと云ふ譯ではない。唯「若き教師」に有する一種特有な教育力を説明するに、最も該適であると思つたからである、或は之を「若き教育魂」と云つた方が穩當であるかも知れない、兎に角之に獨特の教育力、特殊の教育價值があるのである。

云ふ迄もなく、教育は教師と兒童との交渉に依つて行はるゝものである。併し其の交渉たるや決して單なる外的のものではない。其の眞髓には言語や文章では表現しがたい、生命と生命との觸れ合が包含されて居るのである。その生命の躍動がなくては眞の教育は決して行はれない。その觸れ合ひ、その躍動に「若き教師」でなくては到底得られない或るものがある、無邪氣な、初ひ／＼しい、又伸び／＼とした兒童の幼き魂に呼びかけ、共鳴させるには、どうしても「若き教師」の若い氣分でなければならぬ。若い教師の新しい血しほに燃ゆる赤き頬の上に兒童等を引き付ける輝かしい放射があるのである。運動や遊戯をしながら互に笑ふ、だが其の笑ひの中に若い教師には、どうしても老教師では眞似の出來ない一種の晴れ／＼しさが含まれてゐるのである。つや／＼した皮膚の上にも隆々とした筋肉の中にも清新な氣が溢れて居る。そこに眞純美の教育力が發揮される。そこに兒童の音調と教師の音調との諧和がある。この調律が合はない様になればもう教師の値打は半減される、或は全滅されるかも知れない。此の調律は全く「若い教育魂」から生み出されて來る。この魂の炎えてゐる間が教育者としての生命のある時である。縦ひ歳を取つ

ても此の魂が少しでも其の教師に残つて居ればまだくやつて行ける。是れが涸渴した時が最早児童教育者としての生命の盡きた時である。

教育の資料になる様な、何か一つの新聞記事を取り出して見ても、若い教師は直ぐに其の記事と己れとを喰付けて話したり考へたりする、そこで児童も直に躍り出す、それが少し年寄つた教師になると、其の記事が記事の儘に取扱はれ、解釋され、説明される。そこには何の躍動もない。又、児童等を引き連れて一日の校外遠足をやつても、若い教師になると丁度自身自身が楽しい遠足をするかの如く、嬉々とした気分が足歩の間に表はれて居る。そこに自ら感化がある。それが少し年取つた教師になると、又今日は児童引率の遠足か、ああ面倒臭いと云ふ気分になる、それでは教育は全く駄目だ、教壇上の活動に於ても修身科は勿論、國語の教授でも地理でも歴史でも算術でも理科でも圖畫でも手工でも其の教授の一舉一動が「若き教育魂」から發射されるものでなくては教育力はない。

こゝに於て犇々と吾等の心臓を打たれるのは吉田松陰先生のことである。伊藤博文公が曾て——如今廟廊棟梁器。多是松門受教人。——と詠じた如く、先生の門下からは高杉晋

若き大教
育者吉田
松蔭先生

作だとか久坂玄瑞だとか其他木戸孝允、品川彌次郎、伊藤博文、山縣有朋など、維新の俊傑が雲の如く輩出した。萩城下に於ける先生の松下村塾は、唯に徳川政府顛覆の孵卵場となつたのみならず、實に維新の大業を捲き起す天火を發燃する聖壇と成つたのである。而も松陰先生が松下村塾を開いて子弟を教育されたのは、安政三年七月謹慎を解かれ、家塾を開くことを許されてから安政五年十二月に至る僅か二箇年半のことに過ぎなかつた。だが此の二ヶ年半の歳月が未來に於ける日本の歴史に千波萬濤の激發點となつたのは何故ぞや、それは一に先生の教育精神そのものに在つた。

先生は眞に全身全靈の生命をぶち込まれた

塾生と共に寝ね、共に起き、共に喰ひ、共に吟じ

書を講じ文を解き史を談すれば、精魂常に眉宇の間に動き

熱すれば金鐵をも鎔かし、激すれば火星をも爆裂す

斯くして後進を啓發し、俊英を砥勵し

感奮興起せしめた點に於て眞に驚くべき力があつた。

之は固より松陰先生の人格識見至誠の然らしめたものではあらうが、當時先生の年齒は二十七八歳の若々しい時であつた。だからあれ丈の氣魄、即、「教育魂」が發揮された譯である。もし其の當時松陰先生が六十、七十の老齡であつたら、先生は其の人格識見等に於て



先生の松蔭教師墓所
若き教師松蔭先生の墓所に詣つ

一層圓熟されてあつたで有らうが、恐らくあれ丈の偉大な感化を與へられることは出来なかつたであらう。

著者は昨年の秋、偶々少閑を得て東京世田谷の松原に在る、松陰先生の墓所に詣つた。そこには安政大獄の刃の露と消

えた國士の墓碑が數基並べられ、先生のは其の中央に樹つて居る。碑は至つて小さいものであるが、——身はたとひ武藏の野邊に朽ぬとも留置まし大和魂——と詠ぜられた留魂の地かと思へば、そゞろに感慨無量なるものがあつた。墓所と近接して松陰神社がある。社殿亦高壯ならずと雖も、社前には花崗石で作られた石燈籠か幾基ともなく並び献ぜられ

である。献立者の名前はと見ると流石に著名顯要な人ばかり。先づ伊藤博文、山縣有朋、井上馨各公爵のが孰れも双基で献立してある。それから桂太郎公爵、佐久間左馬太伯爵、青木周藏、曾根荒助兩子爵、長谷川好道大島義昌寺内正毅各大将、又、乃木將軍のも見えて居る。それ等を見ると益々若き教師松陰先生の感化が如何に偉大なりしか、今更ながら追想さるゝのである。

第三 先づ人生を大觀せよ

一、淡雪の如き喜び

先づ此際著者の經驗と云ふか、回顧と云ふか、それを率直に若き教師諸君に向つて述べさせて貰ふことにする。

初めて教師となつた時、先づ第一の喜びは、今迄非常に窮屈な生活をして居つた風校の門柵の中から廣い社會に解放されたことである。さうして初めて人の世の中に出たことで

ある。第二にははは極めて低級な感動的な話のやうだが、實際新調の洋服やオーバーを着けて、新任の學校に赴任したことである。大いに氣が勇んだ。第三には小分乍ら毎月月給を頂戴し、初めて父親の巾着から獨立したことである。第四には新任の學校で一つの學級を擔任させられ、そこに色々の教育上の理想や計畫が胸中に湧いて來たことであつた。

然し是等の喜びはほんの半年か一年かの中に全く淡雪の如く消え去つて了つた。寧ろそろ／＼と學生時代の學校生活の事が思ひ出され、戀しくなつて來た。そしてそろ／＼と待遇の菲薄な事が不平に思はれて來た。實業家や政治家等の他の職業が羨しくなつて來た。殊に少し兒童教育の經驗を積むに従つて、教育は本當に難しいものであると云ふ氣が段々深くなつて心配でたまらぬ様になつて來た。是等の事が合流して落膽となり、怨嗟となり煩悶となり、遂に失望となつて來た。即ち初めて人生の危機に逢着した譯である。併し此處で失望したらもう駄目だ。失望は勇氣の破産である。我々は最早此邊で人生の航海の初めての經驗を嘗めさせられた譯である。だが前途は未だ／＼遼遠である。此時こそ絶好の試練の時である。「若き教師」の時代に於ける此の試練を如何に突破するかに依つて、其の

教育者としての將來が決定される——失はれた時は如何しても取返すことは出来ない——若き教師の最も考慮すべきは此時である。彼の人類に無限の愛を注いだイエスキリストでさへ、十字架の運命に掛つた。又お釋迦さんでさへ幾度かの迫害に遭ふた。孔子先生も遂に名君に會ふことが出來ず、或る時には曠野に彷徨ひ、我れ休んぬる哉と嘆息を漏らされたことがある。或る時には桴に乗つて海に浮ばん哉と、遠く海外に去らうかとさへ思はれたこともあつた。然しキリストでも、お釋迦さんでも、孔子先生でも、其の生涯は決して不遇とは思はれない。縦し不遇不幸であつたとするも夫れは輝かしい不遇不幸であつたのである。若き教師諸君よ！ 黙つて進め！ 自らの力で進め！ 悠々と進め！ 聽て眞の歡喜が我踏む足下から湧くであらう。聽て眞の希望が我が眼前に輝いて來るであらう。人間は一代の間に必ず何時かは花も咲き、實も結ぶが、其處に到達する迄には幾度かの死線を超ゆることを覺悟せねばならぬ。比較的平和な事業に従事する教育者であつても其覺悟が絶對に必要である。

四、人間の四階級

そこで先づ人生を大観する必要がある。大観は達観ではない。達観と云ふことは達人にして初めて出来ることで、誰にでも望めることではない。況んや未だく若き教師に於てをや。然し自分の手近な周囲、又自分の學校から、其の町村、其の郡、縣等の事から、更に一と通り國家社會を見廻す位のこととは出来る筈である。さうして大観した時に先づ氣の付く事は、人間の社會には自ら階級層が形成されて居ると云ふことである。希臘の大哲プラトーンは『完全なる國家社會には其の國民に三つの階級がある』と言つた。第一は勞働者、即、商工業者の階級で、國家社會の物質的基礎を作るもの、其の上は軍人の階級、即ち國家の防衛に當る者、更に其の上に支配者階級がある。是は政治又は指導の任に當る者で、哲學的教養のある者でなければならぬとして居る。

此の階級的區別は大體今日にも當嵌まるやうであるが、自分の論旨を茲に進む上に就ては必ずしも適當ではない。自分は茲に四つの階級を認める。今之を下級から順次上げて

言ふと、即ち

其一は——國家社會の爲に居なくてもよい人間階級——である。是は何の勤勞にも服せず泥棒をするとか、社會の安寧を妨ぐるとか全然非社會的存在者である。動もすると高等の學者や知識階級の人で、國家社會の秩序を亂すやうな思想を鼓吹したり、或は國體の尊嚴を傷け國家を危きに導くやうな企てをしたりする人がある。是等も此の階級に屬する人である。

其次は——國家社會の爲に居ても居なくてもよい人間階級——である。例へば有閑マダムと云ふやうな者が居る。是は婦人の或る階級を指差したものであるが、之に類する者は男子にも澤山居る。其他廣く見渡すと必ずしも國民の中には少くない存在である。

其次は——國家社會の爲に是非無くてはならぬ人間階級——である。是は國家社會の爲に一定の使命と職分とを有し、それが充足されなければ國家社會に缺陷を生ずる。だから絶對に必要な人物の階級である。

以上で大體國民の上下を通じ全部が之に抱括される譯であるが、今一つ最上級の存在

として其上に置かれるものがある。

それは——國家社會の爲に是非無く、はならぬ。「人物を作る」人間階級——即ち是は云ふ迄もなく「教育者階級」そのものを指差すのである。

人類の社會を大觀して見ると、古今東西の區別なく、何れの國にも教育者階級と云ふものがあるが、以上の考へから見ると教師はどうしても最上級に居らなければならぬ筈である。然るに不思議にも此の教育者階級なるものは、何處の國に於ても餘り輝かしい存在を爲してゐない。是は人生に於ける一つの大きな矛盾である。然し考へ様では、夫れが却つて光榮ある存在と見ることも出来る。要するに教育者として先づ社會を大觀した時に、自分の存在する階級を最高の階級に於て觀る見識と抱負とが必要でありはせぬか。すると失望も落膽も消え失せて了つて百倍の勇氣が出て來る譯である。況んや今の若き教師等は最も意義に富める時代に生れ合せた人である、眞に勇躍奮起すべきである。

三、最高の使命には最高の奮闘が必要

前述の階級の上に立つて自らを考へて觀ると、教育者の使命の非常に高いと云ふ事が知られる。そこに最高の使命には最高の奮闘が必要であると云ふことが痛感せられて來るのである。余は抽象的の事は措いて特に日本の「若き教育者」に示したいものがある。それは佛蘭西の哲人ポール・リシヤール氏が我が國民の爲に發表したものである。

氏は夙に歐羅巴の諸國が極端なる物質的欲望に捉はれて、聽て恐るべき危険に驀進しつゝある事を知り、正に大慘劇に依つて世界が襲はれんとする事を憂慮し、一切の自餘の目的を捨て、來るべき世界を救濟すべき「天つ兒」たる國民は何處にか在る。神は必ず世界の何れにかさう云ふ國民を作り置かれ準備されてある筈だと確信し、それを尋ねて世界漫遊の途に上つた。而して亞細亞の一角、日出る處の天子國。即ち、日本に到着すると何んだか神から囁き示されたかの如く、あゝ我が思ふ國は此處に在り、我が求めし國は此處に在りと直感したのであつた。さうして我が國民の爲に「告日本」と題する一文を草して之を發表した。それは大正五年五月の事である。大正五年と言へば最早や事古り似た感があるが決してさうではない。古今東西に透徹した大眞理の發表は、決して永遠に渝るも

のではない。今左に氏が発表した「告日本」の中に示された「日本の兒等に」と題した詩を掲げて見よう。

日本の兒等に

ポール・リシャール

曙の兒等よ、海原の兒等よ。

花と焰との國、力と美との國の兒等よ。

聽け、涯しなき海の諸々の波が、

日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を。

諸子の國には七つの榮譽あり、故に又七つの大業あり。

さらば聽け、其七つの榮譽と七つの使命とを。

一

獨り自由を失はざりしアジア唯一の民よ。

貴國こそ自由をアジアに與ふべきものなれ。

二

曾て他國に隷屬せざりし世界唯一の民よ。

一切の世の隷屬の民の爲に起つは貴國の任なり。

三

曾て滅びざりし唯一の民よ、

一切の人類幸福の敵を亡ぼすは貴國の使命なり。

四

新しき科學と舊き知識と、ヨーロッパの思想とを、

自己の衷に統一せる唯一の民よ、之等の二つの世界、

來るべき世の、之等兩部を統合するは貴國の任なり。

五

流血の跡なき宗教を有てる唯一の民よ。

一切の神々を統一して、更に神聖なる
眞理を發揮するは貴國なるべし。

六

建國以來一系の天皇、永遠に亘る一人の天皇を
奉戴せる唯一の民よ。

貴國は地上の萬國に向つて、人は皆一天の子にして、
天を永遠の君主とする一個の帝國を建設せんことを
教へんが爲に生れたり。

七

萬國に優りて統一ある民よ。
貴國は來るべき一切の統一に貢獻せんが爲に生れ、
また貴國は戦士なれば、人類の平和を促さんが爲に生れたり。

我が日本
人類の
世界に
大使の
使命

曙の兒等よ、海原の兒等よ。此の如きは、花と焰との國なる貴國の七つの榮譽と七つの
大業なり。

大正十五年五月

之を讀んだ時「若き教師」諸君よ如何なる感がある。我等の使命の眞に高遠なる、正に
之れ天が久遠の太古より日本民族なるものを世界の爲に準備し、構築し、培養し、愛護し
來れるものたることに誰か氣付かざらんや確信せざらんや。此の全詩を通誦すると一語は
一語より高く、一節は一節より深く、其の眼識の公明正大なる天の如く、其の胸懷の博大
寛仁なること神の如く、其の日本建國精神の眞髓を道破し、萬世一系の天皇は世界を通じ
て唯御一人にして、天意の代表者として世界人類を統御ましますべき大天職を有せられる
ものたる事を道破して余蘊なきものがある。我等は茲に於て肅然として襟を正し、何處迄
も天業を翼賛し奉るべき最高にして最大の使命を負荷せるものなることを痛感せずんば措
かざるものがある。現に今我が日本帝國は着々として此の使命の實現に向つて邁進しつゝ

あるではないか。世界の萬邦が我が大君に依つて統御救済せらるべきを知り、人類の精神と生活とを統一すべき最高文化は、日本の熔爐に依つて鍊成鑄出せらるべきを思ふ時、我等は奮闘又奮闘せずして止むべきであらうか。我等日本の教育者は此の大使命を自覺し、先づ己れの國を淨め、隣の國の不淨を一掃し、斯くして新東亞より歐羅巴に及ぼし、遂に全世界を淨め盡して、世界的大平和の大建設に向つて一大奮闘を爲さなければならぬ。斯して八紘一字の天業は完成すべきである。奮闘々々勇敢に乗り切つて行く所に、若き教師の使命がある。年を取り過ぎた教師には最早其の勇氣が乏しい。色々のことに右顧左瞻する様になつては思ひ切つたことは出来ない。

四、特長を作り特長を發揮せよ

最高の使命を自覺し、最高の奮闘を爲すが爲に最も緊要なる事は、自己の特長を作り特長を發揮すると云ふことである。「作る」と云ふ言葉は適當でないかも知れぬ。人間は誰も生まれ乍らに一とかどの特長を有するものである。純粹に圓滿具足の人としては決して無

自己の特
長と教育
力

自己完成

い。若し有つたとするならば、それは人間でないか、頭の中で想像せられた影法師のやうなものに過ぎない。そこで現實に生存して居る我々は、其の持つて生れた特長を何處迄も伸ばし、文學が好きなら文學、美術が好きならば美術、或は音樂或は數學、或は武道に或はスポーツに、何でも自らの長所を自覺して之を發達發揮せねばならぬ。そこに力強き教育力と云ふものが養はれて來るのである。然し國民教育の任に當る者は普遍的陶冶と云ふ事を忘れてはならぬ。自己の特長を以て、同じく持つて生れた兒童そのもの、特長を決して破壊してはならぬ。教育と云ふ事は教師の特長を以て兒童の何かの特長に呼び掛け、それを啓發、助長、培養すると云ふことに外ならぬのである。畢竟自己の特長を作り、特長を發揮すると云ふことは自己完成と云ふことに外ならぬ。教育者には是が最も必要である。否らざれば外界に呑み込まれ、曳ずられる。それでは兒童を率ひることは難しい。教育は自己完成を通して兒童等のそれ／＼の自己完成を成し遂げさせると云ふ事である。斯う考へた時に、我々の教育の任務と云ふものに無限の意味と最大の價值とが有ることが自覺せられ教育者の教育者たる人生觀が確立される譯である。

第四 炎ゆる向上心

一、ピールの氣の抜けた様な教師は駄目

「若い教師」には元氣があるとか、熱心であるとか云つてゐるが、いつの間にか其の元氣も熱心も抜けて了つて最早向上心に見放され、唯すら吞氣と不平との間を彷徨やうになる、全くピールの氣の抜けたやうな人に成つて了ふ。斯うなつてはもう駄目だ、之には色々な事情もあるであらうが、其の主たる原因は第一、教育と云ふ事業は、兒童相手の極めて平和な平凡な仕事である。勿論其の中にはいくら奮闘しても足りない程の大任務が含まつて居るが、何にしても相手は幼稚な子供であるから吞氣にすませば、どんなにも吞氣で過せる、そこに自ら氣の抜ける大なる穴口がある。第二には教師は狭い一つの學校の中に、稍廣く見ても教育界と云ふ或る限られた一つの社會の中に閉ぢこめられて籠城する傾がある。随つて官界や實業界の人の様に外他からの刺撃を受けることが甚だ乏しい、第三には

教師は物質的に甚だ恵まれて居ない。待遇が非常に菲薄である随つて自然に卑屈に流れて来る。昂然とした意氣もなか／＼出て来ない、以上の様な原因に支配されて居るから教師たるもの就中「若き教師」は餘程平素に心掛けて居ないと、何時の間にか退嬰の人となつて了ふ。それで常に自らを鞭撻して勇氣を鼓舞する様にしなければならぬ。

彼のペスタロッチ氏の如きは其の經られた事蹟から云ふと氏の生涯は、全く不遇と失敗との連続と云つてもよい。それでも氏は決して教育上の理想に向つて進むことを、苟も忽にしなかつた。それであれ程の精神的大功業を世界の教育史上に貽されたのである。

ペスタロッチ氏のことを云つた筆のついでに、太陽の前の螢の火ほどもない自分のことを云ふと甚だ不遜の罪を免れないのであるが、餘り偉大な人の經歷には初から手が届かない。そこでつまらぬ自分の經驗の一齣をこゝに敬愛すべき「若き教師」諸君の爲めに述べさせて貰ふことにする。無論徹頭徹尾平凡ではあるが、自分はほんの普通の師範學校を卒業しただけである。それ以上の高等師範も専門學校も大學も覗いたことさへない、だが向上の生活は少しも緩めなかつた、何程の學歷をも有しないで、高等女學校長や中學校長の

地位に昇つた人も少くはないが、多くは縣視學をやつたとか、文部屬をやつたとか、一とかどの權道を踐んで來た人が多い。併し自分は一度もそんなえらさうな地位に就いたことはない。唯小學校の教員が一と筋に登つて行つた。語學などはABCのA字も習つたことはない、けれど教育に關する書物を可なり廣く深く讀破するにはどうしても獨逸書を繙くの必要を感じ、何か文法の「手引き書」を一部買つて夫れを無茶苦茶に研究した、そしてそれを十ケ年も續けてやつと一と通り讀める様に漕ぎ付けた。それから獨逸の原書を読み始めた。すると明治四十二年頃から新しい教育説として獨逸にケルシエンシュタイナー氏の勤勞主義の教育學説が出現した、其の學説の由つて來る處を調べて見ると、全くケルシエンシュタイナー氏がベスタロツチ氏の教育説を現代的に祖述したものであることが分つた。現にケルシエンシュタイナー氏が初めて其の所見を發表したのは一九〇八年の一月十二日ベスタロツチ先生の百六十二回の誕生日に其の生地瑞西チユリツヒに於て開催された記念祭に招かれて其の席上に於て「ベスタロツチの精神に基き、來るべき學校は勤勞學校(アルバイト・シュールレー)たるべし」と云ふ標題で演説されたものである。自分は此の學説

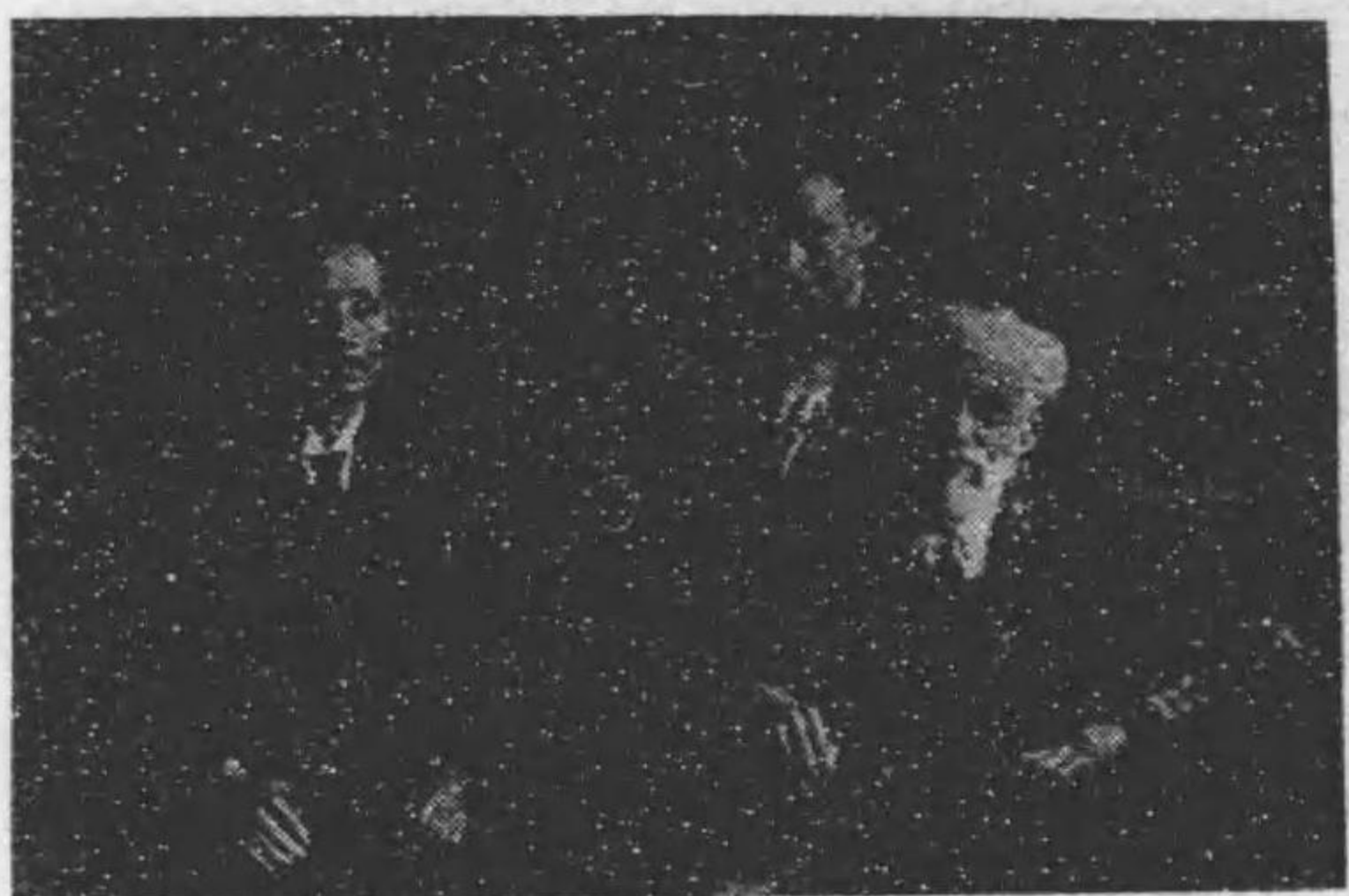
こそ將來世界の教育界を風靡し、又實際上に於ても必ず重要さるべきものであると確信して、研究に研究を重ねてケ氏の著「勤勞學校の意義」(Begriff der Arbeitsschule)を譯述し之に私見や經驗をも加へて「勤勞學校の意義及び經營法」と題して公刊に附した、それは今から約二十五年の昔大正三年のことであつた。

爾來ケ氏とも屢々文通して居つたのであるが、だん／＼私淑するに隨つてケ氏が慕はしくなり、亦、多年崇敬して居るベスタロツチ先生の遺蹟の一端をも訪ねて見たくなり、殊に又獨逸に於ける勤勞教育の實際をも是非觀察したいとの念愈々切なるものあり、遂に獨逸への旅行を斷然決行したのである。伯林に着いて「獨逸教育協會」の事務所に行つて色々視察のことを打合せ、何と云つても一日も早くケルシエンシュタイナー先生に逢ひたいのであるから其のことを話し出すと、協會の事務主任の話に——先生は稍久しい前から病氣である、而かも甚だ重い、とても面會など六ヶ敷だらう——とのこと、又、ある他の處では——ケ氏は現代獨逸に於ける教育の大家である容易に面會は出來ぬだらう——と、云ふ心は日本の大家なら兎も角普通の人では駄目だとの意味に聽こえた、小癪な

親しくミ
ユンヘン
にケルシ
エンシュ
タイナー
氏を訪ふ

言だとは思つたが、何れにしても病氣とあつては仕方がない。遙に訪ねて来て逢はないと云ふことは残念至極と頗る落膽したのであるが、兎に角訪ねて名刺だけでも置いて來るつもりで行つた。伯林からミュンヘンと云へば東京と京都と云ふやうに南北相隔つて居る、全く不案内の獨り旅び、汽車に乗つて居つても前後左右の席に一人として固より知る人の有らう筈もない。心細い乍らも、併し信念と云ふか快心と云ふかは強いもので、大した不安にも襲はれなかつた。汽車は夕刻ミュンヘンに着いた、宿は獨逸に遊んだ日本人間には可なり知られて居る「日本婆」として親まれて居るヒルンブランドと云ふに這入り込んだ、「日本婆」と云ふから、日本語が通ずるかと思つて居たが少しも通じなかつた。だが流石に日本人に對しては心から親切であつた。自分は萬里の異郷で母親にでも逢つた様な氣がした。明日の先生との面會がどうやらと氣に掛け乍ら一夜を明かした、翌朝十時頃ミュンヘンの少し郊外へ近いメーデル街の先生の邸宅を訪ね名刺を通じた。無論四五日前伯林から葉書を一本差出しては置いたが、早速二十一二歳位の女中に案内されて二階へ導かれたのである。

すると齡八十を越えた老先生はちやんと態容を整へ、夫人と共に余に對する席を設けて待つあるが如き様子で自分を迎へられた。自分が甚だしく意外に感したのは、先生は病氣而



ケルシエンシュダイナー先生を
ミュンヘン郊外の私邸に訪ふ

かも重症だと聽いて居たのに可なりの元氣さで居られたことである、自分は夫人及び先生と一禮を交して先づ真先に——先生は相當重い御病氣だと聽き大變心配しながら参りましたが？と云ふと、先生は指で胸部をさし乍ら少し呼吸困難であるがもう大丈夫だと云はれた、——次いで自分は「先生が多年主張された勤勞教育が今や全世界を風靡するに至つたことを大いに喜びとするものであります」と云ふと、先生はヤー／＼と云つて同じく喜びの笑味を漏らされた。

——それから先生へ進呈する爲め日本より携へて行つた日本の兒童の圖畫や、其他お産物として持つて行つた陶器の説明をするやら、參觀する學校の紹介名刺を認めて貰ふ

やら、時の移るを忘れて了つた。何分病後のことであるから大抵にして切上げようと思つたが、最後に記念の撮影を願ひ、而かもそれは曾て寫眞の稽古もしたことの無い自分が初て伯林で買った寫眞機で、セルフ・タイムを掛けて撮つたのであつた。先生の宅を辭去して宿の近くの寫眞屋で現像をして貰つたがどうしても現像しない。更に藥を試み、努力する間にやつと出て來た、それが自分には恰好の記念となつた。先生は自分が歸朝して間もなく他界された噫！ 彼を思ひ是を想ひ合せると、神は誠心誠意のことには必ず相當に助け導いて下さるものだと思つて感概盡きざるものがある。

二、研究五ヶ年計劃——極力奨むる讀書

向上の道を辿ることは、恰も山に登るやうなものである。平々凡々たる恒路を行くのは異つて大なる努力を要する。汗も流れる疲れもする其れを厭ふてはもう進むことは出来ない。併し努力さへすればよいと云ふ譯ではない。無定見無秩序の努力は徒勞である、若い時の清新な血液は一滴も無駄に消費したくない。そこに一定の計劃を必要とする所以で

ある。其の計劃とは研究計劃を云ふ、研究は若き教育者の向上生活の大部分を占むるものである、研究を續けるものは一步々に向上する。研究を怠るものは一步々に退却する、研究を措いて向上はない、研究は實に向上の途を拓く犂鋤である。

こゝに「若き教師」の爲めに「研究五ヶ年計劃」なる語を提起した。五ヶ年計劃と云へば何だか近頃の流行語を捉へ來つた様な感があるが、決してそんな薄ッペラな考へではない。著者が數十年前の體驗から生れ出た言である。

學校を卒業し「若き教師」となつて初めて就任する時、何だか新しい智識や技能を以て出て來たやうな思ひがするが、實はそれは極めて淺薄なもので、ほんの教育者としての素養を興へられたに過ぎない。之を培ひ涵養するに非ざれば、間もなく枯渴して、聽て再び起つ能はざるに至るは火を賭るよりも明かである。

そこで研究の計劃であるが、之を五ヶ年計劃とした所以は

第一、五ヶ年間卒業後めつちり研究すると、相當の研究実績があがり、其の蘊蓄は生涯の智識的資本と成つて永く其の利子の餘澤を享けることが出来るのである。

自分の経験に依ると三ケ年ではどうも不十分である様である。

第二には、五ケ年つゞけると其の間に研究の習慣と研究の趣味とが自ら養はれて来る。

研究をすることが習慣となり趣味となると、最早勉強することが苦しくない様になる、此の習慣と趣味とはどうしても若い内に作つて置かねばならぬ、或る年齢を越えるともう駄目だ。

第三には、果して研究の習慣と趣味とが出来れば、その五ケ年が十ケ年二十ケ年となつて生涯を支配する様になる、止めんとしても止められないやうに成る。

問題は五ケ年の間、徹頭徹尾萬難を排して遣り通すと云ふことである、卒業をして世の中に出ると色々の誘惑が充滿して居る。それに打克つことが出来ず大抵のものが其の間に挫折する、後悔しても最早及ばないのである、それでちゃんと計劃を立て、日程表から時間割表までも作つてそれを遂行することだ、無論職務を持ち社會生活に乗り出しては學生時代の様にきツちり行かぬことは當然である、それでもプランは必要である、否！一層それが必要である。

極力奨む
る讀書

同じく研究と云つても、書物に依るものばかりではない、實驗觀察等に依るものもあれば其他色々の方法部面もある。併し、こゝには専ら讀書研究を主體として述べることにする。

余は

「若き教師」に對して極力讀書を奨むる、書物は精神的糧である、讀んだ書物を

積み重ねただけ、それ丈向上することが出来る。

何の職業に従事するものでも今日では相當に讀書研究の範圍を有する。併し教育者の職分を全ふするには。他の職業の人が讀書を必要とするに云ふのとは別の意味に於て、更に一層本質的な意味に於て、讀書と云ふことが必要缺く可からざるものである。此の點を深く考へなければならぬのである。然るに近頃の教師にはだん／＼讀書が減つて來た。確かに其の傾向がある。それには色々な原因や事情もあらう。或は書物の刊行が汗牛充棟も唯ならず餘り多過ぎて却つて讀まれない様になつたとか、或は經濟上世知辛くなつてさう書物を買へないとか、併し如何なる理由もブチ捨て、余は「若き教師」に對して讀書を勧誘

するものである。

單に讀書と云つても、他の業務に携はる人のやうに、狭い範圍の専門書を讀んで置けばそれで事足ると云ふ譯ではない、教育者のは其の範圍が非常に浩汎である。之は宇宙の至寶とも云ふべき天の賜物たる兒童そのものを教育すると云ふことの中に、非常に尊き非常に高き使命が含まれてゐる當然の結果である。斯くは云ふものから凡そ讀書の範圍を區分して見ると大體左記のやうな項目を以て示すことが出来ると思ふ。

教師の讀書の部面

(一) 精神修養に關するもの

(二) 教育及教授に關するもの

(三) 教材に關するもの

(四) 特に國體に關するもの

(一) 精神修養と云ふことが教育者の人格を高め、亦、教育者の感化力を強める爲めに極めて必要であると云ふことは贅言を要しない。近頃精神修養に關する書物の刊行されることも非常に多い併し精神修養は必ずしも讀書に依つて出来るものではない。それには行

修養と行

修養書の選擇

と云ふものが伴はなければ駄目である。頻りに讀書に依つて一とかどの修養が出来た様であつても、一朝何か困難な問題にブツ付かつたり、苦しい事柄に遭遇すると忽ちにして精神が碎けて了ふ。又、同じ精神修養と云つても多種多様の方面がある、その凡らゆるものを讀破すると云ふことは到底不可能である。それで其の多方面の中から自己の個性に合した、自己の最も共鳴した或は感銘したものを採つてそれを金科玉條と爲し、而してそれを行と結び付けるやうにすることが肝要である。例へば論語を選んだとする、論語は精神的な點に於て實踐的な點に於て世界第一の修養書であると激稱して居る人さへある、であるが唯それを解釋していくら理解した處で必ずしも大した修養にはならない。それに依つて修養の效を得んとするには常に座右の銘書として繰り返へしく生涯手離さないと思ふ位の考へで讀む、その繰り返へし繰り返すと云ふことが一種の行となるのである、其の間に精神が固まつて來るのである、修養書としては際物的流行書よりも論語とか聖書とか、佐藤一齋の言志録とか、朱熹の近志録とか、王陽明の傳習録とか、菜根譚とか般若心經とか古來ちやんと定評のあるものを選んだがよいと思ふ。而して其の内容を行化とすると云ふ

ことが肝要である。

併し修養書として如何なるものを選んだとしても、教育者としては一般的にどうしても見通してはならないのは倫理及び哲學に關する書物を一通り讀むと云ふことである。人の師表たるべき教育者の修養は決して偏倚してはならぬ、それが爲めには普遍的な學術的な倫理及び哲學に關する書物を讀んで確乎たる人生觀及び世界觀を建設し、それに依つて精神修養上に於ける公平なる批判的根據を作ることが極めて緊要である。倫理・哲學は唯に精神修養に對するのみならず、教育の理想及び方法に關して其の根柢を確立する上にて於ても是非讀まなければならぬ。さて倫理及び哲學に關する研究であるが、之れこそ非常に澤山の書物があつて一々書名を擧げて紹介をする違を有しないのであるが、讀書の順序としては先づ哲學史及び倫理學史を繙くことが必要である。哲學史を讀めば倫理學史も自ら其の中に含まれて来る。就中、古代哲學ではソクラテス、プラトーン、アリストートル近世ではデカート、ライブニッツ、カント、ヘーゲルは是非しつかり頭の中に入れて置く必要がある。斯うして學史を讀んで居る内に、哲學思想や倫思想が自ら養はれ、而して各

學說の學問上に於ける位置がはつきりして来るのである。然る後に於て倫理概論、哲學概論を讀み、更に下つて現代の學說、例へば哲學で云ふならリカード、ヴィンデルバンド等の新カント派に屬する書物とか、フッサールの現象學派に屬するものとか、倫理學では新ヘーゲル學派のクローナーやハルトマンやグロツクナーの書物とかを讀むがよい。何れにしても哲學を讀んで思考力を鍊り又批判力を作る必要がある。

(二) 教育教授に關するものは直接自己の職分に關するものであつて、最早爰に縷述する迄もないことであるが、無論教育學教授法乃至心理學論理學等、一通りは學校で授けられて居る。併しそれはまだ極めて初歩的な概梗に過ぎない。卒業をして後、語を替へて云へば職務に就いた後、今少し深究する必要がある。少しと云ふ語を使つたのは師範學校や高等師範の教育學の専門教師のやうに迄研究する必要はないと云ふことを意味したのである。そこで卒業後に更に教育學や教授法の書物を讀むと以前の概梗なのが漸く深めらるゝのみならず、今度は自ら實地に携はりながら研究するのであるから、讀んだ其の智識が一々生きて來るのである。従つて初てそこに切實な教育思想や教育精神、教育力等が

養はれるのである。それから何の學問に就いても同様であるが、總て日進月歩に進轉しつゝある、少し油斷をして居ると直に後れる、殊に教育教授に關するものは、宇宙間に於ける最も尊き所謂萬物の靈長たる人間を教へ育つる學問であるから、研究の精銳が自ら之に向つて注がるゝのは當然である、隨つて教育教授に關する學問は其の進歩の速度も非常に速いのである。それで教師たるものは常に此の進歩に後れぬ丈の心掛けが無ければならぬ。それ等の學說の中には非常に高遠な理想に屬することや、或は甚だしく實際から掛離れた様なものも無いではないが、教師たる人が平素進歩の空氣を吸ふてさへ居れば、それが自然の間に兒童教育の上に反影して來るのである。若き教師には之れが最も必要である。年老いても此の新しき理想や學說の中に住み込んで居ると、自然いつ迄も若々しい氣分を保つことが出来るのである。

(三) それから教材に關する研究であるが、苟も教師たる者は其の教授すべき事柄について十分に明瞭且つ確實な智識を持つてゐなければならぬことは別に論ずる迄もないことである。併し實際に就いて見るとなか／＼容易ではない。隨分ウソを教へたり間違つたこ

間違つた
ことだけ
は絶對に
教へてな
らぬ

とを授けたりするのを見る、間には兒童等の間に對して適切な答への出來ない教師も見受ける。而してそれは未だ經驗にも乏しい學問も未熟な若い教師に最も多い様である。之は若き教師の最も注意すべきことであり、苟も神聖な教壇に立つた以上は絶對に間違つたと文は教へないと云ふ覺悟と用意とか無ければならぬ。兒童に授けることは極めて平易な卑近なことばかりである。だから自然に教材の研究を等閑にしたり、準備を粗かにする様になるが、之れは大に慎まなければならぬことである。それと假令教へる事柄が平易であり卑近であつても、教師と兒童との知識の程度の差が、少し位であつてはいけないのである。餘程大なる差が無くてはならぬ、僅かに一日の長たるに止まる様では眞の教育は出來るものではない。教師の態度は慈愛に富んだ神が高い所から悠揚として兒童に物を授ける様でなくてはならぬ。

(四) 次に國體に關する研究であるが、此の項目を最後に擧げたのは、それだけ之を軽く視た譯ではない。否！ 前掲の三項目を綜合統一すべき最も重要視する意味に於て之を最後に示したのである。倫理や哲學の研究も教育學や教授法、乃至教材に關する研究も、

國民教育
は國體教
育

其の總てはこれを我が國體に施して我が國本に培ふと云ふことに於て初て意義があり價值があるのである。殊に兒童教育は國民教育である、國民教育の本義は國體教育に在ると云つてもよい、將來如何なる職業に従事するとも國體に關することだけは、徹底的に兒童の腦裡に滲み込まして置かなければならぬ。然るに從來教師に於て國體研究のことが甚だ徹底を缺いて居る。最近この點に漸く注意が喚起されて來たのは甚だ喜ぶべきことであるが、まだ充分とは云へない。況んや我が國體は眞に宏大無邊之を仰げば彌々高く之を臨めば益々深く何程研鑽しても其の極を知ることが出來ない。凡そ地球上に於ける各國は各それ／＼國體を異にして居るのであるが、大別して之を「自然的國體」と「人爲的國體」との二種類と爲すことが出来る。今の歐米諸國の國體は大抵皆人爲的國體であつて、憲法を制定して夫れに依つて國體が成立したものである。我か日本の國體の如きはこれに反して憲法の制定によつて初めて成立したものではない。本來我が國體は「神ながらの大道」に淵源し天地と俱に自然に生り成つて來たものである、故に我が國體の眞義を理解せん爲めには「神ながらの大道」と共に我が國家國體の生成發展の跡を攻究明徴する處がなければ

ならぬ、歐米の國體は前記する如く元來が人爲的に作られたものであるから割合に淺薄で其の研究も大して困難ではないが、之と違つて我が國體は非常に深淵であるから、其の研究も容易ではないが、併し今少し教育者は之を深究して以て國民教育の上に徹底せしむることが緊要であると思ふ。それかと云つて斯程深淵なものに全力を没頭する譯には行かない、先づ大體に於て古事記及び日本書記に依つて國體の淵源する處の一斑を窺ひ、次いで加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等諸先哲の國體に關する適當の書を選び、それで大體の基礎觀念を作り、然る後に最近非常に多く刊行されて居る書物の中から適當のものを選択して攻究したらいと思ふ。

以上、研究の項目を擧げて概説したのであるが、其の範圍は頗る浩汎に亘つて居る。之を五ヶ年計劃に編み立て、讀書の歩を進めて行くに就いて、大體階段主義と併進主義とある様である。階段主義とは今から何ヶ月間は倫理又は哲學に關するものを讀む、それから何ヶ月間は教育學書、其の次は教材に關するものと云ふ風に遣つて行くのである。之に反し併進主義では二種若くば三種位日々併行して讀んで行く、而して何ヶ月かの後に凡そ

階段？
併進？
多讀？
精讀？

同時に一と通り読み終ると云ふ風にして行き、それを循環的に繰り返して行くのである。此の兩主義は孰れを採るも差支無いことであるが、著者の経験に依れば何學でも初歩の間は階級的に進んだがよい様であるが、大體は併進的に遣つた方が實效が多い様に思はれる。それから讀書に就いては多讀主義か精讀主義かと云ふことが讀書者の間には能く問題になることであるが、著者は「若き教師」諸君に對し、飽く迄多讀、精讀を奨めるものである。少しばかりの書物を精讀熟讀する位に何も計劃を建て、迄勉強するには及ばぬことである。若い間に多數の書物に亘つてドシ／＼讀破することが肝要である。プランを遂行するには兎に角五ヶ年間に眞ツしぐらに勇敢に慕進することが肝要である。而かも精讀、熟讀、緊要な行には朱點を施して置く、更に緊要な部分はノートに抜摘すると云ふ様に、斯くして初て勉強と云ふことが云へる。普通の漫々たる讀書では何も勉強とは云へない。吳々、慎むべきは亂讀雜讀である、之れではいくら讀んでも多くは徒勞に歸する。併し今日の様に書物の供給の多い時代に於ては讀書家と云はれて居る人に往々此の弊に陥つてゐる人が少くはない。

三、學級經營の中に校長學あり

「若き教師」は常に向上發展の氣象に炎えてゐなければならぬ。だが向上發展にはそれだけの努力が伴はなければならぬ、雲を掴むやうな向上心は大に戒むべきである。向上の基礎は研究に在る、そこに研究五ヶ年計劃を説いた譯である、然るに向上と云つても色々觀方がある、人格の向上もあれば學問の向上もある、而してそれ等の向上が兒童教育の上に優良なる反影を與ふる。それが向上の眞義である。併しながら他の一面からは人格の向上や學問の向上が基礎をなして、地位の向上と云ふことも考へらるゝのである。「若き教師」に於ては、又、此の地位の向上を欲すると云ふことが最も緊要である。間には若き教師にして——眞面目に務めさへすればよい、自分は校長になると云ふ様な希望も野心もない——と如何にも聖人らしい言を吐く人があるが、それこそピールの氣の抜けた様な教師であるか、否らざれば表面だけを粧ふ偽君子である、成る程、早く校長になつて申請權や命令權を行使したいとか、甚だしいは少しでも早く高級の俸給に在り付きたいとか云ふ様な

校長には
野心的な
心ではない
ので。

權力上下の考へやら、或は物質的な卑劣な考へから校長の地位を欲求するのなら、それは全くの野心である。併しながら、自ら學校長となつて自分の蘊蓄を傾けて理想を實現して見たい。理想的な學校を建設して見たいと高潔な考へから出た希求は、決して野心ではない。野心と向上心とは決して同日に論ずべきものではない。故に「若き教師」たる人は此の高潔な向上心を以て己れに擔任させられた一つの學級の經營の中に未來の校長たるべき要素の含まれて居ることを深く自覺して勤勉努力攻究怠らざる所が無ければならぬ。

「若き教師」ながら、何十名かの大切な人の兒をひと纏にして一學級を擔任させらるゝと云ふことは、之れ程責任の重大なことではない。されば先づ第一には慎重に慎重を加へて、如何に是等の兒童を導き如何に此の學級を經營すべきかの理想を建てなければならぬ。そして自ら卒先躬行して兒童を率ゆれば自らそこに一種の級風が出来て来る。それが將來學校長となつた時に一つの學校の教育理想となり、何十人かの教員を統禦し立派な「校風」を樹立する處の基礎經驗となるのである。一學級は極めて小さいものであるが、その中には非常に種々なる要素を含んでゐる一つの學校の小模型と云つてもよい。之をうまく理想的

一學級の
小模型は

に經營して行くと云ふことは相當に六ヶ敷いことでもあるが、亦非常に興味のあることでもある。成る程兒童等は極めて頑是ない、何の理屈も持つてゐない。唯無邪氣である。だからと思つて教師が彼等をよい加減に取扱つたり、誤魔化したり威壓したりしても彼等は決して信服するものではない。神の子である兒童ほど自然の間に教師の眞價を觀破るものはない。教師に對する何の理屈もない兒童の自然の信任、即ち兒童らしい信任ほど偽りのないものはない。教師は兒童の鑑でなければならぬが、實は兒童の方が教師の鑑である。それで教師たるものは常に公平無私苟も依怙のことがあつてはならぬ。權力者の息子とか金満家の子供とかに特に目を呉れる様なことがあつてはならぬ。之等の點につき若き教師は最も注意を拂はなければならぬ。若き教師はどこ迄も明鏡止水の如き純潔な態度を以て進まなければ教育者として大成する素地を作ることは出来ない。唯僅か何十人かの兒童であるが之は將來國民となるべきものである。吾々は之を近き將來に於ける立派な國民に育て上げるのだと云ふ大きな立脚地に立つて常に教育しなければならぬ、校長學の根本はそこに在るのである。

それから學校長は、學校の全體を見渡して部分に及びて之を指導經營して行くのであるが、「若き教師」は部分から全體に及ぼすのである。即ち、一學級を入れてゐる小さな四間に五間の教室、之を苦心工夫して縦横に施設して以て自分の理想實現の據點とする。而して之に據つて教授もやれば訓練もやるが、それを擴大して運動場も作業場も、花園も蔬菜園も、近隣周圍の山川草木、乃至市町村も皆此の教室の延長として考へてゆく、斯く考へて行くと共に一學級の經營と云ふものが非常に大きな立場となつて來るのである。

こゝに参考として著者が獨逸の學校を視察して得た新しい教授法の一齣を紹介して見たいと思ふ、或る學校では此の教授法はまだ新しい試みの時代だと云つて居る人もあつたが最早大抵孰れの學校でも實施して居つた。尤も或る學校では一學年、二學年、三學年位の下學年のみに實施してゐると云ふのもあれば、或學校では卒業前の最高學年のみに實施してゐると云ふのもあつた何れにも理由はあるやうだ。それは兎も角、どう云ふ教授法かと云ふに、之は「ガザムト・レンク・リヒト綜合教授」と云ふのであつて數年前誰か觀て來て我が國にも紹介して居つたやうであるが、自分は之を一學級の經營と云ふ立場から考へて見たいと思ひ、特に此際

獨逸に於ける綜合教授

其の一斑を説明する譯である。抑も「綜合教授」と云ふは「ファツ・ウング・リヒト分科教授」に對して云つた名稱であつて、從來教授と云へば多年因襲的に各學科々に應じて分科的に教授をやつてゐることは説明する迄もないことである。然るに綜合教授とは分科教授の如き人爲的な分解分析を避けて事實を自然の存在の儘に觀察させ綜合的にそれを見童に了得せしめやうとするのである。例へば「稻」と云ふものを教授するとすると、普通には苗の發芽から、移植及び籾の解説、米の效用等専ら理科教材としてのみ取扱ふのであるが、綜合教授に於ては之を理科的に取扱ふと同時に、稻の由來として、例へば天孫降臨の際に天照大神が皇孫瓊々杵尊に日本民族の基本食料として齊庭の稻穂を御授けになつたことなどを神話の歴史的に取扱ひ、更に亦米の生産が我が日本國民の食料問題と如何に重大なる關係を有する？又、米の輸出入關係は如何？或は又米の生産と關聯して肥料問題はどうか成つて居る？等農業的にも經濟的にも對外貿易的にも各方面より考察せしめて出來丈之を綜合された全一の智識として習得せしめようとするのである。更に今一つ例を寫眞機に採つて説明して見よう。從來の遣り方ではレンズと云ふものが主材となつて、光線の屈折から焦點の結成、

畫像の映寫などのことが物理的に説明され、然る後に其の應用教材として寫眞機と云ふものが取扱はれて居つた。處が綜合教授に於てはレンズと云ふ引き出されたものよりも寫眞機と云ふ一層具體的な一層實際的な其のものが主材として取扱はれる。而して之を教授するには説明よりも何よりも先づ實際にそれを使用して撮影することが練習される。然る後にレンズのことや、感光のことや現像のことや寫眞機の取扱上の注意や破損した場合の修繕のこと迄教授される。其の間には物理的の質問や、化學上の質問、レンズ製造工程のこと等迄色々のことが關聯して教授される。分科教授の場合のやうに、兒童の或る質問に對し——チョット待て今は物理上の説明である。其の質問は化學に關係してゐることである。學年に教へる——と云ふ様なことは全然ない。即ち「稻」の例に於ても「寫眞機」の場合に於ても同様、總て之を全一の智識として習得せしめようとする所に綜合教授の特色があるのである。従來の教授に於ては、智識は多くの場合に於て未製品として授けられて居つたのである、而して更に綜合教授の本旨とする處は従來の教育教授の様に、一學年は二學年の準備

階段であり、二學年は三學年へと云ふやうに、其の學年が次の上級學年の爲めに階段的の犠牲に供せらるゝでなく、全く其の學年々々に於ける兒童の年齢に獨自の目的を以て常に出来るだけ完全なる全人教育を施さんとするのである。之は全く國民教育の本質から出發した考へであつて當然のこと、思はれる。最近の獨逸ではかゝる考への下に一つの學年一つの學級が經營されてゐるのであるから、どの教室を參觀しても其の擔任の教師が其の教室に色々の工夫を凝らして凡らゆる教育的施設を爲して居る。その程度々々に應じた教授用の器械標本は勿論、時に發生した新聞や雜誌の記事にして教育的に利用されるものは總て切り抜き、ちやんとそれを整頓して帙に收め、それが幾十冊となく整頓して教室の壁に懸けられ何時でも必要に應じて教授の材料に使用されるやうにしてある、教師からよくそれを自慢さうに見せられた。之等を見た時に自分は單に一學級と云つても其の施設經營に非常に重大な意義と價値とが含まれて居ることを考へさせられた。——以上はほんの一例を示したに過ぎないが、かゝる經營ぶりの中に「若き教師」としては未來の學校長たるべき校長學が含まれてゐるのであるまいか、「若き教師」の向上の基礎は實にこゝに在り

と云つても宜いと思ふ。

四、金溜かねためは止して購書と旅行を

今時の若い人々には學校を出て就職をすると、もう早やそろ／＼家を持つことや老後の準備らしいことなどに心傾ける人が多い様だ。それは蠶が桑の葉を充分に喰ふ日數もたゞず、幼蟲の儘で繭を作り始めるやうなものである。それでは本當に役に立つ立派な厚い繭は出來ない。況して、「若き教師」には初めからそんな功利的な考へが有つては駄目だ、金溜がしたいとか富裕な身になりたいと云ふ様な考へが微塵でもあるなら、初から教師なんかには成らない方がよい。教師の仕事はどこ迄も精神的活動でなければならぬ、現代の如き物質偏重の時代に於て其の潮流に反抗して行くことは随分困難ではあるが、教師たるものは、どこ迄も毅然として立つて行かなければならぬ。そこに教師の尊さがあるのだ、教師にこの衿持がなくては恰も牡丹の樹から花をもぎ取つた様なもので、残つた幹や枝ぶりには何の稱美すべき所はない。それで教師は飽く迄も物質偏重の潮流の上に超然として、

書物が財

清き貴き職務の爲めに奮闘をつゞけて俗世界の清涼劑とも成つて行かなければならぬ。殊に此の覺悟が「若き教師」に於て最も必要である。教師の物質的待遇の薄いと云ふことは世界各國ほぼ共通のやうである。併し、日本はそれが一層甚しい、殊にそれが小學校の教師に對して更に一層甚だしいのである。だから動もすれば不平の感が無いではないが、「若き教師」の間は不平など云つてゐる暇はなく、慕直に職務に向つて進むべきだ。固より受くる所の収入が甚だ少いから己れの生活を質素に出来る丈儉約に儉約を加へて少しでも餘裕を作ることが肝要である。儉約は直に貯蓄金溜めと思はれるが、決してさうではない。其の餘裕を以て先づ研究すべき必要な書物を買ふことだ。そして其の買つた書物を恰も蠶が桑葉を喰ふ如く、片ツ端から讀んで了ふことだ。實はそれが教師たるもの、眞の財産である。成る程書物は何程澤山積んでも、金錢に見積つた財産としては極めて僅かなものであるかも知れぬ、併し書物の中には無限の精神的財寶が含つてゐる。それをどし／＼讀んで心の中に取り入れて貯へることは心的財産を積むことになる。孔子先生も「身の中の財は朽ちること莫し」と云はれて居る。若い間に溜め込んだ此の心的財産は生涯教師をして居

る間に永久に有益な利子が生れて来るのである。

かくして書物を購讀してゐると、だん／＼蔵書の數が嵩んで多くなつて来る。そこで、夫れはきちんと分類的に整頓して置く必要がある。今日の様に「必要な智識」が非常に多くなつた時代に於て、それを悉く脳髓の中に記憶すると云ふことは到底出来るものではない。唯、必要に應じて何時でも自己の藥箱箱から引き出さるゝ様にして置くことが肝要である。

それから蔵書が多くなると、だん／＼時代も過ぎて今は餘り必要もないからとてそれをお拂ひ箱にして新しい書物と買替へることを爲す人も尠くはない。それも場合に依つては止むを得ぬことで有るかも知れないが、出來得べくば其様なことをせず過去何年か何十年か讀んだ書籍を年次的に排列して整頓して置くのが非常に結構である。さうすると書籍の陳列されてゐる標題を見ただけで學問の推移や發達の跡も知られる。亦自己の智識や思想の経路も考へられて非常に有益である。斯様のことは若い時から其の方針でやつて行くでないと、年老いて後に初めて氣付いても最早及ばないことであるから著者の老婆心から一

旅行は識
見を高め
る

寸附言した譯である。

書籍の購入に次いで是非實行を勧めたいのは旅行である。成る程書物に依つて研究をし多くの智識を取り入れることは必要であるが、書物に依つて得た智識は、其の儘ではまだ／＼「靜的な智識」たるを免れない。旅行をすると其の間に地理や歴史に關するものは勿論、理科や文學、美術、經濟等凡ゆる教育教材に關する智識が攪反され、亦、醗酵されて一種の活力を帯びて来るのである。別言すれば靜的な智識が『動的知識』と成つて来るのである。同時に旅行から得られた見聞に依つて見識が非常に高まつて来るのである。由來教育者は一般に見識が狭いと云ふ謗を免れない、此の缺點も除くことが出来る。斯くして自己の智識が動的となり、又、見識を帯びて来ると云ふことは、自己の智識の教育價値を高め又其の教育力を大ならしむることゝなるのである。之れ著者が大に旅行を勧める所以である。

旅行には書物を購ふのと同様相當のお金を要するは無論であるが、平素の心掛けさへあれば必要なる限度のお金はどうか出来るものである。たゞお金が出來たら旅行もしやう

著者の歌
羅巴旅行

など云ふ様な偶然や僥倖を當てにしてゐる様では到底機會は來るものではない。曩にもちよつと云つた如く、著者は勤勞教育の研究を始め爾來相當に年所久しく獨逸の書物や雜誌を通して理論や實施の一斑は窺ひ得たが、是非一度獨逸に行つて親しく其の實際を視察したいと云ふ念願を懷いた。併し幾何年経つても僅かな俸給の中から洋行費用を作り出すことは甚だ六ヶ敷、それでも自分はどこ迄も自力でやりたい考へで、五圓ため拾圓ためして來たが、それは殆ど夢のやうな希望に過ぎなかつた。何年経つても千を以て數ふる額には達しない。而かも時局は益々重大なる局面に向つて押し迫つて來た。遂に斷然實行を決意した。

抑も余の獨逸勤勞教育視察の計劃たるや、之に依つて得たる何ものかを以て聊か貢獻せんとする教育報國の念に出發し、隨つて全然自力的計劃の上に打ち立てたもので有つた。そこで微力薄資な余の計劃は

シベリア鐵道に依つて

往途、二週間を以て獨逸に着し

滞在、二週間を以て出来るだけ獨逸の諸學校を視察し

歸途、二週間を以て歸國する

總計六週間即ち四十二日間を以てする。之れなら敢て政府や他人の助力を仰がないでも全然自己の資力を以て遂行することが出来ると云ふ考へであつた。

僅々二週間を以て……果して何を視、何を掴み得るだらう？……と早速疑問の矢は放たれるに違ひない。併しながら余の視察の目的は極めて明確に限定されて居つて普通の人のやうに單なる漫遊ではない。彼國に於て勤勞教育が眞劍に行はれてゐる其の實況を見ればそれでよい。例へば吾々が我が國內の教育視察に出掛けたとする、二週間の出張期間があれば隨分東西に駈け廻つて各地方の視察を遂ぐる事が出来てゐる。況んや獨逸は四通八達交通機關の發達した國である。之をうまく利用すれば相當の視察は出来ると余は確信した、それで此の案を以て既に彼の國に遊んだ諸先輩の意見をも聽いて見た。孰れも贊成の意を表して余を激勵された。然しながら此の案を以て愈々決行に及ぼんとするや、天は自ら助くる者を助くとかや、天は余に授くるに獨逸の視察だけを以てせず、更に歐羅巴の他

の諸國をも比較視察すべき使命を以てせられた。即ち、

第一、獨逸は世界大戰に於て一敗血に塗みれた國である。戰敗國として苦心慘憺した獨逸の教育の真相を見抜くには之と相對立する戰勝國たる佛蘭西や英吉利の教育をも對比して視る必要がある。

第二には、獨逸は戰敗の後を受けて、何とかして戰前の國勢を挽回せんとす鬱勃たる意氣に炎えて居る、この意味に於て寧ろ獨逸は勃興國である、然るに今は獨逸に併合されたが、當時同じ同盟國だつた奧太利は最早殆ど亡國に瀕してゐる。それは何故だらう？而してそれが兩國の教育の實際上に如何に異つた現象が見出さるゝ？ 茲に於て亦奧國も見通す譯に行かない。

第三には、獨逸は世界大戰後何と云つても經濟的に大疲弊に陥つた。然るに彼の世界大戰の戰禍より免れて益々國富を増大せる國々に比べて其の教育の施設の程度に幾干の懸隔を認め得るであらうか。即ちそれは和蘭と丁抹である。和蘭は過去數百年の間に蓄へ貯へ來つた親讓りの富國である。之に反し丁抹は最近五十年間に國民の覺醒と努力とに依つて

作り上げた富の國である、之等兩國の教育と獨逸のそれとを對照することは獨逸の教育を眞解する上に於て決して徒爾ではない、遂ひそこへらにも足を向けることにした。

第四には、愛の教育者として、將又勤勞教育の元祖、近世一般教育の開拓者として吾人



前碑の著者にして、
ペスタロッチ先生の
於けるに於ける
リッチスター
チュースター

の崇敬止む能はざるペスタロッチ先生の故國瑞西を訪ね、先生の碑前に引ひて無量の感慨に耽りたく、又更に旅程を進めて現代の英傑と歌はるゝムツソリニー氏が果して伊太利國の教育の上如何なる果斷を以て改革を施しつゝあるか、之等をも考へ合せて遂に瑞・

伊の兩國にも足を運ぶ要がある。

斯くして六週、四十二日間の計劃は約五ヶ月の延長の止むなきに至つたが、それは全然期待もせざりし縣當局の援助や、思ひも寄らぬ幾多の知己朋友諸君の同情に依つて、遂に

必要なるだけの視察を成し遂げることが出来た。之は全く天の賜物と云ふの外はない、殊に余が旅行中非常に恵まれたことは、モスコウに於ては恰も我が郷縣出身で後に外務又は總理の顯職に就かれた、當時駐ソ廣田弘毅大使が居られて格別の盡力に預り、伯林にては平沼男爵及び前獨逸大使本多熊太郎氏の御紹介に依り、小幡大使及び東郷參事官の同情と配慮とに預り、加ふるに曾ての教へ子で有つた佐藤節子氏あり、夫妻共に獨逸の通者で多大の便宜を得た。又、和蘭には公使館に同郷の知友福間一等書記官あり、倫敦には當時余が在任せる中學傳習館出身の野中春三氏あり鐵道事務官として駐在、巴里にては往途シベリヤ鐵道に同車して意外の懇親となれる後の少將、當時の石井大佐あり、又、當時國際事務局の次長たりし伊藤述史氏ありて、各氏から格別なる盡力を辱ふし、又、奧太利にてはウイーン公使館に神田書記官あり、更に伊太利にては下位春吉氏ありて之亦多大の力を得、到る所に於て其の地の事情に精通されたる人々の同情ある盡力と腹藏なき意見とを聽承することを得、短時日の視察たりしに拘らず、比較的多大の收穫と且つは又比較的誤らざる視察を遂げ得たことを自信するに至つた譯である。……以上は余が教師在職中に爲

した旅行の一齣に過ぎないのであるが特に記して「若き教師」諸賢の爲めに聊か參考に供した次第である。

第五 教育者の理想信念及び識見

一、今の若き教師の最大缺點

余は決して非難や攻撃を敢てするものではない。況んや悪口を言ふ積りでもない。衷心より若き教師諸君を敬愛する者である。然し乍ら何と言つても今の若き教師達には教師としての理想が低い。又其の信念が弱い。更に又識見に乏しい。是は如何に蔽はんとしても蔽ふべからざる事實であると思ふ。是には色々の原因もあり、又社會情勢にも因ることであらうと思ふが、其の理由の如何に拘らず事實は事實である。理由に依つて事實を寛容したり見遁したりする譯には行かない。それで何處迄も理想の高むべきは高め、信念の強むべきは強め、識見の廣むべきは廣めて行かなければならぬ。

何故の理想信念？
識見？

無論理想、信念、識見は教育者としては一般に誰にも必要である。だが特に之を若き教師に對して強く響かせたい所以は、

第一、總て物は成るの日に成るものではない

大きな事業にはそれだけ多くの準備と深き研究とを要するものである。

理想とか識見とか云ふものは、眼にこそ見えぬ全く自己の内界に於ける一つの精神的建設に外ならぬのである。

そこで其の精神的建設をして愈々大ならしめんとすれば、する程、若き時より其の準備と事業とに取掛からなければならぬのである。

第二には、凡そ理想無き處には進歩も發展も無い。

進歩と發展との見らるゝ處には必ず其處に理想があつて輝いて居る。

第三には、理想があつても信念が弱くては其の理想に實現性が乏しい。途中で挫折する。

信念が強くても識見が無いと批判力を缺く、随つて偏狹に陥り易い。

又何かの場合に錯誤を來して意外の失敗に陥る。

以上三つの理由から、特に若き教師時代に大いに理想、信念及び識見を養ひ、高め、強めて置く必要がある。著者は茲に感激に充ち肝に銘した一つの史實を談じて紹介したいものがある。

それは、著者は一昨年臺灣總督府の招聘に應じて、文教局主催の教育者修養講習會に出席した。言ふ迄もなく臺灣は日清戦役に依つて我が領土に歸したものである。最爾たる一小島には過ぎないが、新附の民に對して初めて日本教育の施された處である。而して初めて同化教育の試みられた處である。四十有餘年の久しき今日に到る迄、此の大方針の下に教育が行はれて居る。

然るに

臺灣教化
に殉じた
壯烈悲愴
の信念

臺灣の教育者の間には「芝山巖精神」といふものがあつて、それが相當に根強き一種の「教育魂」となつて、隱約の間に教育者の精神界を支配して居る。

抑々それは如何なる由來を有するものであるか、著者は彼の地に於て親しく其の物語を聞き、又感激の餘り親しく史實の主人公等の英靈を祀れる神社に參拜して、感慨轉々禁ず

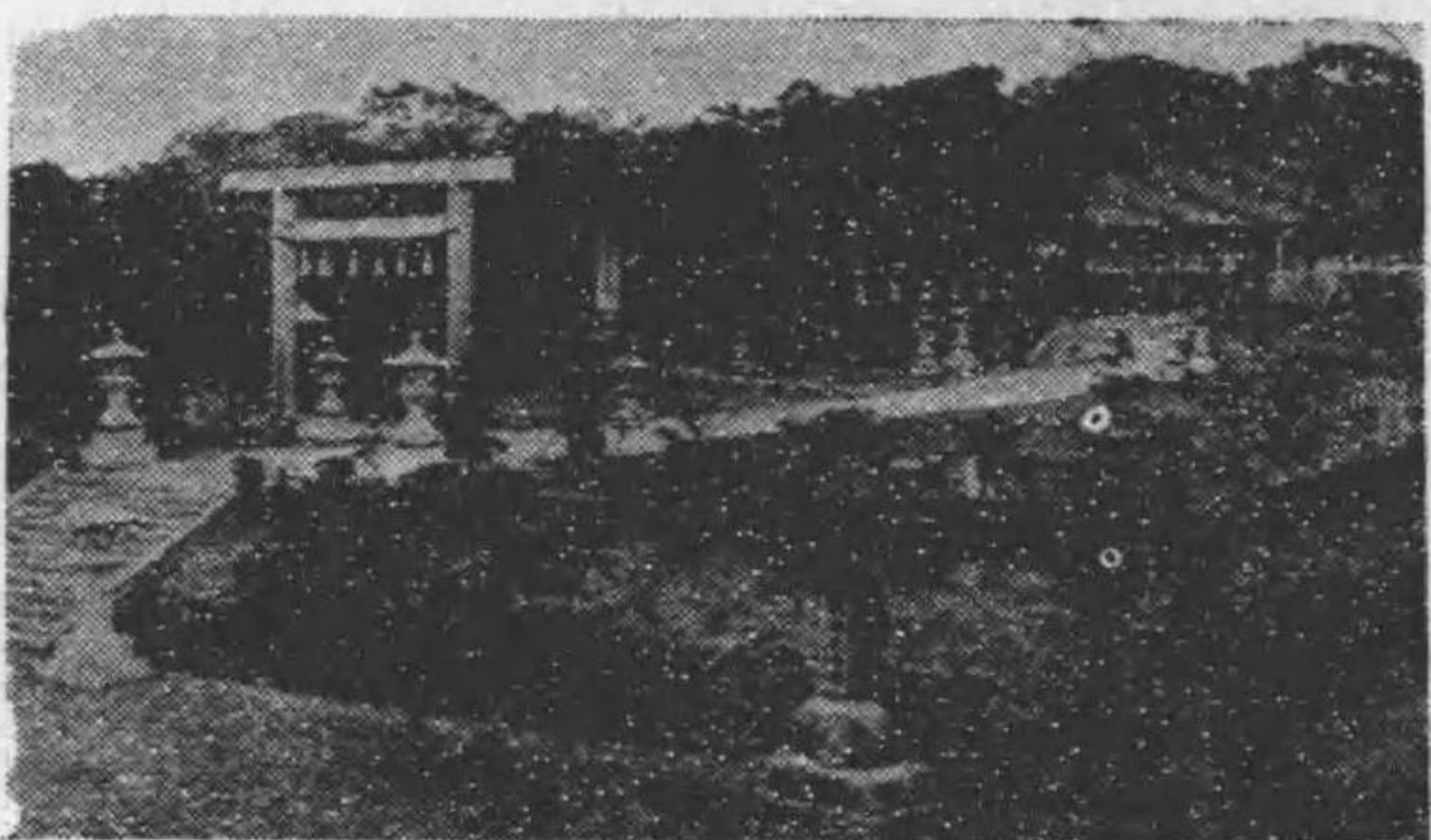
る能はざるものがあつた。

今左に神靈として神社に祀られある人々の氏名を謹示せん

學務部員	山口縣	揖取	道明	三十九歳
同	愛知縣	關口	長太郎	三十八歳
同	群馬縣	中島	長吉	二十七歳
同	東京府	桂	金太郎	二十七歳
同	山口縣	井原	順之助	二十四歳
同	熊本縣	平井	數馬	十八歳

是等の人々は臺灣島民に日本教育を施し、彼等を悦服し皇化し、以て八紘一字の天業を扶翼しまつり、皇猷恢弘の第一步を踏出さんとする大いなる理想と強き信念との下に日清戦役平和克服直後に赴任したものである。

即ち臺灣統治の成否如何は、日本が將來の植民地同化に成功し得るや否やの試金石であつた。



英靈靜かに眠る芝山巖神社

當時臺灣は條約と武威とに依つて日本の屬領地とは成つたが、蠻風漲り、漳泥の氣充ち殊に島民は戦争後日尙淺くして日本に對する反感、對敵の意氣に燃えて居つた時である。

即ち「新附」とは云ひ乍ら、決して「眞附」ではなかつた。

然し乍ら見よ是等赴任の人々の年齢を！ 皆な若き至誠熱血の士のみであつた。

大和男子の血潮が全身に漲つて居つた。

此等は兵士の劍に代ゆるに筆を以てし、之を教化の活人劍と爲した。

又軍人の叱咤の聲に代ゆるに愛撫の溫情を以てした。

明治二十八年六月十七日、總督府に於て始政式舉行の翌日總督府は學務部を臺北市外の一部である大稻埕と云ふ處に開

設した。然るに當時は争亂の後で、住民の多くは難を他に避けてゐた爲め、急に學校開設の見込みも立たなかつた。唯當時臺北より東北三哩許り隔てた士林と云ふ地方のみは住民

も安定し、又其の名の示す如く、古來學者志士の輩出した地として世に知られて居つた。之を聞いた伊澤學務部長は早速自ら其の實地を踏査して、學務部を士林の芝山巖上に移すことにしたのである。伊澤部長は芝山巖移轉後、早速士林街の有志を山上に招いて説くに學堂開設の趣旨を以てした。

其の結果、翌日から數名の生徒が集つて來た。而して茲に初めて臺灣に於ける日本教育の端緒が開かれた譯である。即ち此の日は明治二十八年七月二十六日であつて、是が我が國に於ける新領土に對する教育發祥の地たると同時に發祥の日となつたのである。

其後生徒も次第に多くなつて來たが、然し乍ら何ぞ知らん。此の士林地方は、其の昔數百年前迄は、元蕃人の部落、麻少翁社の有つた處である。言ふ迄もなく蕃人の血の中には少からざる暴虐性が流れて居るのである。無論、其後屋移り歳替るまゝに部落民も轉々入替つて居つたとは云へ、其の地方の深い地の底には、彼の暴虐の血が未だ潜んで居つたのである。

其年の十二月の三十日であつた。

元旦を期して北部一帯の不穩の暴民が、大舉臺北を襲撃すると云ふ情報があつた。そこで其の土地の或る人は此の噂の一端を先生方に告げて避難を勧めたと云ふ事ではあるが、教育愛に燃え、島民教化の外に餘念のない六氏は、更に意に介するところが無かつた。

翌くれば明治二十九年一月一日、芝山巖上の六氏は總督府に拜賀の爲め午前七時頃山を下り臺北に向つた。

基隆川の渡船場に着いたが意外にも渡船が無かつた。……此處で初めて前夜來の臺北に於ける騒動を聞いた。そこで六氏は止むなく引返して、歸途士林警察署に立寄つたが、署員は芝山巖に歸る事の危険を告げて極力引止めた。それにも拘らず六氏は部長の留守中、學務部を捨て去るに忍びない旨を答へて歸り、山上に着いたのは午前九時過ぎであつた。斯くて六氏は鳩首協議した結果、決然相携へて山を下つた。

之より先警察署員も既に引揚げて居つたが、土匪の一隊は引揚後の警察署に闖入して略奪を極め、更に道を轉じて芝山巖に向はんとして居る處であつた。六氏は其の情勢を知り

危険とは思つたが、元來我等は彼等を教へ導く愛撫の任に當つて居る者である。であるから話せば分ると云ふ固き信念を持つて彼等に説得是れ努めたのである。

然し乍ら頑迷不靈の土匪の容るゝ所とならず、六氏は止むを得ず奮闘力戦したが力遂に及ばず、空しく首を列べて彼等の兇刃に瘡れた。

残又残、酷又酷なるものがあつた。

斯くて氏等の身體は地下の土と化した、其の精神は決して死せなかつた。

今尙六氏の芳香遺烈は「芝山巖精神」となつて、臺灣在任の教育者の間に輝いて居る。

明治二十九年十月二十一日付を以て其の遺族に對しそれ〳〵行賞の御沙汰があり、更に超えて明治三十一年九月三十日靖國神社に合祀さるゝ光榮に浴した。

芝山巖上には六氏の英靈を祀る神社が建てられてある。其の社殿は必ずしも壯大ならずと雖も、在臺の教育者は勿論其他一般の崇敬を集めて居る。

今や我が帝國は滿洲に北支に將又南支中支に驥足を伸べ、新しき大理想に向つて勇往邁進の途上にある。此の時局に際會し、若き教師たる者誰か發奮せざる者あらんや。

抽象的な
理想信念
には力が
ない

二、大教育家の傳記を讀め

理想も信念も識見も必要ではあるが、唯觀念的な抽象的な理想や信念、識見は高いやうであり、強いやうであり、廣いやうであつても、案外實質に乏しく空虚な事が甚だ少ない。それかと云つて若き教師等が自から事實にぶつ付かつて、凡ゆる場合の試練を爲すと云ふことは素より不可能な事である。茲に於て先哲、前賢の、大教育家の傳記を讀むと云ふ事が非常は必要である。例へば西洋の古代ではピタゴラスとか、ソクラテースとか、プラトーン、アリストテレス、近世ではダンテ、ベフトック、ボツカチヨ、更に下つてはルーテルとか、ベーコンとかロック、ルツソー、ベスタロツチ、ヘルバルトと云ふやうな大教育家の傳記、東洋に於ても孔子あり、老子あり、朱子あり、陸象山、王陽明あり、又我が國に於ても中江藤樹先生とか、貝原益軒、伊藤仁齋、廣瀬淡窓、二宮尊徳、吉田松陰と云ふやうな諸先生は、其の思想、識見、人格に於ても決して西洋や支那の大教育家に劣らぬ偉大な教育家であつた、是等の人々の傳記を讀むと其間に自ら教育上の理想や信念識

傳記を讀む注意

見が養はれて来る。

傳記を讀むに特に肝要な事は、單に事實を事實としてだけ知るにあらずして、是等大教育家の理想の由つて来る所、其の信念の基く所が果して何れに在るか、哲學か、儒教か、宗教か、其の何れが根柢を爲して居るかを、深く紙背に徹して洞察するところがなければならぬ。否らざれば幾ら傳記を列べ讀んでも大いした効果を得ることは出来ない。

それから大教育家の傳記を讀むに就て、常に考慮を怠つてならぬ事は、其の人と時代との關係である。即ち大教育家たる人は必ず其の時代の産物である。時代を離れて大教育家は無い。教育が時代に即應せねばならぬと云ふことは論ずる迄もない。茲に於て我は今如何なる時代に立て居るものであるかと云ふ事を考へなければならぬ。さうして其の時代に對する理想を立てなければならぬ。無論我々平凡な者は昔の大教育家たる事を夢みるは不遜であるかも知れぬ。然し乍ら現實に於て活動する者は誰でも古人が其の時代に應じて行動をしたところの事績に鑑みて現代に處する事を爲さなければならぬ。斯く考へる時、我々は大家教育家の傳記を讀む事が、非常に必要であることを痛切に考へるのである。

三、かむなからのみち 惟神道の研究に就て

前項、大教育家の傳記を讀むことを勧めたが、傳記は個々の人に關して居る。これを夫れ／＼各個に就いて攻究する時、それを深究すればする程、彼も良し是も感心だとなつて自己の思想をして却つてバラ／＼にする弊がないでもない。茲に於て自己の理想、信念、識見を何ものかに依つて之を結成して以て自己の「思想體系」と云ふものを確立する必要がある。然るに此の思想體系を確立するには必ずそれに中心核を爲すものがなければならぬ。果して其の中心觀念を何に求むるか、云ふことは非常に深刻なる考慮を要すべきである。然るに我が國には古來惟神いむかみの大道と云ふ崇高偉大な觀念が有つて一貫して來て居るのである。而してそれが我が國の國體の淵源ともなり、政治も宗教も經濟も、軍事も外交も總べて之に依つて統一さるべきものと成つて居る。然るに此の「惟神道」たるものに就ては、從來極めて少數の學者や識者の間には能く知られ研究もされて居つたことではあるが、廣く一般的には多く氣が付いて居なかつたのである。よしそれに氣が付いて研究されたとし

自己の思想體系の確立

ても、それを教育と結び付けると云ふ事に就いて、餘り多く考が及んでゐなかつたのである。是は實に遺憾至極な事である。流石に明治維新は百度改新を斷行されたが其の根本には復古精神が貫流して居つた。其の一大表現として明治三年に惟神大道を宣揚するの勅語を御煥發になつたのである。今左にそれを敬示すると

惟神の大道を宣揚するの勅語（明治三年正月三日）

朕、恭しく惟みるに、天神・天祖、極を立て統を垂れ、列皇相承け、之を繼ぎ、之を述ぶ。祭政一致、億兆同心、治教、上に明らかにして、風俗、下に美はし。而も中世以降時に汗隆あり、道に顯晦あり、治教の洽ねからざるや久し。今や、天運遁環し、百度維新す。宜しく治教を明らかにして、以て惟神の大道を宣揚すべきなり。因つて新に宣教師を命じ、以て天下に布教す。汝群臣衆庶、其れ斯の旨を體せよ。（原文漢文體）

尙畏くも 今上陛下御即位の勅語の中にも、惟神の大道に遵ふべき御聖旨を拜するのである。

惟神の大道を宣揚するの勅語

今上陛下御即位の勅語（昭和三年十一月十日）

朕惟ふに、我か皇祖皇宗惟神の大道に遵ひ、天業を經綸し、萬世不易の丕基を肇め、一系無窮の永祚を傳へ、以て朕か躬に逮へり。朕、祖宗の威靈に頼り、敬みて大統を承け、恭しく神器を奉し、茲に即位の禮を行ひ、昭に爾有衆に誥く。

皇祖皇宗國を建て。民に臨むや、國を以て家と爲し、民を視ること子の如し。列聖相承けて仁恕の化下に洽く、兆民相率めて敬忠の俗、上に奉し、上下感孚し、君民體を一にす。是れ我か國體の精華にして、常に天地と竝ひ存すへき所なり。

皇祖考古今に鑒みて維新の鴻圖を開き、中外に徴して立憲の遠猷を敷き、文を經とし、武を緯とし、以て曠世の大業を建つ。皇考先朝の宏謨を紹繼し、中興の不績を恢弘し、以て皇風を宇内に宣ふ。朕寡薄を以て、忝く遺緒を嗣ぎ、祖宗の擁護と億兆の翼戴に頼り、以て天職を治め、墜すこと無く、愆つこと無からむことを庶幾ふ。

朕、内は即ち教化を醇厚にし、愈々民心の和會を致し、益々國運の隆昌を進めむことを念ひ、外は即ち國交を親善にし、永く世界の平和を保ち、普く人類の福祉を益さむこと

今上陛下御即位の勅語

を冀ふ、爾有衆、其れ心を協へ力を戮せ、私を忘れ公に奉し、以て朕か志を弼成し、朕をして祖宗作述の遺烈を揚げ、以て祖宗神靈の降鑒に對ふることを得しめよ。

斯く惟神の大道と云ふものを御示しになつて居るのにも拘らず、是迄教育者が茲に深き思を致さなかつたと云ふ事は大いなる手落ちであつたと思ふ。之れ余が特に聲を大にして若き教師諸君に其の研究を勸むる所以である。即ち此の惟神の大道を中心觀念として教育者としての理想を高め、信念を固め、識見を養へと云ふのである。同じく理想とか信念とか識見とか言つても道德的なものもあれば哲學的なものもある。又宗教的なものもある。

是等は各々異つた立場に於て説を爲し或は一宗一派を立て、居るのである。であるから教育者が是等に依つて國民教育の實際の上に處して行くと云ふ事は、國民精神統一の上に於て甚だ宜しくない。素より研究の自由とか、信教の自由とかは必要であつて、總べての事に劃一を求むると云ふことは不可能である。又決して良い事でもないが、國民教育と云ふ以上は何ものかに依つて大同歸一すべき中心點がなければならぬ。此の點に於て惟神の大道研究と云ふ事が益々其の緊要を感じられる譯である。

抑々惟神の道とは如何なるものであるか。此の偉大なる觀念は容易に言語、文字を以て表明或は解説せらるべきものではない。然し乍ら元來「神ながら」とは「神流れ」と云ふ事である。流れとは延長の義である。即ち上に總べての大根源たる神が在つて、凡ゆるものは其の延長、流れに依つて分々岐々されたものである。又「神ながら」とは「神の柄」と云ふ義に解釋しても差支へない。であるから人柄とか品柄とか、或は同胞のことを「はらから」と云ひ、又人の身體のことを「からだ」と云ふ。死んだ身體のことを「なきがら」と云ふ總べてがらとは物の本質を指したものである。凡ゆるものは大根源の神より分れ、種々様々のものに分れて、それらの本質を以て現れたものである。であるから神の流れと解釋するも、神の柄と解釋するも、其の眞髓は同様である。一層之を具體的に言ふならば動物も植物も礦物も、森羅萬象皆な惟神の表現であつて、人も亦斯の道に依つて生れ、斯の道に依つて活動し、斯の道に依つて死すべきものである。即ち天地萬物一切の物の眞髓に此の道が貫通して居る譯である。故に惟神の道は倫理、宗教、哲學を超越して、凡ゆる人類文化の極致、即ち眞、善、美、聖、富、權の極致である。かるが故に、惟神の道は必

すしも獨り日本民族の特有ではない譯である。無論西洋にも此の道は有つた。だから西洋の哲學史を讀んだり、宗教史等を繙いて見ると、西洋の學者や宗教家等の言つて居る事の中にも我が惟神の道と殆ど一致する思想觀念を見出すことが決して少なくない。又實際に於ても、西洋の古代には其の道の表現として日本の神社と同様なものも有り、又一定の祭祀も行はれて居つたのである。それが何故に西洋に於て遂に廢絶に歸したかと云ふと、元來西洋の諸國は支那と同じく革命易世の國であつて、代が變ると前代の事物を出来る丈け打壞して次代のものをして前代のものを追慕せんとする念を去らしめんとする傾向がある。そこで古き傳統の觀念は自ら忘却されて來る。就中惟神の道の廢絶の最大原因を爲したものはキリスト教の出現で有つて、彼等が其の宗旨を弘布せんとするや惟神の道や神社があつては頗る邪魔なりと考へ、排撃之努め、神の獨り子であるイエスの説き示せる唯一神を信すべきを極言し、他の總てのものを遂に潰滅に歸せしめたのである。現に今羅馬やギリシヤに行つて見ると古代に實存して居つた神社の廢墟や祭祠の跡が累々として殘存して居る。余は之を羅馬に於て親しく目撃し、嗟嘆久しうして尙禁する能はざるものがあつ

た。斯くて西洋諸國に於て基督教出現の結果、神社が毀たれ同時に惟神道が亡ぶに至つたのであるが、之れは全く

「道」と「教」とを混同したからである。

惟神道は「道」であつて「教」ではない。

道は神に依つて作られ天地宇宙に通ずるもの、又之を天理と云つてもよい。然るに「教へ」は人に依つて編み立てられ人に依つて唱へられたものである。故に必ず一定の分野がある。別言すれば宗旨宗派なるものが生じて來る。即ち道は普遍的にして教へは殊別的である。前者は恒久的にして後者は生滅的である。西洋の諸國は普遍恒久な道を忘れて殊別生滅の教へに従つた。反之、我が日本はどこ迄も道を樹て教へを容れて來た、我が日本民族は兩者の判然區別すべきを知り、決してそれを誤らなかつた。而して自ら「神ながら言舉せぬ國」と稱して堅く傳統を固守し「萬世一系神ながらの皇室」を奉戴して來た譯である。

斯くして惟神道は最早日本民族の固有獨特のものとなつた。之れ我が日本民族が天業民族と稱せらるゝ所以であつて、天業とは即ち惟神の大道そのものの實現實行を期するに外

ならぬ。されば吾々日本國民はあく迄も天業を扶翼し奉つて斯道を漸次全世界人類の上に宣揚し、其の光明に浴せしめなければならぬ一大使命を有するものである。

斯く考へて來ると、我が國民教育の理想を惟神道の中に求むると云ふことは正に當然のことである。即ち我が國の教育は斯の惟神大道と云ふ第一原理の上に立つて行はるべきものであることを知らなければならぬ。従つて教育者の信念も識見も亦其の中心を茲に求めなければならぬ。爰に於て教育者に惟神道の研究と云ふことが非常に重要となつて來る而して之を如何にして國民教育の根柢たらしむるか云ふことに就き一層具體的な方法が攻究されなければならぬ。

然るに曩にも言つたやうに、惟神道なるものは元來言語や文字に依つて表明せらるべきものではない。惟神の道の研究の根柢には、敬神と云ふ事が其の本源を爲して居るのである。即ち、惟神道は敬神の實行體驗に依つて初あて體得せらるべきものである。敬神の體驗無き惟神道研究は畑の水練に過ぎないのである。それ故余は日本の若き教師諸君に對して敬神の實行を持に勧めたいと思ふ。動もすると年の若い間は敬神と云ふやうな事には甚

敬神の實行に依る
惟神道の體得

だ志が向はない傾きがある。であるが特に教育者に於ては之を努めなければならぬ。家庭に於て日夕神棚に對して拜神を怠らないやうにすることは勿論であるが、毎朝若くは朝日等にキチンと定めて郷土の氏神社、又は産土神社に參拜することである。それから旅行等の際官國幣社や其他有名神社に參拜した時には、必ず其の祭神と由緒とを訊ねて其の神徳に感ずるやうにしなければならぬ。斯うして居ると最初は形式的機械的で、自己の心裡には左程敬神の念も信仰の兆も無い様であるが、兎に角參拜を續けて年所を経て居ると、必ず不知不識の間に心の誠が現れて敬神、信仰の念が昂つて來るのである。

四、云ふ事は云へ爲す事は爲せ

斯くして自己の理想、信念、識見の下に教育者としての自己の思想體系が出来上つたならば、それからそれを根柢とし據點として——云ふことは云ひ、爲すことは爲す——と云ふ堂々たる態度を持つて邁進すると云ふことが最も緊要である。「云ふことは云へ」といふのは決してお喋りの謂ではない。云はねばならぬ事は臆せず屈せず云へと云ふことであ

眞の沈黙
とは云ふ
べきは云ふ
ふことは云
あることと
ある

る。無論沈黙の徳も守らねばならぬ。然し云ふべきを云はざるは眞の沈黙ではない。佐藤一齋は言志録の中に「言はずして化するは教への神なり」と云つて居る。成程是は至言である。併し吾々は云はずして化して行くやうな神様には容易に成れるものではない。又爲すことは爲せと云ふのは、大いに實行に訴へよと云ふことである。實行力の伴はない理想や信念、識見は何の價値も無い。世の中には人格者と云ふものが有る。其の所謂人格者なるものを觀察をして見ると、多くは云ひ度き事も我慢して云はず、せねばならぬ事も遠慮してせぬやうな卑屈な、所謂沈鬱も炊かず屁も放らんと云ふやうな人が多い。斯んな人では決して日に進み、月に伸んで行きつゝある清新潑刺たる兒童の教育の任に當る事は到底駄目である。兒童が潑刺として居るやうに之を指導する教師其の人も亦潑刺たるものがないければならぬ。兒童に對しても同様であるが、又當局や校長等に對しても、或は會議等の場合に於ても、若き教師はどしどし云ふべき事は云つて教育上の意見を發表し聊かも遠慮することは無い。又實際上に於てもやつて見たい事はどしどし遣つて見るがよい。云ふべき時に云ひもせず、爲すべき時に爲しもせず於て、後で愚圖々々不平を云つたり愚痴を

こぼしたりするやうな事は甚だ潔しとせざる所である。又、甚だ宜しからぬ事である、寧ろ戒むべき事である。

然し乍ら教育上の理想を高め、信念を鞏固にし、識見を廣めて、云ふべき事は云ひ、爲すべき事は爲すやうにするには、又平素の練磨と云ふ事が必要である。特に若き教師の時代に於てそれが緊要である。然るに此の練磨といふことは自然に任せて置いては其の機会に甚だ乏しいものである。そこで其の練磨の機會を作る爲に、特に若き教師諸君に勧めたいのは、「同志自由研究會」の如きものを組織して、毎月一回とか、或は毎年何回とか期日を定めて、互ひに相談論風發して思想を切磋琢磨することが最も必要であると思ふ。是は著者が自分の若かりし時の過去を追憶して其の思ひ出の儘を附記した次第である。

第六 起て！ 愛國教育の爲に

一、愛國教育とは何ぞ

我が國民には古來一種の國民性として

所謂大和魂又は日本精神なるものが有つて

先天的に忠君愛國の精神に富み

就中犠牲の精神に富み

一朝事有るの日には身命を獻げて聊か惜まず

是れ我が國特有の美風、國體の精華とも云ふべく眞に世界無比、其の光輝は獨り我が國史の上のみならず、既に世界史上にも燦然たるもの有るは今更呶々を要せない處である。

併しながら斯の傳來の愛國心を單に古來の習慣や傳統にのみ委して安心して居つて宜いであらうか、如何なる大木も培はざれば遂に枯瘦するを免れない。況んや人心の變化と歴史

平時の愛
國心涵養

の流轉との急調なるに於ておや。即ち絶えざる不斷の教養が最も肝要である。今回の支那事變に於ては幾多忠勇義烈の士を出し大に意を強くするに足るものがあるが、翻つて内を顧みると其の一面には外征の同胞を他所に見て左傾赤化の手先となつて暗躍して居るものも絶無とは云へない。殊にそれが國家教育の淵藪たる最高學府の中から、現に問題の人が疑獄の裡に縲紲されてゐるではないか、斯の如きは歐羅巴などでは到底思ひも寄らぬことである。先年ナチス獨逸に於て同國の共產主義者排撃運動があつて、可なり激しい突飛的なやり方の様であつたが、あれは同國內の猶太人に對するものであつて、決して純粹の獨逸人に對するものではなかつたのである。勿論國の内外を問はず、時の古今を問はず、孰れの國孰れの時にも少數の非國民のあることは免れ難き所、それは何等大勢には係はるものではない。併しそれ等を眼下に見下ろして能く國民の大勢を維持せんには、平素に於て餘程國民精神の堅實なる根柢を作つて置かねばならぬのである。

國家の浮沈及びその運命は、寧ろ平時に於て刻々に決せられつゝあるのである。

戦ひの勝つは勝つる日に勝つにはあらず、平時の教育及び訓練が之を決定する。

歐羅巴の諸國では國と國とがモザイクの如く切り組まれ、國境を相接し殆ど膝突き合せて凡ゆる生存競争が行はれて居る。それで互に寸時の油斷もならない。随つて愛國的教育及び其の施設が非常に重大視されるのは自然の勢である。然るに我が日本國は古來波靜かなる大平洋上に龍宮蓬萊の一孤島として生存して居つた、だから吾々日本國民は稍もすると儉安に慣れ易い、勿論明治維新後我が國も世界的仲間入りをして漸く頻繁な世知辛ひ外交舞臺に出馬する様に成つたが、其の刺撃は未だく決して歐洲の諸國に於て見るが如き常時的のものではない。それ故我が國に於ては愛國心と云へは必ず「非常時」を聯想するやうに成つて居る。尤も孰れの國たるを問はず、愛國心は非常時に於て高調され、熾烈され、平時に於て中和されるのは自然の勢で、決して我が國のみに限つたことではないが、現時の我が日本帝國が既に五大強國とか三大強國とかより一頭地を抜きて、世界的指導の地位に立ち、八紘一字の天業を着々として實行して行かうとするには、國民がそれ丈の一大自覺を爲すと同時に第二の國民を作るべき國民教育が更に一大反省を爲さなければならぬ。

茲に我が國の教育の上に斷然一大時期を劃しなければならぬ、即ち徹底的に愛國教育の

上に目覺むる所が無ければならぬ。斯うした時に吾人の期待は全然「若き教師」の上に掛けるるのである。生命ある愛國教育なるものは、ガソリンの如く燃ゆる血汐に依つて充満された「若き教師」でなければ決して行はれない。氣の抜けた様な老教師では最早兒童を感奮興起せしむることは六ヶ敷い。

余伯林に到着するや、初め二週間は専ら伯林市内及び附近郊外の諸學校を視察し、それから一旦伯林を離れて一直線に獨逸最南の雄都ミュンヘンに行つて、ケルシエンシュタイナー氏を訪ひ、氏の紹介にて同市内の諸學校を視察し、其の序に奧太利に廻りウキーンより途中、中部獨逸の首都ドレスデンに遊び、再び伯林に歸り、更に南方ライプツヒを訪ね三たび伯林に歸り、次いで北獨逸の中心地漢堡を視察し、其の序に丁抹をも訪ふた、余は何處の學校を視察するにも一日一校を限つて最初の第一時より最終時限まで參觀して、教師にも兒童にも出来るだけ打解けた態度を以て接觸することを努めた。而して到る所の學校で都合宜ささうな教室で教師に相談して三十分間なり四十分なりの時間を與へてもらつて、不慣れな片言混りの獨逸語で兒童等に對し日本に就いての話をしたり、又、多くの場

合、日本を中心として東洋の一斑を示す地圖を掲げて、東京とか京都とか大阪とか横濱とか或は朝鮮とか奉天とかの地名の呼び方や發音などを教へてやつた——例へばトウキョウと云ふ發音が彼等のではアクセントの違ひで東京と聽えない。又、彼等はチヨウセンをコレアと云ひ、ホウテンをムクデンと呼んで居る。それ等を一々日本の読み方通り教へてやつた——。

斯くしてライプチツヒの第十小學校で例の通り地圖を掲げて、我が九州・四國・本土・北海道等指しながら之れ丈が固有の日本である、こゝに臺灣がある、之は日清戦争に依つて日本の國土と成つた、こゝに樺太がある之は日露戦争に依つて、それから此處に朝鮮がある。これも其の後我が國に併合されたと話をした。夫れはそれで話は一と先づすましたが、醜つて考へて見ると、余は餘りにも心もとない事を喋つたものだと思つた。それは獨逸は世界大戰に敗れてアルサース・ロートリンゲンを佛蘭西に割取され、其他各種地も悉く分割されて遺憾至極の念未が新たなるもの有るの時、我が國が彼も取り之も取つたと、取つたことのみ話したのは甚だ思ひ遣りのないことで有つたと思つた、そこで余は話を一

轉して、日本と獨逸とは元來歴史的に親善であることを説き、獨逸は必ず近き將來に於て偉大なる國家として復興することを信じて疑はないと、それとなく色々の話を取り混ぜて感情の緩和をこれ努めた。すると余の話が終るや一兒童が突然起つて

「あなたは只今日本と獨逸とは歴史的に親善と云はれたが、それならば何故に貴國は世界大戰の時に我が獨逸に向つて戦を宣せられた？」と稍々興奮の面持ちを以て問ひ掛つて來た、而も是は尋常六年に相當するクラスで有つた。余は頗る面喰つたが余は徐ろに——それは日本國民は決して獨逸に向つて戦ふ考へは毫頭無かつたのである。然し乍ら日英同盟の條約の結果餘儀なく英國に身方したのである——と答へた。其の際余は「餘儀なく」と云ふ言葉に餘り適當な語でもなかつたかも知れぬが、突差の間のことドローウングと云ふ言葉を使つた。すると側に居つた教師は突然教壇に飛び上つて來て、右手を振り上げて強く左掌を打ちながら、成る程さうだ——日本は餘儀なく戦つたんだ——と云つて兒童等に納得させて呉れた。すると兒童等も皆起ち上つて然り——と叫びながら余に歡迎の意を表した。間には英吉利——と怨嗟の聲を發して居るものも有つた、多分それは彼をやッ付け

ると云ふ意味を含んだものと思ふ。この教師にして此の児童あり、余は、彼等の國を思ふ至誠の溢れ熱血の迸りに對し、非常な感激に打たれたのである。其の時余は直ちに反省した。我が日本の教育が果して之れ丈の意氣を以て行はれてゐるであらうか？——と。

以上述ぶる所何等理論的の説明を爲した譯ではないが、大體愛國教育の如何なるものであるかは了承せられたであらうと思ふ。

二、教育の眞髓は愛國心の涵養に在り

愛國教育と云へば、何だが特殊な教育のやうに思はれるが、決してさうではない。余は愛國教育、即、國民教育と云つても聊か不當ではないと確信するものである。世界の國々に於てそれ／＼其の國民に對して教育を行ひ施して居るが、孰れたるを問はず皆それは其の國に對する祖國的教育を施して居るのである。自國人の爲めに外國の教育を施すと云ふやうな愚を爲す國は絶對に在り得ないことである。されば皆その國に於ける其の國の教育

愛國教育の
外の國民教育は
ない

なるものは結局祖國愛の精神とそれが實行に必要なる智識技能の陶冶訓練を爲す以外に一步も其の圏外に踏出すべきものではないのである。故に愛國教育は其の内包に於ても其の外延に於ても正に國民教育と一致すべきものである。固より人類を打つて一丸とした國際主義や人類同胞主義などの理想も決して無用ではないかも知れぬ。否高遠なる一つの理想としては大に必要である。然れども夫れは決して祖國愛の教育と矛盾もせず撞着もするものではない。現在の國家なるものが全然解消融合して、それが世界唯一の超國家なるものが生成せざる限り吾々は祖國的教育に止まらなければならぬ。獨逸の大史家ランゲ氏は將來何等の戦ひも何等の生存競争もなき無爲極樂の超國家の出現すると云ふことは誠に結構なことには相違ないが、恐らくそれは人類の美はしい夢であらうと云つて居るが、吾人は夢を對象として現實の教育に處することは出来ない。さればこそ未だ世界の何處にも純粹なる意味に於ける人類學校なるものは無い筈である。否！ 否！ 現在では孰れの國も國もが愛國教育に熱中してゐる時である。斯かる世界的情勢の中に在つて我が國の教育が果して其の大勢に後れない様にやつて居るか否か？ 大に猛省すべきであると思ふ。

近時我が國の小學校に於ける教授法は愈々微に入り細に進み、其の進歩の實に顯著なるものがあるが、其れにも拘らず其の實績の比較的之に伴はざるの感あるは頗る怪訝に堪へざる處である。今日の教授法が非常に巧みである割合に、それに依つて受けた兒童等の知識の實力の甚だしく薄弱であるのは如何に之を蔽はんとするも蔽ふ可からざる事實である。固より其の原因は決して一二にして足らぬであらう。併しながら其處に確かに一つの重大なる原因が有つて横つて居ると思ふ。それは何であるかと云ふに是れ迄

愛國的教授法……と、云ふことが考へられて居なかつたと云ふことである、それかと

云つて

非愛國的教授法……で有つたとも無論云へない、それならば從來の教授法は何であつた

かと云ふに、それは

中性的教授法……であつたと云ふことが出来る。中性的とは、愛國的でも無ければ非愛國的でもない。初めよりそんなことに深き關心を有せず唯「必要なる智識」を「必要なる智識」として授けて居ると云ふだけである。例へば日米の地理的關係や貿易關係などに就

き教授する場合——日本がこゝに在る、アメリカがこゝに在る。其の間に茫渺たる太平洋を以て隔て居る。或は又、日本からアメリカ合衆國へは生絲を輸出する其の金額は何程である。合衆國よりは石油機械類を輸入する其の金額は何程である。何程の輸入超過である——と云ふやうに教へられる。無論それは何の間違ではないが、此の如く唯單に「斯くある」として教へても何等兒童等の精神を作興するには足りない、そんな氣の抜けた様な智識は直ちに煙の散るが如く忘れられて了ふ。然るに……此の太平洋は日米間の軍事又は貿易の上に如何なる關係を有するや。太平洋の制海權が兩國の利害發展の上に如何なる關係を有するや。又、現在の貿易關係に於ては年々輸入超過であるが、之が何ヶ年間累積の結果は日本の國富に如何なる結果を來すか、如何にすれば此の趨勢を挽回することが出来るか——等、そこに愛國的な動機が動いて來ると忽ち其の教授に一種の活氣が帶び、其の與へられた智識に永久忘る可からざる生命が生じて來るのである。

斯く云ふと或は何れ、かも愛國心に結び付けんとして餘り牽強附會に陥りはせぬかと論難する人もあらん、然れども少しく冷靜に考ふる時は自ら首肯せらるゝものがあると思ふ。

何となれば

學問の爲めの學問ならばいざ知らず、苟も國民教育を目的とする教育教授に於ては、どうしても愛國心と云ふものが中心觀念となつて、それに凡らゆる智識技能が結び付けられ同時にそれに依つてドシ／＼と鞭撻されて行かなければならぬ、

斯の中心觀念が心裡に躍動して居つて初て教師の授業に生氣が漲り、兒童の學習に意氣が湧いて來るのである。

愛國心を中心とせざる教育教授は火藥のない彈丸の様なもので一個の玩具を弄ぶに異ならぬのである。

現今の教授は之に類したものが甚だ多い。それで眞劍味に乏しい、随つて教へられた智識も眞に兒童の脳髓に刻み付けられない。いつの間には解消して了ふ。殊に甚だしきは——試験まで記憶して置けばよい——と云つたやうな學習ぶりである。我が國の教育教授の現状が此の状態に在ることは頗る歎はしいことである。之は吾等の最も反省すべき點で斷然革新しなければならぬことである。

最早二十有餘年の過去のことである。余は勤勞教育に關するケルシエンシュタナー氏の壹部の新著を手に入れて斯說の研究を始め、爾來同氏に依つて發表せらるゝ著書は逐次之を精讀し氏に私淑すること益々深きを加ふるに至つたのであるが、斯かる間に余は勤勞教育の理論及び實際が決して單なる經濟的職業的見地のみ立脚した功利的學說でなく、ケ氏の心底には之に依つて

大に國民的愛國的教育を實施せんとする極めて

精神的な要素が其の主眼を爲して居る。……と云ふことを了知し、斯說に對する余の信仰の念は一層深刻と成つて來たのである。若し夫れ勤勞教育の學說を以て果して單なる功利的のものとなせば斯說は極めて卑近淺薄なもので有つて敢て敬服するに足るものではないのである。勿論國民教育の中には勤勞的陶冶に依つて經濟的實力を涵養し其の能率を高めんとすることも決して輕視すべきではない。然れども國民教育に於ては經濟的物資的要素よりも更に一層精神的要素の尊重すべきを忘れてはならぬ。教育の精髓はこれに在るのである。而かも其の尊むべき精神的要素とは愛國的精神の涵養陶冶に在るのである。ケル

シエンシュタイナー氏がこゝに着眼されたのは決して偶然でなく蓋し大に理由の存する
とである。

抑も獨逸國民が世界大戦後の經國の第一着として考へたのは、あの戦前に於ける獨逸の
隆々たりし國運と精銳なる武力とを以てして尙且つ戦ひに敗れたのは、果して其の原因は
何れに在つたかと云ふことを探究するに在つた。之を根本的に究めんとして獨逸一流の徹
底的調査が遂げられたのである、其の結果——勿論それには皇帝を始め政治、外交、軍部
等の當局の責任に歸すべきものも有つたであらうが、其の最大の原因に就いては國民の一
般が其の責任を負はなければならぬこと——に氣が付いたのである。それは何んであるか
と云ふに獨逸國民の精神的不統一と云ふことである。元來獨逸人は幾多の偉大性を有して
は居るが、其の反面には亦甚だしく個人的な孤立主義が潜在して居る。例へば彼の偉大な
文學者にして哲人であつたゲーテがサクセン・ワイマール公國の閣臣で有つた時、曾て
ナポレオンから此の公國が粉碎された、その時ゲーテとナポレオンとの歴史的會見が行は
れたが、二人の偉人は敵視することは措いて互に心を籠めて相稱讚し合つたのである。ナ

ポレオンは兎も角ゲーテには何ぞ敵愾心が起らなかつたか、又之より少し以前、當時の代
表的な哲學者ヘーゲルも矢張此の敵將ナポレオンと會見したが彼を「馬上に於ける世界の
天才」と嘆稱した。又、大哲カトンの如きにせよ、樂聖ベートーフェンにせよ、己れ獨り
の偉人たり天才たりで有つて、其の隣人とさへ交らず、殆ど孤獨の生活をつゞけた人でも
つた。ハインリッヒ・マンが獨逸人は「偉大なる國民に非らずして偉大なる個人である」と
云つた。斯かる國民性に切齒扼腕したのは獨りフィヒテのみではなかつた、臆がてビスマ
ルクの所謂鐵血政策と成りて聯邦を統一して獨逸帝國は建設され國民の一致結策も成りて
見事普佛戰爭には勝つた。併しながら此の大戦勝が獨逸國民の結束に再び弛みを來す最大
原因と成り、獨逸國民の理想と教育とをして悪しき方向への一轉機たらしめたのである。
即ち獨逸が普佛戰爭に大勝した結果は、産業は隆昌に赴き諸種の技術的發明と、それから
生み出されて來る黄金とは滿ち溢れた。而して自然科学の發達は宗教に對する信仰心を破
壊し、哲學はコントヤスペンサーやミルなどの實證主義の説に益々傾きて深奥なる理想主
義は漸次影をひそめ、文學や演劇も亦ゾラやトルストイなどの自然主義のものが風靡する

に至つた。斯くして産業界への未曾有の發展は、靈魂への空虚と黄金への追隨と、凡らゆるもの、機械化と、絶ゆる間なき社會の焦燥と上下に漲ぎる國民の浮華とを齊したのみである。それでも學校教育は十年乃至二十年は之等の不良な新興勢力に對して反抗を續けて來たが、最早自己傳統の理想主義、精神主義を持ち堪へることが出來なくなつて遂に唯物的な産業本位の時代の奴隸と成つて了つた。つまり國民的精神的陶冶が頼れて専ら功利主義の教育となつて了つたのである。而して唯、過剰なる智識と精巧なる技術とを得しめんことをのみ是れ努める様になつて、國民的精神的人格的陶冶の如きは殆ど等閑に附せられ、獨逸の諸學校に於ける兒童や學生等からは、クラス精神すら母校精神すら消え亡せて了つて、唯一向に卒業後の職業的階級的割り込みに向つて銘々勝手に離れ〜に突入する有様となつて了つた。斯くして獨逸は大に國は富んだが、それは獨逸の名譽であると同時に悲劇であつた、即ち一九一四年から一九一八年に至る世界大戰に於て、肉の力には見事に勝つたが、靈の結束には見事に敗れた、そこに獨逸教育の崩壊と失敗とが暴露されなのである。

ケルシエン
ンシユタ
イナ一氏
の愛國的
勤勞教育

爰に於て大戰後の獨逸教育改革の中心問題は、舊來の獨逸教育の傳統的精神に復へると同時に戦後の獨逸國家の疲弊を匡救すべき新生命を見出すと云ふことで有つた。仍ちそこに勤勞教育を提げて起つたのがケルシエンシユタイナー氏其の人であつた。氏は國民精神を勤勞に依つて兒童等の筋肉の中に打ち固めんとした。祖國愛の精神を體驗に依つて兒童等の腦髓に刻み付けんとした。氏の學校改革に對する旗上げに對しては初は激烈な反對も有つたが、愛國の至情に炎え且つ自信力に強き氏は之を以てするに非らざれば國家を既倒に救ふの途なしとして言論に、將又、實行に於て勤勞教育の主張と、普及とに渾身の力を濺ぎ遂に獨逸新憲法をして之を採擇せしむるに至つたのである。爾來全獨逸教育界の大勢趨向は一定して勤勞を根柢として國民精神は陶冶鍛鍊せられ愛國心の涵養は益々強調せらるゝに至つた。

曩にもちよつと云つたが、余が獨逸の諸學校を參觀した時、大抵短時間ながら兒童等に對して日本や東洋の情勢に關して話をして聽かせたのであるが、話が終るとどの學校でも余に對して感謝の意を表して呉れた。それが皆申し合せた如く同様に獨逸の國歌を合唱し

て聴かせられたのである。

児童等は一齋に起立する、いと嚴肅である、そして底力ある聲を以て合唱する、そこに獨逸魂が湧いてゐる。感潑が漲つてゐる。

そこで余も亦襟を正して「君が代」の國歌を奉唱した、すると彼等教師も児童も一同禮を正して聽いて呉れた。

斯く余が話をしたり國歌の交唱を遣つたりしたのは、一つは斯くして短い時間の中に彼等と親しみを結んで置いて最後に一つの文章を綴らしめやうと云ふ目的が潜んで居つたのである。それで余は最後に

「獨逸の將來に就いて」

と云ふ題を掲げて彼等の「綴り方」を要求した、すると殆ど拒絶された處はなく、孰れの學校でも快く綴つて呉れた、斯くして余は約百五十通の「綴り方」成績と其他圖畫手工の成績品とを合せて約七百點のものを持ち歸ることが出来、今は總て余の爲めには貴重な資料となつた。

今その「綴り方」の中から二三を取り出して爰に披露し且つそれに就いて彼等の心緒を觀察して見たいと思ふ。

(譯文) 獨逸の將來に就いて (伯林ウイツレーベン小學校第七學年)

獨逸の將來について吾々は何を希求するのであるか？
獨逸は以前は非常に強大な世界的の國家であつた。併ながらそれが今は他の國家から全く壓迫されて多くの地方を失つた。而して吾々は非境のどん底に沈淪し大なる失業の苦を嘗めて居る。吾々は今や他の國民と再び親善を結び、而して以前吾々の有せし植民地を再び取り返さんことを切望して居る、又各種工場が以前の盛況を呈せんことを之が獨逸少年の切望する所である。

譯文 日本と獨逸（ミュンヘン市ホーヘンツオルレン小學校尋常五年）

今日一人の紳士が吾等の所に來た。それは日本人であつた。彼れは「獨逸は決して滅びぬであらう却つて再び隆えるであらう」と語つた。日本は吾々獨逸と親善を結ぶであらう。自分はそれに同意して居る。

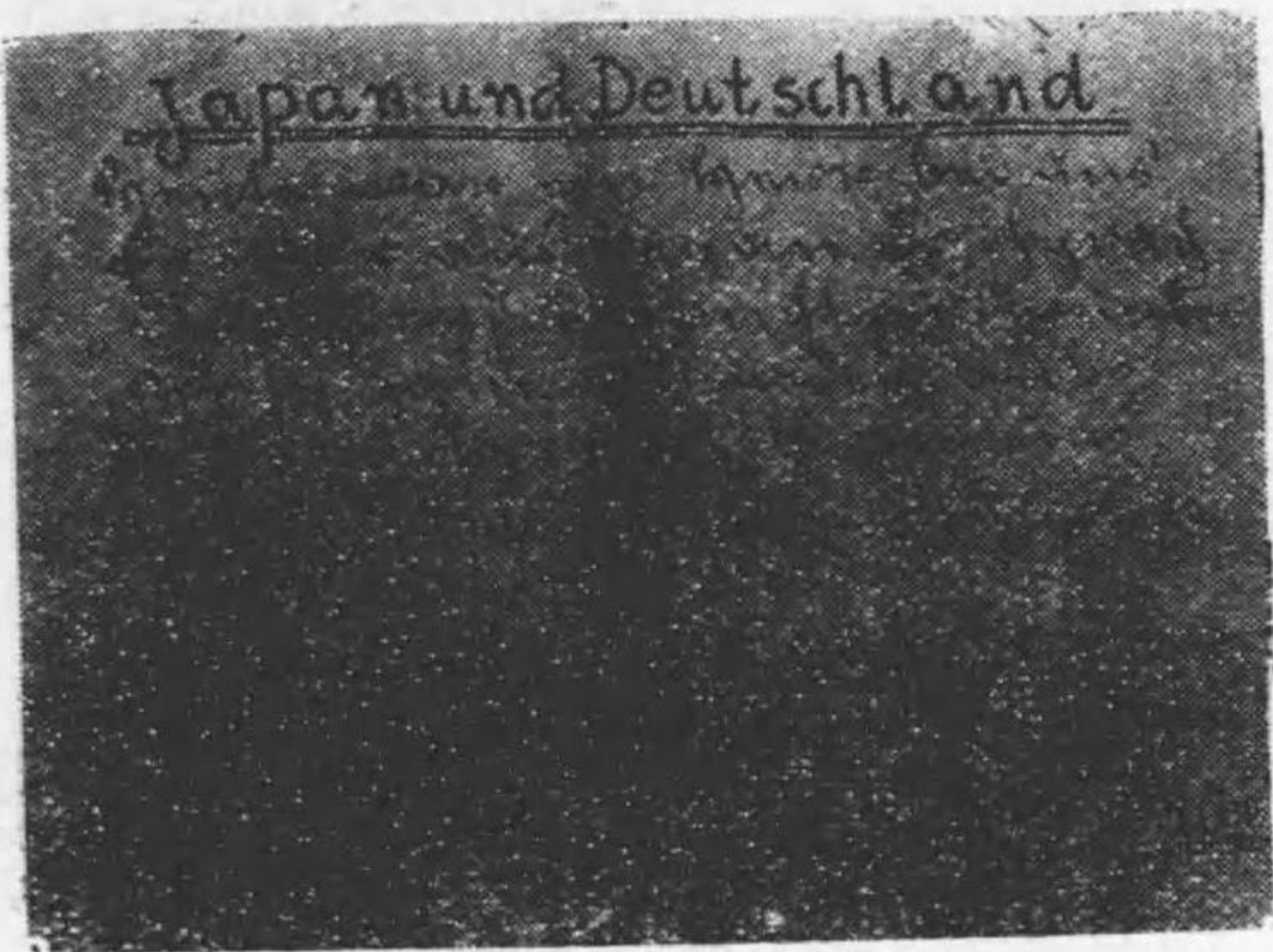
榮えよ獨逸！

病めよ佛蘭西！

共に榮えよ日本と獨逸！

（譯文） 日本と獨逸（ミュンヘン市ホーヘンツオルレン小學校尋常五年）

十月一日一人の日本の紳士が吾々の教室に來た。而して日本のことに就き一二の話をした。彼はまた日本は日ならずして支那と戦争をするであらうと云ふ報道をもたらしした。



また彼れは日本と獨逸とは親密であると語つた。それ故もしも獨逸が戦争をする様なことがあつたら、その時は日本は獨逸を再び隆盛に持ち來たらす爲に獨逸に味方して呉れるであらう。

これ等の文章は總て豫め照會して置いて綴らしめたのではない。大抵、余が二三分間も色々の話をして聽かせ、その残りの時間、長くて十五分間、短くて七八分の極めて短い突嗟の間に綴らしめたのである。即ち彼等兒童の極めて卒直な極めて純眞な發表である。而かも其の内容を味はつて見ると如何に彼等が愛國の至情に燃えて居るかが窺はれるのである。

其後大總統ヒットラーが國粹獨逸民族主義を擡げて起ち、ナチス獨逸國を建設するや、ヒットラーは先づ其の劈頭に於て「獨逸の將來は精神に在り」と大聲疾呼した。曾てカイ

大總統ヒットラーの教育精神

ゼルは「獨逸の將來は海に在り」と云ひ大に海軍を擴張して英國と覇を争ひ遂に一大蹉跌を來したことは獨逸國民の痛恨止む能はざる所であつた。ヒットラーが獨逸再興の眞根柢を國民精神の作興に置いて「獨逸魂」の涵養に全身全靈を打込んだのは流石に國家百年の大計の眞髓を擲んだものと云つてよいと思ふ。最近ヒットラーは勤勞教育を更に延長擴大して青年に對する「勤勞奉仕」の制度を實施して益々心身の鍊磨を之れ努めて居る。斯くして大敗戦後隱忍に隱忍を重ねて養ひ來つた獨逸國民の鬱勃たる底力は最早地中のものに非ずして遂に風雲に龍頭を擡げ、一滴の血をも流さず忽にして埃太利全土を併せ忽ちにしてチエツコの一部を割取し、今や獨逸は再生復興の途上に驀進しつゝあるのである。

以上は専ら獨逸の愛國教育の狀況につき叙述したのであるが、獨逸が世界大戰の敗戦國として國家再興の爲めに、國民教育の上に一大覺醒と革新とを企圖したのは當然のこと、云はなければならぬが、爾かも亦之に對して英、佛、伊等の諸國も決して一日の偷安を貪つて居るものではない。何れ劣らず愛國教育に意を用ふること淺からぬものがある。

由來英國は教育に關しては極めて自由な制度を採つて居つたのである。随つて又極めて

愛國教育
には何れ
劣らぬ英
佛伊

英國

不統一を免れなかつた。然るに這般の世界大戰は英國教育の上に多大の覺醒を促し、既に戦時中に於て所謂フイツシャー案の採用となりて國民教育の制度の上に一大統一が圖られ又、教育の内容についても大戰の經驗と刺撃とに依つて改革せられ、就中德育の上に於て戦争より受けた教訓は決して少くなかつた、それに鑑みて一九二一年文部省より公布された教員心得に依ると、兒童訓練の要目として次の様なことが示されてゐる。

相互の禮讓喜んで義務に服すること、人を尊敬すること、動物に親切なること、正義實
行の勇氣、職務に忠實なるべきこと、愛國心、公共の精神、結局は善良なる公民を養成
すべきものなること。……等色々の方面のことが網羅されて居る中に、愛國心、公共心
の養成が要目の前後から推して中心を爲して居ることが知らるゝのである、又戦後公民教
育に關する特別調査委員が設けられ、一九二〇年の此の委員からの報告書が公にされて居
る。それを見ると、英國の皇室を中心として國民的統一の必要なることが述べられてある
が、他方には、戦争前の獨逸の愛國心は攻撃的である不道德である。眞の愛國心は文化人
道への自然の情でなければならぬと説きながら、而かも眞の愛國心は家族より都市へ、都

市より國家へ、國家より人道への義務の昂進である、場合によつては家族や都市の利害は國家の爲めに犠牲にすべきであると説明してある。是等に依つて、兎に角英國の愛國教育に對する方針の一斑が推知されるのである。余は英國にては小學校はセントラル・スクール其他二三、中學校ではイートン・カレッジ、大學校ではオックスフォード等代表的なもの、みしが觀なかつたが、足一たび英國の學校に踏み入ると、何れの學校たるを問はず、極めて規律整然たるもので、兒童等の一舉一動も亦規則正しく、教室の出入、教師に對する敬禮等一々級長の號令の下に軍隊式の感がある、又、自由の時間の間に於ても兒童等の教師に對する態度なども、六尺距つて師の影を踏まずと云つた様な倂が窺はれる。高等の學校に於ても學生は師命に對しては絶對服従である。それが眞實に實行されて居る。而して教育の目的は全然紳士養成、人格教育、精神教育に置かれ、學校が一團と成り、生徒も教師も一意敬虔の念に浸つて精神修養に向つて精進して居る。英國が今日迄の大を成し來つた所以は全く此に在つたろうと思はれる。唯英國は既に己に功成り名を遂げた國で有つて、國民一般に昔日の如き英氣潑瀾の氣象には乏しく、其の國運の前途に就きては逆睹し難い

ものが有るのであるが、それでも今尙一般國民には自尊心が非常に強く、愛國心も決して衰へて居るとは思はれない。セントラル・スクールに行くと、先づ最初に校長から其校出身の「大戦戦死者の姓名を奇麗に彫り込んだ大理石のメモリアムの前に案内して犠牲者を出した人數やら武勇で有つたことなどの話をして聽かせられた。それからイートン中學校を參觀した時は案内者としては上級生が二人出て呉れた、之は特待生で特別な服装をして居つた。先づ第一に禮拜堂に案内された。堂は古色蒼然たる建物で、堂内の正面には高くエス・クリストの神靈が祀られ、薄暗い中に一種の靈光が靜かに充ちて何となく、落付いた氣分と成り敬虔の情が自ら湧いて來る。方形に階段に成つた座席が設けられ、其の座席の机には一人／＼毎にちゃんと聖書が置いてある。そして朝の禮拜夕べの禮拜が有り、聖書の朗誦が有り、又聖話があるやうに成つて居る。所が案内をしてくれた學生は余を恭しく、堂の左側に一つの机が置いてある、それに導いた、其の机には非常に奇麗に装釘した大型のブックが一冊丁寧に置かれて有つた。余は矢張り何か由緒のある聖書であらうと思つてそれを見てゐたのであるが、學生が靜かに其のブックを開けて見せた。するとそれ

にはイートン中學出身者にして世界大戰に参加した者の姓名が記されてある。而して戦死者の姓名は特に金文字で書して一見明瞭する様にしてある。

余は直ちに思ひ出した。曾てウェーリントンが此の校を訪ねて

此處だ！ 此處だ！ Here is battle of waterloo.

ウオートルローの戦は此處で行はれたんだ——と言つたことを

英吉利魂は斯うして養はれてゐる。英國では一朝事ある時は貴族の若い人等が眞先に銃劍を取つて出征するのである。これ等の點我が國と稍趣を異にしてゐるやうである。餘程反省すべきことと思ふ。それから運動場、寄宿舎、各教室等を隈なく參觀したのであるが曾て聞き及んで居つた、本校出身者の氏名が卒業の記念にと至る所の柱や木壁に最早一寸の餘地も無き迄に刻み付けられてある。其の中には。カンニングとかグラットストーンとかグレーとかシエレーとかウエーリングトンとかの名前が見えて居る。これ等も少からず後進の子弟の志氣を勵ますに違ひない。又、日本の教育勅語とその譯文、乃木將軍の寫眞が生徒圖書館に掲げて有つたが、そればかりでなく體操場の一部に日本の擊劍、柔道の道

具が日本語そのまゝの名稱を附して整頓されてあるのも見た、教師は英人とのことであるが、日本の武士道を學ばんとする氣配も見えてゐる。之等に依つても英國の教育の一端が窺はれる。

佛蘭西

それから佛蘭西であるが、佛蘭西の教育が非常に劃一主義に行はれて居ると云ふことは兼て聞き知つて居た所であつたが、成る程劃一な現象は、佛國全般の教育制度から一學校の教育教授の實際に至る迄、大小何れのことにも顯れて居る。併し教室に這入つて見ると、之は佛蘭西人の天性快濶な氣風からか知れないが、何となく輝がやかしい戦勝國としての光榮が窺はれる。それかとして輕佻浮薄な放縱な風は一步も許されてゐない。教室の出入から室内の動作等頗る規律的である。こゝにも獨、英、などと同じく校庭などに校友の戦死者を合祀したメモリアムが有つて、その前には新らしい花輪が手向けられてある。殊に佛蘭西は獨逸や英國と數世紀の間互に討ちつ討たれつ長い間鎗を削つて來た國だけ有つて、一層敵愾心や愛國心に尖つてゐる。それは唯この一つのことでも知られる。余は小學校で兒童が、手にしてゐる一冊の國史教科書を見付けた、其の教科書の表紙に圖案が施してあ

る。處がその圖案には穀物とか葡萄とか林檎とか其の他花や野菜などが取扱つてある。そして其の輪廓の中に文句が書き込まれてゐる。最初は何氣なく見たのであるが、この圖案は植物の教科書ならば兎も角、國史の教科書としてはちよつと不似合らしく思はれた。そこで後で能く能く調べて見ると斯んなことが書かれてある。

子供等よ！

汝等はこの書物の表紙に美しきフランスの果物や花やを見るらん。

又此の書物にてフランスの光榮ある歴史を學ぶならん。

汝等は祖國を愛せざる可からず。

その自然が祖國を豊かに美はしく、

歴史が祖國を偉大ならしめたものなるが故に。

重きを置いて書かれたのに開卷第一にと云ふことがあるが、開卷どころではない、開く暇も措かせず、劈頭の表紙そのものから祖國愛の文字が掲げられてある。一事は萬事其の他は推して知るべきであるが、遮莫、學生の如きも陸海士官學校に入學することが、最高

名譽であるとされてゐる。獨り本人の名譽だけでなく、一家一村の榮譽として祝福されるこのことである。

それから伊太利であるが、伊太利は現今では寧ろファツシヨの教育……ムツソリーニの教育と云つた方が適當であらう。爾かも其のファツシヨ運動そのものが愛國運動である。殊に其の首班たるムツソリーニは曾て小學校に教鞭を執つてゐたこともある。其の經驗に加ふるに絶大の權力を以てして、思ふ存分に教育の改革を施した、改革と云ふことは理想や言論としては兎も角、其の實は、舊來の因襲や情力の爲めに容易に行はれない。行はれても極めて徐々に行はれるものであるが、ファツシヨの運動、ムツソリーニの治下に於ては決して然らず、實に奔流直下の瀑布の如き勢を以て實現されて居る、僅々十數年間に殆ど腐爛の状態に在つた伊太利國內の秩序をあれ程迄に回復し、同時に内治外交の諸般に互つて凡ゆる施設をどしどし遣り徹して居るには眞に一驚を喫せざるを得ないのである。教育以外のことは爰に詳説するの遑を有しないのであるが、教育上に於ては從來の詰め込み主義、暗記主義の教育を絶対に排斥し、眞の實際的人格陶冶主義の教育が徹底的に施され

てゐる。殊に勤勞教育が最も能く行はれてゐるのである。即ちムツソリーニ氏は非常に強い力を以て勤勞主義の教育の實施を企て、農村の小學校には農村的な勤勞施設、例へば耕作地及び其の用具の設備は勿論間には牛馬を使用して居る學校さへあつた。又、工業都市の小學校にては手工、工業に關する設備が充分に加へられてゐる。是等は最近に於ける獨逸の勤勞教育の影響を受けたのであるか、將又ムツソリーニ氏の自己發案に出たのであるか能く確かめ得なかつたのであるが、元來今の伊太利人は云ふ迄もなく羅馬人の直系であつて、彼等は決して瞑想空理の民族ではなかつた、どこ迄も實行的現實的な民族であることは歴史の明示する所である。余は下位氏の盡力に依り日本の青年I君の案内と通譯とに依つてローマ市内に在る一小學校の所謂裸學校を參觀した、裸學校とは何も彼國で附けられて居る名前ではない。普通には東宮殿下學校と云つてゐるとのことであるが、裸學校と云つた譯は、同校は先天的又は後天的に病弱な兒童を收容し、その健康増進心身鍛錬の方法として兒童等をして裸體で授業を受けしめ、又作業をやらして居るからである。余が參觀した時は十一月の下旬で晩秋の膚寒い時で有つたが、それでも兒童等は非常に薄い一

枚のシャツ様の上衣しか着けて居なかつた。朝八時頃學校に行つて観ると、尋常一年若くば二年位とも思ほしき小さい可憐な兒童等が箒で庭の掃除をやつて居る。塵を集めたのを取つて捨てに行く者もあつた。間もなく授業が始まり各學年を參觀して廻つた。そして最後に尋常五年の教室に入つた、教室と云つても此の學校では學年毎に獨立の一棟建の校舎と成つて居る、暫く授業を見た後、二三分の時間を割いて貰つて余は兒童等に色々の話を試みた話は例の片言交りの獨逸語で話すと、案内をして呉れた女の事務員らしい人が、伊太利語で適當に通譯して呉れた。余はその後で兒童等に感想文を綴らしたが立つて待つてゐる間に、左の文を手に入れることが出來た。

A. 兒童の文

今朝參觀を受けた即ち二人の日本人が入つて來られた、而して吾等に對して非常に親密で且つ親切であつた。而して吾等にその祖國の多くのことに就いて話された。能く伊太利語をお話しにはならなかつたとは云へ吾等は能く理解することが出來た。日本は伊太利と能く似て居ると云はれた。而して日本の若い人等は伊太利人と同様に祖國に對する

愛と信念とに充ち満ちて居るとのことである。彼等も亦吾等と同様により善き統一と革新とを得んが爲めに闘つたので有つた。

B 兒童の文

十一月の今日は世界大戰の吾等の勝利の記念日である。此の世界大戰に於て吾々はトルント及びトリエストから解放された。自分は此の日吾等の國旗を眺めると其の旗が唯の布の一片でないことを思ふ。それは吾等の祖國を表はすものである。僕には吾等の三色の國旗が好きである。而して伊太利人に取つては、非常に破れ非常に榮えに充ちたる所の其の旗が如何に尊く感ぜらるゝことよ、國旗の過ぎるのを見れば吾々は尊敬のしるしとして帽子を取る。

以上の文章を読みながら仔細に觀察して見ると、彼等の教育が如何に形式的でなく實質的に行はれてゐるか推知される、又僅か尋常五年位の兒童にして如何に國家意識の明確にして且つ祖國愛に充ちて居るかが窺ひ知らるゝのである。

それから余は擔任の教師に日本への土産に兒童の描ける圖畫の成績品を數枚恵まれんこ

とを乞ふた。すると其の教師は教室の一隅に裝飾として置かれて有つた挿花のしてある瓶を持ち來つて、この中の孰れにても一枝を選ばれよ、五六分間の内に寫生さして進呈せんと云つた。そこで余は菊の花の一枝を抜き取つた。教師は直ちにそれを一兒童に命じたが早速寫生が出来上つた。之等も簡單なことであるが彼國の教育の一端が窺はれる。

又、ムツソリニーは上は大學より下は小學校に至る迄、總て

伊太利國內に在る學校は

伊太利國の學校である

との觀念を極めて明確にし、故に苟も伊太利國に反する教育思想を有するものは絶対に伊太利から排斥すべきものであるとの方針を極めて明確に掲げ、嚴重に取締つて居る。文部省の名稱も舊來はインステイチオーネ・プブリカと云つて居つたのをエデユカチオーネナチヨナーレと改め、プブリカ(公衆又は社會)に代るにナチヨナーレ(國民)を以てしたのは教育はどこ迄も國民教育以外にないとの考へを明かにしたものである。斯くして強い國家主義の觀念の下に、自國の歴史を重んじ、愛郷の念を堅くし、之れが爲めには外國語

を斥けて寧ろ方言を尊重し、正しい方言に依つて教育を施すことを奨め、方言に依る綴り方、方言劇等迄やらせて國民性や地方性を養はんとして居る、殊に伊太利人には古來英雄崇拜の念が強く、各學校の名稱にはシーザーとかアントニオとか古英雄の名が冠せられてゐるのが多い。

ムツソリーニは學校教育を根本的に徹底的に革新したのみならず、社會的施設としても勞働華族の制度を設けて勞働に依つて國家に貢獻し、又勞働の模範者たるものに華族の榮典を授けて以て之を表彰し、又一「勞働の後」なる組織を設けて勞働者の娛樂、修養、救護の機關として極めて宏大な充實したる施設が全國至る所に普及されて居る。之を要するにムツソリーニは一世の英傑として「愛國心に依つて結び付けられたる一大勤勞國家」を建設せんとするの志あるものゝ如く窺はるゝのである。

以上は獨逸を主とし、次いで英・佛・伊等の諸國の愛國教育の實狀及び其の實績の一端を縷述したのであるが、醜つて之を我が國の教育の現狀に就いて考へた時、再思三考、反省又反省せずして宜いであらうか。併しながら熱誠ある反省と決然たる革新とは動もすれば

若き教師
の責務

因襲に捉はれ易き老成教師には望み難い。どうしても之は「若き教師」の奮起に俟たなければならぬ。又、それが「若き教師」の責務であると思ふ。

第七 兒童愛の教育と献身的努力

一、愛は教師の最大資格

吾々は國民教育と云ふ大きな事業に向つて工作しつゝあるのがあるが、何と云つても其の事業の目前の對象は兒童である。即ち吾々は兒童と云ふものを通して國民教育の目的を達し、國家の理想を實現しようとするものである。そこで事業に於ける直接の關係は、教師と兒童其のものとの關係に在るのである。斯の關係から教師の兒童に對し就中最も緊要にして且つ中心を爲す徳性は「兒童愛」の精神である。之れ無くては如何に學問があつても品行が方正であつても教師たる資格はないと云つてもよい。

「愛」は教師の心の中に藏つてゐる眞珠である。併し同じ眞珠でも大小がある、

愛は教師
の心の真
珠に在る

大きいほど貴い。大きくても疵やデコボコが有つたり形の不整なのは餘り貴くない。

圓滿玲瓏でなくてはならぬ、偏愛や依怙があつてはならぬ。

斯の中心に潜める眞珠から色々の場合に美はしい光が放たれる、それが眞の教育となるのである。即ち凡ての教授や訓練はそれが「愛」より放出したものと云ふ、教育と成るのである。愛に結合せざる教授訓練は單なる傳達に過ぎない。それで「愛」が中心を爲してさへ居れば其の發動の方法は必ずしも一様でなくてもよい。恰も眞珠の光が側面轉換に依つて千變萬化する如く、場合に依つては、非常に嚴重に秋霜烈日の如きものが有つても宜からう。愛とは兒童の我儘を容赦することではない。併し春日の靄々たる暖き光に浴せしむるのが常態でなければならぬ。何となれば兒童期は恰も人生の春の季節に相當してゐるからである。兒童等は教師の溫容春の如き暖味に浴して初てすん／＼伸んで行くのである。蔭や日向が有つてはならぬ。併し餘程注意をせぬと善い兒は可愛い、悪い兒は可愛くない、甚だしきは良家の子女は愛して低級家の子女は疎んずる様になる、之は人情の自然がさうするのである。餘程注意せぬと不知不識の間に陥つてゐることがあるのである。

悪るい兒童を憎むも實は之を矯め直すためであると云へるかも知れぬ。が、之を矯めずも懲らすも眞の愛情より溢れ出で迸り出たもので無ければいけない。憎悪から出た懲戒は單なる威嚇に過ぎず兒童を唯萎縮せしむるのみで何等改善の效はない。然るに悪い兒童を見ても憎む所ではない、丸で見えて見えぬふりで放任する人がある、之は又全然無責任で最早教師たる資格ないと云つてもよい、況んや八釜敷云つて父兄などから憎まれるのは損である云ふ様な自己の利害から其の放任主義が割り出されたならば、それこそ全く言語道斷で寧ろそれは教育の賊と云ふべきである。

そこで兒童に對する眞の愛と云ふものは本來如何なるものであるかと云ふことに議論の鋒先は向けらる譯であるが、自分はそれに對する理論を有しない。

大愛は決して理窟ではない

理窟の附いた愛はまだ小さい、亡び易い

兒童を見れば兎に角可愛い

ほゝ笑ましい、手を引きたい

善く出来たぞ、うれしい

あら悪戯するな、怪我するぞ

こちらへ来い、こちらへ来い！

もうそれ丈で宜しい、理窟も何も入らぬ、理窟から割り出して児童が愛せるものではない『噫！ 松本訓導』あれがあゝの瞬間に理窟から割り出して、あゝの悲愴な決心が出来たであらうか、故松本訓導は著者の若き時代の道兄にして且つ畏友であつた、無論松本訓導もまだ若い時であつた。

噫！
松本訓導

噫！ 松本訓導

君、名は虎雄、當時齡は三十一歳

秋雨蕭々降づつゝいた後

今日はめづらしく天氣であつた

永田町小學校に於て早くから企てゝあつた

遠足會は久しぶりの好晴に恵まれて

舉行された、全児童は六百餘名

教師も児童も喜々として府下井の頭公園に赴いた

やがて其處の辨天祠畔に解散して休憩は許るされた

児童等は群雀の野に放たれた如く

三々五々あちらに跳び此方に躍ねて遊ぶ

子供心の、制限された範圍も忘れて雜木林の中にも駆け込んだ。

近くに流れる玉川上水、

流れの中は狭いが深さは丈餘

濁流、奔激、又渦巻く淵もある

俗に人喰川と呼ばれた魔の流れ

それと知るや、知なすや

先を争つて走つた三年生の一と組

林を駆けぬけ丘に上らんとしたが

川岸の葦薄の茂みに飛び込んだ

足下に音を立て、流る、濁流を見て

アツと叫んで踏み留まらんとしたが、此時遅し

走つてゐた情勢で遽かに止まれぬ

筋しぢらみとなつて止むるには餘りに葦弱き薄すくであつた。

先頭の児童永田俊雄がズル／＼と

魔の流れに迂り落ちて了つた

後から監視について居つた松本訓導

それと見るや、狂走して岸に上つたが

もう早や永田の姿は見えぬ

『永田……』『俊雄君……』と二聲三聲は呼んで見たが應へがない。

アツと思つた瞬間、間髪を容れず、

松本訓導はザンブとばかり濁流の中に飛び込み

救ひの手を延ばさんとしたが、それは駄目であつた。

而かも奇しきものは人の運命なる哉

児童永田俊雄は他の人等に救はれて地上の人となつたが

松本訓導の英靈は永へに黄泉の客となつた。

時は大正八年十二月二十日であつた。

噫！松本訓導。不思議と云はんか偶然と云はんか、著者が筆を採つて、噫！松本訓導と稿を草した其の日は恰も滿二十年の命日、法事しめやかに執り行はれし其の日であつたことを後に知ることを得た。

更に亦思ひ浮べる昭和九年九月大阪府を襲つた大風水害

恐ろしい嵐、未だ曾て物の話にも聞かぬ大嵐

この日こそは吾等人類が折角築き上げた凡ゆる文化施設を悉く風神の前に委ねて、たゞその爲すが儘に任せられた呪はれの日であつた。人間の力の脆弱さが餘りにも如實に曝け出された惧ろしい日であつた。

この殺風虐雨の中に児童愛の犠牲となつた壯烈悲哀殉難の教師十八名。

其の名は松田武行訓導、伊東綾子訓導、栗山優訓導、高塚武訓導、里見豊昌訓導、横山仁和子訓導、吉岡藤子訓導、飯野重義訓導、村上ノブエ訓導、近藤龍子訓導、細川大造訓導、梅田キク訓導、辻野利三郎訓導、芦田政治訓導、新葉庄司訓導、稻久保正夫校長、森義住校長、盛山晴子教諭の諸氏。

児童は教師を信じて其の許を離れず

教師は固く護つてこれを庇ふ

廢墟に埋れたこの相抱く師弟の愛結

教育の眞髓は枯渴せるにあらず今尙炳乎輝くを觀る

教權地を拂ふにあらず、生々たる此の教育精神

平時には潜みて見えぬ至純の愛

常には蔽はれて知れぬ献身の努力

歳寒くして松柏の後に凋むを知る、

天寒すさましくして初て隠れたる英雄を見る

在天十八の英靈、安らかに眠れと祈る。

以上松本訓導乃至大阪大暴風犠牲教師のこと、皆非常の場合に於ける非常愛のことに屬す、然りと雖非常の場合に於ける非常の愛は、平時の大愛の精神が偶々非常の機會に發露したに外ならぬ、平素に有るべきもの無くして奚んぞ能く發揮するを得ん、宜なる哉時の帝國教育會長澤柳政太郎博士は、松本訓導の人となりについて

「君の彼の刹那に於ける児童に對する純一無雜なる愛は、彼の時、突然として君の胸中に湧いて出たものではない。君の平素教壇に立つ時、否、教育者として世に處する間、常に君の胸中に鬱勃たる親の、其のまな子に對すると同様の愛に、加ふるに「教へ親」の「教へ子」に對する貴い愛情の現はれが彼の時閃いたものである。君は眞の教育者であつた。君が現に家を成すべき齡に達して、未だ娶らなかつたのは、嘗に讀書や思索に熱心して他を顧みるに遑なかつたばかりでなく、多くの教へ子を我が子の如く思ひ爲して、少しも淋しさを覺えなかつたに由るであらう。君は實に「眞の教育者であつた」

と云はれて居る。松本君は教職の餘暇を以て、修養園より發刊の雜誌……同胞相愛、流汗鍛練——の二大主義を標榜する『向上』の編輯に當つて居つた、世には口を以て愛を説き筆を以て愛を書く人は多いが、松本君の如きは眞に身を以て愛を行ひ、血を以て愛を書いた人である。

又、前記殉難教師十八氏の其の人と爲りや在職中の傳記の一斑を讀んで見ても、或は文學に或は音楽美術に、或はスポーツ等にそれ／＼趣味を異にし特長を異にしてゐるとは云へ、皆の人に共通して居る點は孰れも孰れもが平素『兒童愛』の精神の強い人ばかりであつたことである。著者は「大風水害殉職美談」の書を通讀して是等十八氏が悲愴の最後を遂げられたのが決して偶然でないことを深く／＼感じた。

余は特に今の若き教師たちに進言する『小學校を愛の行者の道場』として献身の努力を拂はれんことを。余はこゝにも手を引いて連れて來たいのはベスタロツチー先生である。先生は極めて口不調法な人で言語が甚だ不明瞭であつた。黑板に描く繪の如きは殊に拙なかつた。庶物教授を行ふ時、動植物などに關して分類學上の智識などにも甚だ乏しかつた。

と云ふことである。要するに實際の教授法などは總ての點に於て甚だ不得意で有つた。それにも抱らず、『教えの神』と仰がれ、大教育家の列傳中に於て吾々の景仰の最高峰となつてゐるのは何故であるか、それは先生の凡てが兒童に對する至純の愛そのものが有つたからである。

二、兒童名簿は教師一代の寶物

何程兒童を愛しても、それが直接な小學校在學中だけに止まつてやむならば、まだ／＼其の愛は小さい、淺い、決して大愛とは云へない。眞の大愛があるならば其の兒童が小學校を出た後、中學、高等、大學を卒業する迄も、將又、大臣に成り、大實業家に成つても否、不幸な淪落者と成りルンペンと成つて居つても、昔の愛は少しも變らず掛けらるべきものである。斯の愛のつながりを以て兒童の將來の成人、出世の狀態を自分の心の窓から終始見て行くこと、之れ程教師として楽しみなことはない。今は某代議士——やあ先生お久しぶりです、御達者で、私は小學校時代の先生の教へ子です、とてもお覚えは有ります

まい。ウンニヤ覺えちよるとも君が候補者に立つて居ることを新聞で見て窃かに君の當選を祈つて居つたよ。——今は中央政界の一方の大立物——先生何十年ぶりでせうか、チョツト夕飯を某亭で差上げませう。——そりや有難う僕はもう追ッ付君が大臣になりさうなものだとそればかり待つて居る！——今は今處とかに住居して居ると傳へ聞き尋ねく／＼やつと探し當て『ご免下さい私は白土です』、オ、先生でしたか何んとお久しいことでせうかもう三十年になりますもの、それは其の筈、長男はもう高商に入つて居ります、長女は高女を卒業して今こゝに居りますもの……して先生どうして三十年前の私を思ひ出して訪ねて下さいましたでせうか——さう云はれると私はあの時二十七八歳の女學校の先生だつた。今はもう早六十を一つ超えたよ、私はね、あんたは善くなれば善い方に進むが、悪くなればどんな悪い女に成るかと絶えず／＼心配して居つたよ、それを一つ見届けたいと思つて漸く探し出したのさ、まあ斯んなに立派な人になつて私も安心だ……流石に諸共涙ポロ／＼——先生と聲を掛けらる亦樂しからずや、君えらく成つたな——と亦喜ばしからずや。

唯、先生と呼ばれて、さて之は誰で有つたかと姓名をどうしても思ひ出さぬ。之れ位苦しいことはない。實にそんなことでは最早疾ツク愛の綱は切れて了つて居る。そこで児童名簿が必要である。此處に云ふ「児童名簿」とは何も公式な視學官や學務官吏の前に提出して檢閲を受けるやうな帳簿を云ふのではない。形式も何も入らない、ほんの愛の心の中に折り込んだ児童名簿を云ふのである。若い教師の時より苟も自分が手しほに掛けた児童は其の名は勿論、生年月から生れ郷、個性特長、其他心覺えに必要なことを何かと記入して置く。擔任學級が變つても、他校に轉任しても先きから先へと自分の「教へ子」の名を書き加へ、付け添へて行く。それが何十年かの後に一とかどの大きな帳簿と成る、其の中かいろいろ／＼な人物が選り出される、何んとそれは面白い、ゆかしい帳簿ではあるまいか。教師としてそれに優る一代の寶物が他に有るであらうか、如斯一代の寶物を手に入れんには若き教師の時代よりそれ丈の用意が無ければならぬ。後日老功の教師となつて初て氣付き、こんな帳簿を作つてゐたらと思つてももう駄目だ。著者の老婆心から敢て若き教師に勸むる所以である。

第八 男教員と女教員

一、男教員と女教員との各の教育的地位

アメリカの某氏が斯んなことを云つて居る記事を見た。——合衆國の人間は之を三種類に分つことが出来る。それは「男」と「女」と「女教員」とである——と、そして其の説明に曰く、男と女とに大別することは何も説明せずとも分り切つたことだが、「女教員」と云ふ一種類を立てたことは、合衆國では小學校の教師は大抵女教員であつて一つの階級層を爲して居る。然るに其の女教員なるものは「男」でもない「女」でもない一種の人間である……と、之は一見奇矯な言のやうでもあり、又何だか諧謔な言のやうでもあるが、よく考へて見ると相當に意味のこもつた言であると思ふ。著者はアメリカの實情には能く通じないが、彼等の動作から性格等を想像して見ると一種の女教員氣質と云ふものがあつて、それは甚だしく「女らしくない」それかとして固より男でもない變な一種の人間が形

アメリカの女教員

成されてゐるやうに思はれる、而して此の傾向は唯獨り合衆國のみに限らず、他の一般にもさう云ふ傾向が少しづつある様に思はれる。之は教育上の見地から非常に反省しなければならぬことと思ふ。

男教員は男教員らしく、女教員は女教員らしく各其の心理的特性を發揮し、且つ其の特質ある感化を與へて初て完全な教育は行はるゝのである。中等程度以上の學校に於ては最早其の必要はないが、國民教育たる小學校に於ては兩性の感化は本質的に缺く可からざるものであつて、其の一方を缺く時は當然教育上に於ける一つの缺陷が作らるゝ。換言すれば完全教育は兩性感化に依つて得らるゝことを知らなければならぬ。故に例へばこゝに男兒のみを收容した小學校があるとする。さうすると之には女教員は無くてもよい様に考へられる。反對に女兒のみの小學校では女教員のみでよい様に考へられる。若しさう云ふ考への下に其の學校が經營されるならば、夫れは教育の本質を根本的に理解し居らざるものと云はなければならぬ。この點に於て男教員たるもの、女教員たるものは、各其の教育上の地位を自覺して其の任務に當たらなければならぬ。決して其の一を以て他を廢す

完全教育と兩性感化

可からず、他の一を以て之を廢す可からざるものである。而して兩者各其の地位に於て又決して輕重す可からざるものである。然るに通觀すると我が國に於ては男教員に比して女教員の地位が甚だ低い、甚だ輕視されて居る。之は非常に遺憾なことであると思ふ。之は男尊女卑の因襲的習慣にも起因する所があるかも知れないが、法制的には決して輕重の差別はない筈である。それにも拘らず今尙女校長も殆ど見當らず女視學も極めて寥々たるものである。之は女教師の爲に一掬の涙濺がざるを得ない。どうしても今少し女教員の地位が高められなければならぬ。併し之が爲めには女教員その人等も今少し自己の地位を自覺し自ら大に奮勵する所がなければならぬと思ふ。

然るに日本の女教師は何と云つても餘りに消極的である。貞淑と云ふことは大和女の誇りとする美點ではあるが、貞淑の徳を全ふせんが爲めには必ず何もかも引込主義でなければならぬと云ふ理由はない。今少し積極的に「云ふことは云ひ爲すことは爲す」と云ふ氣力が欲しい。

第二には卒直に云ふと女教師は學問識見が低い、今少し、否、もちつとく學力を高め

識見を廣めなければならぬ。若い男教師には向上心に炎え立つた人が多く、學校卒業後にも相當に勉強をする人が多いが、女教師は學校を卒業した當時が一番學力の高い時で、卒業するや否や冬の季節に向つた寒暖計の様にすん／＼下つて了ふ傾きがある。之は女教師の爲めに甚だ慨はしいことである。徒に歐米を褒め、又感心する譯ではないが、歐米の女教師の智識慾の強く研究心の盛んなのは敬服の外はない。到底日本の女教師は足許にも寄らぬ様な氣がした、著者が伯林滯在中偶々ヘーゲルの百年祭が伯林大學で執行された。而して五日間に互り記念講演會が催された、著者は申込を受諾され會員として祭禮に参加し引つゞき講演を聴講することが出來た。其の講義は全く純學術講演であつたが、其の際出席者の顔振れを見ると約半数は女子であつたが、聞けばそれ等女子の大部分は小學校又は女學校の教師と云ふことであつた。著者は現在東京に於て可なり種々の學術講演會にも出席するが、右様の狀況には殆ど出會したことはない。尤も點々或は時として十名二十名位の婦人の出席を見たこともあるが、而も其の中に小學校の女教師らしい人は全く見たことはないと云つてもよい。比較的智識慾の高い東京に於てさへ、尙且つ然りである況んや

地方に於ておや。之は我が國の女教師たるものの須らく考一考更に大に反省すべきことであると思ふ。

今一つ苦言を呈しなければならぬことは、女教師は職務に對する義務心が強くないと云ふことである。勿論女教師の中にも全く教育の爲に全身全靈を献げ、老ひの身の將に到らんとするをも忘れて忠實に精勵し、地方の信望を一身に集めて居るやうな人も決して無いではない。併し、それは男教員に較べて非常に稀である。概して女教員は熱と力とに乏しい。或る小學校長が著者に話したことの中に——出來得べくは男教員が愆しい女教員はいやだ面倒だ缺席が多い。殊に既婚の女教員の如きは四人分の缺席をする。即ち、(イ)自分の事故や病氣の爲めに (ロ)親の事故病氣の爲め (ハ)夫の爲め (ニ)子供の爲めに——と余はそれを聽いて成る程だと思つた、直ちに辨護をする言葉を持たなかつた。

併し著者は漫りに女教員の缺點のみを擧げて快しとするものではない。著者は曾て女子師範學校に教鞭を取つたことも有り、女教師の眞價を了解することに於て決して人後に落ちるものではない。殊に將に東亞の天地に隆々勃興せんとする新日本の大勢に鑑み、滿洲

將來の我が國勢と女教師

に北支に中支南支に、將又、南洋に、どしどし勇飛發展しなければならぬ時代に於て、人は幾千幾億有つても足りない、正に人物飢饉がやつて來るかも知れぬ。斯かる場合に於て比較的平和な亦女子に適應した職業として國內に於ける小學校の教師は大部分女教師を以て充當すると云ふことが國策の一つであると思ふ。斯く考へて來ると問題は非常に大である。女教師の責任も亦、益々重且つ大を加ふることとなる、女教師の自重と奮勵とを俟つこと切なるものがある。斯くして女校長も遠慮なく出來、女視學も續々任命せらるゝ様にならなければならぬと思ふ。

二、若き教師と性の問題

若い人に「性」の問題が喰付いて來るのは當然又必然である。性の發現は凡ゆる生物に通じた生命の神祕である。教育者も人間である以上はこの神祕の現象から除外されることは出來ない。或はストア學派の様な禁慾生活に依つて人間の價値を高めやうとする考へが無いではない。又禪家の巖窟生活のやうな方法に依つて人生を超越して行かうとする考へ

禁慾生活は超越生活に禁物教師に

も無いではない、人に依つてはそんなことが必要であり、又貴いことであるかも知れぬが、國民普通の教育の任に當るべき教師にはそんな特殊な禁慾生活や超越生活は全然禁物である。教育者にはどこ迄も人間味と云ふものがなければならぬ。而して常に理想と現實との中間に在つて正常な生活を標準として行かなければならぬ。随つて性の問題に對しても教育者なるが爲めに特殊な條件を附せらる理由は毛頭ない筈である。社會一般の通念に従へばよいのである。然るに自分が平素愛讀してゐる谷口雅春氏監輯の『生命の教育』と云ふ雑誌があるが、昨年三月號に『若き教育者』に對する特輯號として發刊された、其の中に渡部政盛氏の『後から来る人々へ』と題し特に『中等學校、小學校の若き先生へ捧ぐ』と傍標が附してある。極めて眞摯な態度で書かれ若き教師に對しては大變箴言に充ちた言説である。處が其の中に斯んな一齣がある。

『次は戀愛や性的生活の問題であります。私は、出入り五六年間、學校教育に従事しましたが、その間師範出の新卒教員は、一人残らず卒業後三年の間に戀愛事件を醸したり性を中心としたる問題を起こしたのを見ました。その結果、職を失つたものや、然らずと

或る驚くべき裏面記事

も、それが原因を爲して、その後ウダツがあがらずに成つてしまつた者が甚だ尠くないのであります。

かう云ふ見聞をもつてゐるが故に、私は三月になり、新卒の青年教師諸君を見ますと毎年この『三年間』が腦裡に浮んで來るのであります。どうか御戒心をねがひたく思ひます。

是には『時』も『處』も示してはないが、兎に角自分は此の記事を見て實に驚いた。今の時の師範學校の新しい卒業生の裏面と云ふか真相と云ふかは斯んなものであらうか。實に由々數問題だと思つたのである。自分も可なり長い間教育界に居食し、其の間に偶々若い教師たちの性問題や風紀問題を耳にしたことは有るが、それは人間有り勝ちのこととして見遁しはせぬ迄も多くは聽流して來たのである。併しこの記事が果して事實だとすれば之を全然馬耳東風に附する迄の寛大な度量を有しないのである。教育界の爲め特に若い教師の爲めに考へなければならぬと思つたのである。

元來性の問題や風紀問題に關して非難すべきことが有つた場合は、其の罪は當事者たる

男女が連帯で負ふべきは勿論であるが、我が國で近頃性關係の墮落や、風紀問題の頻繁と成つて來たのは、近時の産業の異常なる發達と社會生活の變動とに依つて、婦人職業問題が起り、次いで婦人解放問題を併發し、其の結果、女が家庭の籬を超えて遠慮なく街頭に進出するやうに成つたことが主因を爲して居ると思ふ。詳言すれば明治維新歐米の文物を輸入し各方面に於て眞に驚異すべき發展と革新とを齎したのであるが、唯獨り婦女子だけは依然として封建時代の慎ましい習慣を家庭生活の中に墨守し、女を甚だしく壓迫した儒教や佛教の女性觀に支配されて居つたのである。それが近時の社會狀勢の變動から急に解放され、恰も崩雪を打つて女が飛び出して來たのである。其の結果反動的に今度は戀愛至上主義と云ふやうなことが臆面もなく叫ばれるやうになつた。之が男女關係を全く掻き亂したのである。今時の若き教師たちの間に性關係の問題が多くなつたとすれば矢張絮上の事情が大きな原因を爲して居ると思ふ。

風紀の維
持者

併し、如何なる事情や原因があるにせよ、教師はどこ迄も地方々々の師表として風紀の維持者でなければならぬ。西洋の方で自由戀愛だの自由結婚だの云つて居るが、事實は決

してさう無制限のものではない。一定の社會制裁が有つて働いてゐるのである。縱し西洋はどう有つても日本は日本である。無論封建時代のやうな固陋な習慣を墨守する必要はないが、日本特有の風紀の嚴肅な美風はどこ迄も維持して行かなければならぬ。況んや戀愛には必ず性慾問題が伴ひ、其の一面は「快」であるが反面は「悩み」である。「喜」でもあるが「哀しみ」でもある。そんなものゝ中に彷徨して居ると、遂に戀の捕虜と成つて自ら陶酔状態に陥つて了ふ。斯くては職務も何も手に付かぬ様になる。若き教師の最も戒心すべきは之に在るのである。それかとして戀は人性自然の發漏で、容易に制壓し得ぬかも知れぬ。さう云ふ場合には優柔不斷に曖昧の状態を持續するよりも事情が許せば、寧ろ思ひ切つて早く結婚した方がよいと思ふ。併し冀くば結婚は餘り急がぬがよい。學問に志して其の生涯を孤獨にして過したニュートンやスピノザやヒュームやカント、シヨウベンハウエル、ニーチエ、スペンサーなどの様にあれとは云はないが、少くとも卒業後五ヶ年間位は側目も振らずミツチリ勉強して欲しいと思ふ。それには餘程の志操堅固特に教育精神の旺盛といふことが無ければならぬ。

近世の大教育家の傳記を讀んで見ると、佛蘭西のルソーの様な人がないではない。彼は極めて歳若い時分から女性に掛けては甚だ不品行で、ランベルシュと云ふ三十歳の婦人に戀して以來、ヴェルソンと云ふ女、それからヴァラン夫人、マリオン夫人、更にルドルフ・レイエ、ジロオ、バツクと次ぎから次ぎへと夫人と姦通し、醜交に及ぶるなき生涯を有し、其他の不良行爲も多いに拘らず、尙且つ教育史上に於ける異彩ある人物として認められて居る。併しそれは西洋人の心の奥底に於て「類人猿」の如き性質が流れて居るから、あの様に認められたので有つて、如何に異彩ある思想を持つてゐたからとて「類人神」を目標とする我が日本であつたら必ずや歴史上から振り落され抹殺されて居たであらうと思ふ。それでも流石に西洋でも「教への神」として尊敬してゐる丈あつて、ベスタロツチ先生になると、成程チウリツヒ市の或る菓子屋の娘アンナと相愛の中となつて以來、愈々結婚をする迄二三年間に二人の文通はベスタロツチからのが三百通、アンナからのが凡そ二百通残つて居る。その手紙は一八二八年に初めて或る獨逸の新聞紙上で公にされたが、その中には所謂艶文に屬する様なのが全然ないではないが、大部分は皆高潔な精神を表現し、そ

ベスタロ
ツチ先生
とアンナ
との愛交

の手紙を讀めば、自ら天國の氣分を惹き起させるものが多い。今左に斷片的に摘録して見よう。

『あなたはあの大きな黒い瞳を持つて居らつしやる、それはあなたの心の善良さと宏大さとをすべて知らしてゐます。もし自然があなたにこの双眸を授けなかつたら、あなたは或は自然は殆ど何もして呉れなかつた、と云つてよかつたかも知れません』

『あなたも都會の生活が私等の最もよいと考へてゐる種類の教育に對してふさはしくないと考へてゐなさるので私は非常に嬉しい。私の小屋は全くそんな腐敗と悲惨のどん底から遠く離れてゐなければならぬ。私は都會の喧轟の中に居るよりも、寂しい小屋の中の方が國のために盡すことが餘計に出来る。私が田舎へ行つて近所の困つて居る人の將來見込ある子供を持つてゐるのを見たら、私はその子の手をひいて、彼を立派な國民にしよう、私の選んだミルクを彼に與へるために、私は喜んで自らは水ばかりを採らう。そして私がどんなに高貴な人格を尊敬するかを汝に知らしめよう。そしてその時、私の愛する人よ、おん身も、私が水ばかり飲んでゐるのを見て満足するでありませう。

私たちは隣人を助けるために出来るだけ自分たちの要求を喜んで制限しようではありませんか。子供等を持つ悦び、友人達の不意の訪問、あゝ此の幸福を私はこれ以上言ふことが出来ない！しかし私は唯一つの事を言つて止めなければならぬ——もし不意の出来事があつて私は自分の家の爐邊から外に行くことがあるかも知れない。又忠實なる國民としてその國の恩を報ずるのに私は遅れを取るものでない。しかし私は知つてゐる、戀人よ、私が義務を盡すことはあなたに取つても悦びであることを。」

今度はアンナからペスタロッチ氏への手紙の一齣に

「勿論私は女です。どんな不幸にも従ひます。たとひ凡ゆる困難がすつかり私の上に堆積して、一度に私を攻撃しても大丈夫です。その中にあつても無比の愉快な瞬間が私を凡ての困難から再び明るみへ引っぱり出して呉れます。そして私が、時には喜び、時には悲しみを感ずるのも畢竟するに神が私の心をいつも永遠に目覺めさせ、永劫の世界に私の心を結合させる爲めに其の賢明な攝理として遣つてゐて下さるのかと思へば、誠にその全智全能に心から私は感謝いたします。苦しむことは私に取つては良いことである

と嘗て御身が私に物語つた所であり、御身も亦それを確信されて居たことなのでせう」
 以上に依つて如何に二人の間に純眞な、又高潔な愛が通つてゐたか、略ぼ推想される。元來愛と戀とは別である、異つて居る。多くの人は之を混同して居る。戀は一人と一人との間に行はれるものである。愛にはそんな制限はない、愛は多く又は博く他にも分つことが出来る。若き教師たちよ、願はくば愛に成功して戀に亡ぶること勿れ。

第九、結 論

一、若き教師と^{みそぎ}禊の國民的復興に就いて

茲に突如禊と云ふことを持ち出したが、何んだか藪から棒のやうな感をする人もあるかも知れぬ。況してそれが教育とどんな關係を持つて居るかと疑問を懐く人もあらう。併しそれは短見である。

凡そ我が國民教育の眞髓が『日本精神』の顯現に在ることは今更論なき所である。凡ゆ

る教授訓練の方法は畢竟日本精神を涵養し之を顯現せんとする手段であると云つて差支ないのである。然るに我が國には日本精神顯修の根本的正法として禊祓と云ふものがちやんと、太古より天地創造國土民人創生の祖神伊弉諾大神に依つて垂示されて居るのである。それを我が國民は古より神習かむまらふに習ひ傳つて居たものである。されば我が國民は國民的習俗として老ひたるも若きも男も女も皆んなく禊祓そとらうを行じて居つたのであるから、特に之を教育上に取り入れる必要もなかつたのである。然るに星移り物渝るにつれて、禊、祓の慣習は漸く廢れ、今は唯其の餘瀝を纔に神事の一端に遺してゐるのみである。況んや今日の普通教育たる小學校教育は明治維新となつて歐米の制度に倣つて急速な進歩發展を遂げて來たものであるから、禊や祓など云ふものを教育の中に取り入れやうなどのことは思ひも寄らぬことと有つたのである。然るに極めて最近になつて日本精神と云ふことが頻りに叫ばるゝ様になつて、漸く又禊、祓と云ふことがそろゝ國民の意識の上に登つて來たのである。之は寔に結構なことであるが、併し之を眞に一般的國民的に復興せしめ、其の精神を徹底せしめ、我が日本民族固有の修行方法に依つて純粹な日本精神を顯現し、依つて以

て世界雄飛の新日本を建設せん爲めには、どうしても教育者の力に俟たなければならぬと思ふ。而して尙之が爲めには特に「若き教師」の覺醒を促して、先づ禊祓の主旨及び其の精神を攻究し更に之を如何にして兒童教育の上に適用するかと云ふことに就き、實際的具體的方法が攻究されなければならぬと思ふ。

抑も禊、祓とは如何なることであるか？……と云ふに

「みそぎ」とは「身滌」の義であつて、清き流れの水に潛み濯ぎて心身を清めることである。又「はらひ」とは「祓除」の義であつて心身の垢穢を拂ひ除くことである。無論それには一定の順序方式等は有るが、何れにしても其の行事は極めて素朴簡潔、又甚だ單純卑近なものと思はれぬ。併し其の眞義に至つて實に無限の深味と含蓄とを有するものである。今それを第一義から説明する餘裕を有しないが、其の目標とし理想とする處は個人的にも國民的にも清明心なるものを顯現し、以て神に近づき神明に通ずるの資格を得ようとするに在る。この目標理想と結び付いて居ない身滌や祓除は、單なる沐浴や拂拭に過ぎないのである。

さて禊、祓の起源を釋ねるに、之を傳へらるゝ神話の儘に申し述ぶることは、爰に其の餘裕を有しないのであるが、抑も禊、祓の起源は伊弉諾大神が、妹背の神なる伊弉册大神の黄泉の客となられたるを哀しみ、追ひ慕ひて自らも黄泉國に行き、伊弉册大神に逢はんとし給ふた、其の時伊弉册大神はこゝは幽冥の國にて尊の入り給ふ所にあらずと堅く入國を禁ぜられた。伊弉諾大神も夫れを諾し置きながら約を破りて窃かに這入り給へば、奚んぞ知らん黄泉は見るも忌はしき汚穢の國であつた。其の爲め尊は心身共に意外の穢を負ひ蒙られた。そこで伊弉諾大神は黄泉より還りいたく之を悔ひ給ひ、其の罪穢を禊ぎ祓ひ清めんとして、筑紫日向の橋の小戸の櫛原にて大御身に着ましし總ての物を悉くぬぎ捨て祓ひ給ひ、次いで海潮に浸りて大御身を身滌し給ふたのである。斯くて伊弉諾大神は祓、身滌を遊ばして初めて清淨の御心御身と成り給ひ、其の結果光華明彩六合に透徹し給ふ所の天照皇太神が御出生遊ばされて、そこに世界遍照の皇基が闢かれたのである。同時に神孫民族たる吾々日本國民も此の世界遍照の神意を奉行し、其の天業を翼賛し奉るべき使命を負ふに至つたのである。斯の使命のあることを忘れたら吾々神孫民族たる特殊の光榮は全

く失はれて了ふのである。そこで

明治天皇の御製にも

いすゞ川清き流れのすゑくみて

心をあらへ秋津島人

と、ある通り、日本民族は古來この禊祓の正法を神傳かむつたへに傳へ神習かむらうに習ひ行じて來たのである。而も尙不知不識の間に國民が過ち犯せる罪穢は、塵や垢のいつとなく身に降りつもる如く、いつしか日本精神を蔽ひくもらす様になると云ふことから、大祓の制度を定めて毎年六月十二月の晦日には、上は百官有司より下は萬民に至る迄總一切を祓ひ清むる式が行はれて居つたのである。

斯くして日本民族は古來清淨潔白といふことを非常に好み、朝日に匂ふ山櫻花の如き美しい麗はしい心を「清明心」と稱へて非常に尊び、それが純粹日本精神の眞髓を爲して居たのである。之に反するを「黒心」と云つていたく嫌つたものである。故に日本精神の顯現とは畢竟「清明心」の發揮に外ならぬのである。忠孝も義烈も武勇も總て其の精髓は「清

禊と八紘
一字の天

「明心」の中に含まれ此の『清明心』の中から湧き出て来るのである。所がこの『清明心』顯修の方法たる禊も奈良朝、王朝時代頃迄は相當盛んに行はれ、大祓の儀も大寶令制定の前後から延喜の朝、即ち、醍醐天皇の頃までは官民共に極めて嚴肅に行はれて居つたが、圓融天皇の頃から漸く衰微に傾き應仁の大亂以後は殆ど兵馬惶惚の巷と成つて禊も祓も全く廢絶に歸して了つたのである。然るに明治の御代となり流石に大祓の舊儀を復興遊ばされ明治四年六月に天下一般にも修行すべきよしを布告せられたが、それも其後歐米文化の壓倒的流入によつて再び影が薄くなり、大正三年三月にも内務省訓令を以て改めて大祓を勵行されることゝ成つたがそれも現時の狀況ではまだ、甚だ徹底を缺いで居るのである。

元來、禊祓の儀は畏くも天皇御躬之を行じ遊ばされ、國民も亦悉く之を行ふて一身一家より日本の全國土を祓ひ清め延ひては之を世界萬國にも及ぼして、遂ひに全世界の平和美化善化を實現せんとする遠大なる理想が包含されて居るもので、八紘一字の天業の骨髄を爲すものである。されば之を國民教育の中に取り入れて大に之を復興して以て『國民的一般修行』の根柢を築造することが企圖せられなければならぬ。而も亦之を實際的に適用す

ることに依つて一種清新の氣を兒童教育の中に導入することが出来ると思ふ。

二、品性を高めよ

固より職業に貴賤の別はないが、總ての職業が皆一樣に高尚であるとは云へない。或るものは俗である。俗必ずしも排すべきではないが高尚を貴ぶは人間の通性と云つてよい。勿論個人的に觀察すると俗な職業に従事して居る商人の中にも随分高尚な品格の高い人もあり、俗を離れた職分を有して居る學者や宗教家の中にも案外俗物がある。併し概して政治家には自ら政治家の風格があり、軍人には自ら軍人たる風格が備つて居る。之は實業家階級に就いて見ても乃至文人美術家等に於ても總てそれ／＼階級的品位風格のあることは争はれぬ。斯の點から見て國家教育と云ふ重且つ大なる任務に當つて居る小學校教師階級の品位風格なるものが、果して如何なる程度にあるか、無論個人々々の中には非常に立派な人格者として地方の人から尊敬を受けて居る人は決して尠くないのであるが、之を概して一般的に觀た時に社會の人から、果してそれ丈敬意を拂はれてゐるであらうか、思ひ爰

職業階級
と風格

に至つた時に吾々に何となく忸怩たるものあるを禁する能はないのである。

世の中の職業は實に千差萬別であるが、其の中で教育と云ふ職業程高尚なものが有るであらうか。教育は萬物の靈長たる人間そのものを對象とする職業である。就中、小學校の教師はあの無邪氣な天から今降つて來た様な純眞な兒童を相手とする職業である。之を最上級の高尚と云はずして何といふべきであらうか。それなのに其の任務に直接當つてゐる教師階級の品位風格がそれに相應せず、小學教師と云へば何だか中流若くばそれ以下の階級の様に思はれるのは何故であらうか。之は餘程深く／＼考一考すべきことで有ると思ふ。

是には色々の原因も有るであらう。其の主なものゝ一としては物質的待遇の菲薄と云ふことが挙げられやう。斯う云ふと或は教育者は須らく清貧に安んずべきで、物質の厚薄が何で人の品格に關係あるかと攻撃する人があるかも知れぬ。併しそれは屁理屈である。矢張金が潤澤であれば相當の體面も品位も保つことが出来る。素寒貧では體面もへちまもない様になる、之は何と云つても否定することは出来ぬ。それから第二には制度の缺陷を舉

教師の不
遇の原因

けることが出来る。即ち、我國の制度の上では餘りに小學校教員の地位が下げられ過ぎて居る。之は歐米諸國のと比較して見ると最も明白である。之に就いても亦或る人は官制的地位の如きは人爵である、そんなものに目を呉れるものはそれこそ俗物であるなどと反對するかも知れぬ。併しそれも穩健な議論とは云へない。矢張興へるものは興へ、据へる處には据へなければ相當な表現は出来ない。だが、以上云つた様なことは一寸俄かに匡正することは六ヶ敷、急に數百圓の月給を給したり、一足飛びに正一位勳一等に昇せることも出来ない。それかとして職務は職務である。此の貴重な任務に在る教育者が今の様な現状であることは邦家の爲め甚だ慨しい。されば吾々は出来る範圍に於て現實に即して小學校教師の地位の向上を圖ることを考へなければならぬと思ふ。

以上云ふ所を追ひ、條理を詮じつめて來ると矢張問題は根本的な地點に到達する。孔子も『君子は本を務む本立つて道生ず』と云はれて居る。この場合に於て其の務むべき本とは何であるか、それは教師其の人の『品性の修養』であると思ふ。教師の品性さへ高まれば物質的待遇を高め官制的地位の高まる道も自ら開けて來る。そこに『若き教師』の努力

教師の品
性の向上の
方法及び

點がある。斯の點に就き特に『若き教師』の留意と努力とを促したいと思ふ。品性の修養と云ふことは若き教師に限つたことではないと云ふ人もあるか知れぬが、既に性格の固まつた、間には化石しかゝつて居る様な老成教師には望んでも駄目なことである。況んや同じ品性と云つても高い品性もあれば低い品性もある。大きいのもあれば小さいのもある。高尚偉大な品性は決して一朝一夕の感激や興奮位で出来るものではない。それは出来る丈若い時から大いに心掛けて錬りに錬つて作り上げなければならぬ。而かも亦いろく用の意が必要である。

『若き教師』に對し第一に望ましいことは『生活の純潔』と云ふことである。元來教師の生涯は極めて平穩の生涯である。威名赫々の功績を建てると云ふ様なことには甚だ縁が遠い。全體じみな生涯である。富貴の希望の達せらるゝ生涯ではない、寧ろ貧乏の生涯である。併し同じ貧乏でも『情貧』と云ふことがある。人は動もすれば貧すれば鈍するものである。それでは益々品格は墮落するばかりだ、教育者たるものは幾ら貧乏しても益々情貧に安んじて身を高尚に保つことを心掛けなければならぬ。この心掛けが堅くさへあれば

自然立派な品性が成就されて来る。幸ひに教師の生活は波瀾に富まず純潔が保たれ易い。他の業務に従事すると勢ひ世の汚濁に染まれやすい。其の邊の真相は分らずに唯外見的な富貴な有様を見て他人の職業を羨ましく思ふやうでは、到底貴品ある品性を作り上げることは六ヶ敷、こゝに特に注意したいことは、高潔情貧と云ふことは單なる質素儉約と云ふことではない。自分の服装調度其他周囲のもの總てが質素の中に高尚な處が欲しい。儉約の中にも奇麗さつぱりした處が欲しい。而して、其の中に自ら『富貴も淫せず貧賤も屈せず』と云ふ氣概が含まれて欲しい。

第二には『道徳的節操』の堅持と云ふことである。——無論道徳は獨り教師に限らず、何人も之を修めなければならぬ。老若男女を問はず貴賤を論ぜず、履行すべきは道徳である。若し人に依り行はなくても宜いものであつたらそれは道徳とは云へないものである。然しながら教師は特に通常の人よりも一層嚴正に道徳を守らなければならぬ。通常の人に對しては恕すべきことも教師には恕することの出来ないことが澤山ある。人は悉く完全なものではないから、時に多少軌道を逸することを免れない。教師も人である完全無缺で

はない。故に一舉一動則に適なつて悖らないといふ譯にはいかないが、道德上に於ては常人と同様に寛大に見ることは出来ない。現に世間も教師にして少しく不道德のことがあれば、嚴重に咎めて假借する所がない。之は決して教育者に對して冷酷と云ふのではなく、それ丈教育と云ふ任務が重んじられて居るからである。されば通じて教育者階級が一番能く道德的に生活されて居ることは事實である。尤も教育者の間からも甚だ不都合な者が出たり或は瀆職事件なども有つたが、他の國民諸階級に比較して表面的にも裏面的にも矢張教育者階級が一番善い、之は十目の觀る所、十指の指す所疑ひ無き處である。併し其の道德は概して消極的の道德である、あれも慎しめ之も爲してはならぬと云ふ引込み主義の道德であつて進んで大にやると云ふ積極的な態度に甚だ乏しい。だから教育者の地位が上らない教育者階級の氣勢が引き立たぬのである。殊に教育者の間に甚だ缺けて居るのは、道德的節操を重んずると云ふこと、即ち「義理堅い」と云ふ氣風が非常に稀薄であると云ふことである。何か利害の關係のある間は大變に親密にし、又其の厚誼や恩義に感じて居る様だが一旦他に轉任でもして其の關係が離れると、全く路傍の人に接する如き態度を取

る人が甚だ少くない、寔に慨はしく感ずることが屢々ある。之は其の人の品性が堅固でないからである。之は獨り今の「若い教師」に就いてのみ云ふ譯ではなく、寧ろ現時の通弊と云ふべきものであると思ふが、併し如斯ことは若い教師の間から匡正されて行かなければ容易に改まるものではない。果して將來此の通弊が一扫され、何と云つても「義理堅い」と云ふことは教育者が一番だと云はれる様に一種の「風尚」が教育界を充滿する様なれば必ず教育者に一つの底光が出て来る。それが又馳て遠光とも成り、教育者の品位は必ず向上すると思ふ。

宗教

其の次に教師の品性を高むるに必要なことは「宗教的修養」であると思ふ。宗教とは如何なるものであるかと云ふ様な根本的議論は爰には其の違がない。一と通り常識的に考へて、佛教でも基督教でも、將又、神道でも、何でもよいから自己の精神に最も深く投合した孰れかを選んで信仰を深め、高め、固めることが肝要であると思ふ。我が國の小學校教師は一般に信仰に甚だ乏しい、就中若き教師の如き最も冷淡である、之は餘程反省すべきことと思ふ。此點に就いては尤も國情や慣習を異にするからでもあるが、歐洲諸國の教師

は非常に宗教心に厚い。凡そ何の事業を爲すにも、何の業務に従事するにも自己の精神に深刻な根柢を作るにはどうしても宗教的信仰に依らなければならぬ。信仰する所があれば貧窮に處しても惑はず、困難の中に居つても安んずることが出来る。「窮すれば亂す」とは人間の弱點である、若し教育者の中から不都合なものが出たとしたら、それは性來の悪人といふよりも何か窮する所が有つて爲したと云ふのが當つて居る。大なる不都合とまでなくとも或は志を二三にするとか、或は職務に忠實を缺くとか、總てそれ等は衷心満足し安慰する所がないからである、そこに信仰が全く必要である。

信仰のある人は從容として事に就くことが出来る、而して其の人の日常の起居動作に自ら敬虔の態度が表はれて来る、洵に奥ゆかしい人格が表現されて来る。

教師の如き一方に繁劇な職務を有する人は、宗教の教理を深く研究したり、多くの時間をこの事に費したりすることは出来ないが、機會あらば名僧智識の説法を聴いたり、或は高德の人に會つて宗教上の問題を考究することは甚だ望ましいことである。而して信じて疑はざる域に達するを得ば眞に幸である。

今一つ、教師の品格を高むる上に見通してならぬことは「趣味の涵養」と云ふことである。一層平たく云へば「教師の道樂」とも云つてよいかと思ふ。唯に教師に限らず誰でも人間には快樂がなくては生活することは出来るものでない。斯く云ふと早速反射的に教師の道樂快樂は教育の仕事そのものであると云はれるかも知れぬ。勿論それも一理ある言であるが、一方から言へば教育の仕事は教師に取りては「義務」である「重大な職務」である。教師が其の義務職務を盡す上には快樂を感ずることもあるが、又苦痛や困難も感ずることが尠くない。そこで其の義務職務を超越して、何か一つの趣味又は道樂が欲しいと思ふ。否らざれば人間としての餘裕がなくなる、教育者は何となくコセ／＼して居るとか、氣宇が狭いとか云つて下げしまるゝ奥の原因の一つは是れに在ると思ふ。教師は勿論品行方正でなくてはならぬ。併し其の品行方正と云ふことを偏狹に解釋しないで穩當に寛大に解釋してよいと思ふ。教師は決して仙人ではない、それで廣く何でもやるがよいと思ふ。處が趣味や道樂は快樂に屬するものであるから何時でも擱まれ、又、始めらるゝものゝ様に思はれるが、決してさうではない。無論同じ趣味道樂と云つても高下の別がある。教師

の求むべきものは高尚優美な且つ教育者に相應はしいものでなくてはならぬ。而してそれが何時となく児童教育の上にも善き反響を與ふるものでなくてはならぬ。之はなか／＼容易に出来るものではない。若い時から心掛けて涵養しなければ出来ない。それで教育者に相應はしいものでさへあれば何でもよいが、自己の嗜好又は氣分に最も能く投合したものを選ぶべきである。若い教師の間には音楽をやつたり、美術をやつたり或はスポーツに興味を持つたりして居る人が尠くはないが、まだ／＼なか／＼夫れが趣味化してゐないのが多い様である。唯こゝに注意しなければならぬことは、趣味道樂は動もするとそれに没頭し耽るやうになる、之は大に警戒しなければならぬ。果して教師にして適當な趣味が養はるゝと何ごとにも餘所綽々たる態度が出來てくる、之は非常に望ましいことである。

以上數項に亘り教師特に「若き教師」に對して大に品性を磨き、而して教育者の品位風格の向上を圖るべく纏述したのであるが、之は著者が多年の教育界から隠退し、全く公平無私の高所大所から國民諸相の凡らゆる階級を通觀し大觀した時、何としても教育者階級の地位が低い、隨つて品格が下つて居ると云ふことを痛感したので、敢て之を論述し且つ

希望の一端を述べた譯であるが、併し是から我が日本國民が所謂「新日本」を建設して東洋はおろか、全世界に對して眞に指導の地位に立んとするには、大に我が國民の國民的品位といふものを高め、而して、眞に世界の人から尊敬を拂はるゝ國民と成らなければならぬ。之れが爲めには、どうしても先づ第一に教育者の地位と云ふものが高まつて、國民的品性教養の原風がこゝから發現しなければ出来ないことである。斯く考へて來ると非常に重大な意味が此の間に含まれて居ると思ふのである。

三、若き教師と青年指導

今更青年指導とは如何？或は其の必要等に就き歎々するの要はないと思ふ。児童を以て次代の國民の發芽とすれば青年は正に其の生長伸展の眞芽である。國民的躍進の生命の宿る所である。されば児童教育の延長として力の之に及ぶべきは當然すぎる程當然である。併しながら児童教育の任に當れるものは固よりそれが本務である。日々其の本務を盡すだけで最早へト／＼だと云ふ様な教師には此の事を持ち出す餘地はない、自己の本務に常に

児童が發
芽なら青
年は眞芽

全身全靈を打込むと云ふことは、洵に美はしいことである。其の美はしい花だけで最早結構であるが、其の花からゆかしい香氣が發すれば一層結構と云はなければならぬ『若き教師』にして若し當然の本務以外に更に青年指導に迄餘瀝を注ぎて諄々として教化の手を差し延べることが出来たら夫れは實にゆかしいことである。然るに通觀すると今の『若き教師』たちにはそれ迄の抱負と勇氣と餘裕とを持つて居る人が甚だ少い様である。之は『若き教育』だけを責むるのは甚だ當を得ない様であるが決してさうでは無い。青年指導と云ふことは本来『若き教育』が自ら引受くべき任務であると云ふ考へがなければならぬ。何事につけても勃々として炎えつゝある青年を率ひると云ふことは、矢張青年の意氣のまだく炎え残つて居る。『若き教師』にして初て出来ることである。老婆心の中に逐ひ込められて何ごとに対しても『勿れく』『爲るなく』の教育に陥り勝ちな老成教師ではもう駄目である。青年に對しては『爲せく』『行けく』の教育でなければ本當の指導は出来ない。青年指導はどうしても青年心理のリズムに適合し而して若き魂を躍らする處が無ければならぬ、それは『若き教師』にして初て出来ることである。

元來青年には青年の矜といふものがある。此の矜を認めぬと云ふことは、伸びんとして居る眞芽を鋏でツミ切る様なものである、然るに老年の人は自己の權威の下に青年を屈從せしめ様とする傾きを持つて居る。之れでは青年を生かすことは出来ぬ。勇躍せしむることとは尙六ヶ敷、故に『若き教師』は常に青年の矜の心理を捉へ、其の矜に結び付くるに理想を以てしなければならぬ。單なる矜では動もすると亂暴となつたり墮落となつたりする。警戒はそこに在る指導の必要もそこに在る、それが青年に對しては常に前途に光明ある赫赫たる理想を與へて邁進せしめなければならぬ。同じく理想と云つても色々ある、大きな理想もあれば小さいものもある。高尚なものあれば卑近なものもある。精神的なものあれば物質的なものもある。そこで分に應じ程度に従ひ就中個性た考へて適切なる指導を與ふることが肝要であるが、如何に理想々と云つても單なる抽象的な理想を與へても何の役にも立たぬ。矢張現實に青年を動かすに足る生きくとした具體的な理想を與へて勇心勃々たらしむる處が無ければならぬ。青年の心の中から『立身出世』と云ふことを取つて除けたら最早青年の生命は無くなつて了ふ、立身出世と云へば甚だ功利的な言のやうに聽こえるが

空理空論は青年指導には何の價値もない、況んや我が皇國に於ては

一寸一分でも皇國の爲めに忠を盡したらそれが一寸一分だけの立身である。

一寸一分でも父母に孝を致すことが出来たら、それが一寸一分だけの出世である。

斯の忠孝一本の大觀念に立脚して極めて具體的な理想を與へて行かうとするには、青年道德の問題や性の問題や、職業指導の問題や一層具體化しては南米移民とは如何なるものか、滿洲移轉はどうか、北支南支への發展はどうなるか等種々なる問題が百出するであらう。それを若き教師は一々明快に説き明かし、又批判して了解せしむる所が無ければならぬ。之が爲めには平素餘程各方面に亘りて研究もし、又、常識も養つて置かなければならぬと思ふ。青年の質問や相談に對して直ちに解答に行詰まるやうでは甚だ心もとない次第である。

以上述ぶる所は多く個人指導に傾いた様であるが青年指導は決してそれ丈を以て終るものではない。更に手を廣げて團體を率ひ指導する所がなければならぬ。個人なき團體は空虚であり團體なき個人は無力である。故に個人指導と團體指導とは兩々相俟つて初て實微

を奏すべきものである、而して其の青年團をして有力なる實力團體たらしめ、地方に對しても國家に對しても聽ては其の次代を背負つて立つの抱負と氣概とを以て進ましめなければならぬ。否らされば青年の意氣を高むることは出来ない。如斯指導ぶりは若き教師にして初て出来ることである。平々凡々何もかも石橋をたゞいて橋を渡る様な指導ならば何も若き教師を俟つの要はない。それかとて敢て奇矯や冒險を欲する譯ではない、要は活潑有爲の青年を作るに在るのである。

近頃各地方に青年の「修養道場」が出現して來た。之は國家の爲めに非常に喜ばしい現象である、併し道場と云ふ様な何かの建物が無ければ指導は出来ないと云ふものでは決してない。基督の初ての垂訓は山上でされた。又、釋尊は山より下つて初て菩提樹の下で説教をされた、眞に指導の意氣さへあれば樹蔭でも鎮守の森でも神社の建物の一隅でも何處でも場所は選ぶ所ではない。場所よりも寧ろ組織である。組織よりも寧ろ精神である。果して愛國の精神に炎え皇道精神に醒むれば如何なる場所でも如何なる方法に依つても指導の實效を擧げることが出来る、何と云つても國家の將來は青年に在る。青年の無氣力や

墮落は近き將來に於ける國家の衰退を意味し、青年の體力増進と精神作興とは懸て來るべき國家の興隆を意味するは説明を要せない。斯るが故に孰れの國も青年指導に滿腔の注意を拂はない所はない。併しながら青年指導の要諦は國家の掛け聲を待つよりも青年の自奮に在る、自治に在る、若き教師にして初めて此の青年の自奮自治の中に飛込むことが出来る。之等の點に就いて我が國の青年指導はまだ大に攻究すべき餘地があると思ふ。

獨逸の如きは全く青年運動に依つて國家がねせ起しされて居ると云つてもよい、従つて獨逸青年運動の歴史は可なり古い、併し餘り古いことを述ぶる追を有しない亦その必要もない。であるが何と云つても最近に於ける獨逸青年運動の最大なるもの又其の國家に與へたる影響の最大なるものとして指すべきは「ワンダーフォーゲル」運動である。ワンダーフォーゲルとは「渡り鳥」と云ふことを意味する。而して『渡り鳥』は今や實に獨逸の青少年等に於て非常に重視すべきものであり、學校生活と相俟つて極めて重大なる國民的陶冶的效果が收められつゝあるのである。

著者が數年前獨逸の各地を漫遊するや時恰も九月の初めから十一月の末頃迄であつた。

國家を
起し
せし
る
獨逸
青年
運動

彼國では一年中最も氣候のよい季節であつた。到る處で「渡り鳥」の群に出逢つた。即ち日曜日や祭日らしい日に野や山や森や湖水のほとりなどを遠足姿の青年や少年の群を屢々見受けた。春休みや、夏休み、又、オクトーベルと稱して彼國では秋の休みもある。さう云ふ時には數日間つゞけて二十人三十人と隊を組んで糧食や天幕などを積み込んだ馬車やトラツクなどを用ひて遠く出掛ける、そして都塵を避けた自然の平野を跋涉し山嶽を登行し、名勝舊蹟を探り、自然の大空を家屋として炊餐をやつたり、輝かしい日光浴、清々しい空氣浴、清流淨地の水浴、すつばだかの體操、それからギターやマドリンを弾き鳴らし、これにシバ笛で調子を合するもあり、巧みな口笛で合奏するもありて、旅を慰さむる音樂の圍居、古い新たらしい民謡も歌はれる、又、時としては簡単な劇もやる、そして全く煙草やアルコールを抜きにした小宴が催される。『渡り鳥』に同志を誘ひ集めるスローガンに斯んなのも見當る。

日の光を浴びよ！

浩然の氣を養へ！

自然に親しめ！

傳統を取戻せ！

祖國の土に芽ぐむ魂を思へ！

國は一つ獨逸國！



渡り鳥のおもかげ

(ケルシエンユタイー夫人寄贈)



民謠を唄へ！

祖國の地理を知れ！

協力せよ！ 團結せよ！

民は一つ獨逸民族！

斯うして寄り集つた青少年等が東西南北次から次へと渡り廻つて、其の間に體力を練り情操を高尙にして精神を鍛錬する。今や『渡り鳥』は一つの獨逸名物と成つた、獨逸國內到る所の名所舊蹟の地には簡易宿泊所が設けられ、之れが爲めには宿料も汽車賃もその他一切が極めて低廉に供せられる、而して宿泊所の主事は附近の歴史や地理産業などに就いて面白く可笑しく話して聽かせる。夜が明けると各自の寢具を各自に取片付け、一同國歌を合唱して各群團はそれ／＼途を分ちて先へ續ける。

『渡り鳥』とは概略右様のものであるが、ざつと考へると近頃我が國に流行のハイキングに類似するやうで大して意義を有するものとも思はれない様だが、其の實は決してさうではない『渡り鳥』は決して單なる登山や遠足でなく、一種の青年運動であつて、而かも